新潟県埋蔵文化財調査報告書 第161集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XIV

沢 田 遺 跡 Ⅱ
桜 林 遺 跡

２００６

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XIV

沢田遺跡Ⅱ
桜林遺跡

２００６

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海東北自動車道は、新潟市の新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田自動車道と接続し、秋田県河辺ジャンクションに至る高速自動車道です。新潟県内では胎内市の中条インターチェンジまでが平成14年度に完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議（以下、国幹会議）において、日本海東北自動車道の中条－朝日間は、旧日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。その後、公団の分割・民営化に伴い、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年２月の国幹会議において、荒川－朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。日本海東北自動車道はこの地域内外の経済的な交通・流通を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送などの「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この日本海東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した『沢田遺跡Ⅱ・桜林遺跡』の報告書です。この内、沢田遺跡は平成16年度からの継続調査で、調査の結果、10世紀を中心とする製塩関連遺跡であることが分かってきました。内陸部における製塩関連遺跡の実態は未だはっきりしませんが、沢田遺跡では炉跡・集石などといった一般集落とは異なる遺構を検出したことから、居住域とは考えられず、製塩（焼き塩などの二次製塩）または塩を用いた作業の場であった可能性があります。海岸に立地し、海水から直接塩を作る一次製塩の遺跡との関係や、沢田遺跡と消費遺跡との関係など興味のあるところです。

今回の発掘調査が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々や地元区長並びに胎内市教育委員会には多大なる御協力と御援助をいただきました。また、東日本高速道路株式会社及び村上工事事務所、胎内川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成１８年３月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本書は新潟県胎内市（北蒲原郡旧中条町）大字赤川字沢田1843-1ほかに所在する沢田遺跡、同県岩船郡荒川町大字金屋字桜林1372ほかに所在する桜林遺跡の発掘調査記録である。

2　本発掘調査は、日本海東北自動車道（以下、日東道）建設に伴い、新潟県が東日本高速道路株式会社（以下、東日本高速道路）から受託したものである。調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと株式会社野上建設興業が平成17年度に行った。

3　整理作業及び報告書作成に関わる作業は、平成17年度に埋文事業団指導のもと株式会社野上建設興業がこれにあたった。本書は本文、遺物観察表、遺構・遺物実測図版、写真図版からなる。図版の縮尺はそれぞれの図版に記した。また遺物写真については実測図と縮尺を合わせた。

4　本書で表記している国家座標は、世界測地系（測地成果2000）を使用している。また標高については東京湾平均海面（Ｔ・Ｐ）を使用している。

5　出土遺物及び調査・整理・自然科学分析に係る各資料・データ類は、一括して県教委が保管・管理している。閲覧及び提供希望は、県教委に問い合わせ願いたい。

6　遺物の注記は、2005年度沢田遺跡の省略記号「05サワダ」、桜林遺跡の省略記号「サクラ」とし、出土地点や層位を続けて記した。

7　本書で示す方位は全て真北である。

8　沢田遺跡の報告遺物番号は１から始まっている。本文及び観察表・実測図版・写真図版の番号は一致している。

9　本文中の註は脚註とし、引用文献は筆者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

10　沢田遺跡の航空写真撮影はＪＴ空撮に委託した。

11　自然科学分析の内、骨同定、重軽鉱物分析、植物遺体同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、岩石肉眼鑑定については梅澤貴司（株式会社野上建設興業埋文調査部）が行った。

12　本書の執筆は、鈴木俊成（埋文事業団調査課課長代理）、小村正之（株式会社野上建設興業埋文調査部調査員）、石垣義則（同社調査員）がこれにあたり、編集は小村と石垣が行った。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章１・２Ａ・Ｂ…鈴木　　第Ⅰ章２Ａ～Ｃ・３、第Ⅲ章１・２・３Ａ・５Ｂ、要約…小村　　第Ⅱ章、第Ⅲ章２・３Ｂ・Ｃ・５Ａ、第Ⅳ章…石垣　　第Ⅲ章４Ａ…辻本崇夫　　Ｂ…金井慎司　　Ｃ…石岡智武・矢作健二　Ｄ…高橋　敦（第Ⅲ章４Ａ～Ｄ、パリノ・サーヴェイ株式会社）　　第Ⅲ章４Ｅ…梅澤

13　発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力を賜った。ここに記し、厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

伊藤　崇　　北野　博司　　田中　靖　　畑中　英二　　三浦　修平　　水澤　幸一　　水沢　辰夫
湯原　勝美　　吉井　雅勇　　胎内市教育委員会　　荒川町教育委員会　　和島村教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の方法と経過 …… 3

A　沢田遺跡 …… 3

B　桜林遺跡 …… 5

C　整理作業 …… 6

3　調査整理体制 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 8

1　地理的環境 …… 8

2　歴史的環境 …… 10

第Ⅲ章　沢田遺跡 …… 13

1　概　　要 …… 13

A　遺跡の概要 …… 13

B　グリッドの設定 …… 14

C　基本層序 …… 14

2　遺　　構 …… 18

A　記述の方法 …… 18

B　下層の遺構 …… 18

1）炉　　跡 …… 18　2）集　　石 …… 19

3）土　　坑 …… 20　4）性格不明遺構 …… 21

5）ピ　ッ　ト …… 23　6）溝状遺構 …… 24

7）河　道　跡 …… 24

C　最上層の遺構 …… 25

3　遺　　物 …… 25

A　記述の方法と分類 …… 25

1）土　師　器 …… 25　2）須　恵　器 …… 26

B　下層及び上層の遺物 …… 27

1）遺構出土の遺物 …… 27　2）遺構外出土遺物 …… 29

3）河道跡出土の遺物 …… 31

C　最上層の遺物 …… 31

4　自然科学分析 …… 32

A　はじめに …… 32

B　骨同定 …… 32

1）試　　料 …… 32　2）分析方法 …… 32

3）結果および考察 …… 32

C　炉跡覆土・焼土の分析 …… 33

1）試　　料 …… 33　2）分析方法 …… 33

3）結　　果 …… 34　4）考　　察 …… 34

D　植物遺体の同定 …… 36
1）試　　料…… 36　2）分析方法 …… 36
3）結　　果…… 36　4）考　　察 …… 36
E　沢田遺跡の集石遺構の礫組成について …… 37
1）試　　料…… 37　2）分析方法 …… 37
3）分析結果…… 37　4）考　　察 …… 38
5　ま　と　め…… 39
A　沢田遺跡出土の遺物について …… 39
B　沢田遺跡の性格と変遷について …… 40
第Ⅳ章　桜林遺跡…… 43
1　調査の概要…… 43
A　グリッドの設定 …… 43
B　基本層序 …… 43
2　遺　　構…… 44
A　概　　要 …… 44
B　各　　説 …… 44
3　遺　　物…… 44
4　ま　と　め…… 44
《要　　約》…… 45
《引用・参考文献》 …… 46
《観　察　表》…… 48

挿図目次

第１図　試掘調査位置および本発掘調査範囲図 …… 2
第２図　沢田遺跡　発掘作業状況 …… 4
第３図　沢田遺跡　現地説明会 …… 4
第４図　沢田遺跡　平成16年度調査の遺跡全体図 … 5
第５図　遺跡周辺の発掘調査成果（古代）…… 9
第６図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 11
第７図　遺構と遺物の層位概念図 …… 13
第８図　沢田遺跡　グリッド設定図 …… 14
第９図　沢田遺跡　基本層序（折込）…… 15
第10図　遺構の凡例 …… 18
第11図　遺物の分類基準 …… 26
第12図　SR1153出土椀の剥離及び煤付着状況 …… 27
第13図　沢田遺跡　重軽鉱物組成 …… 35
第14図　沢田遺跡　重軽鉱物写真 …… 35
第15図　沢田遺跡　植物遺体写真 …… 36
第16図　沢田遺跡　礫群組成 …… 37
第17図　土師器食膳具の法量分布図 …… 39
第18図　土師器食膳具のレーダーチャート図 …… 39
第19図　新潟県内の内陸部の製塩関連の遺構と遺物　42
第20図　桜林遺跡　グリッド設定図 …… 43
第21図　桜林遺跡　基本層序 …… 43

表目次

第１表　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 8
第２表　沢田遺跡　重軽鉱物分析結果 …… 35
第３表　沢田遺跡　集石遺構の礫組成と被熱の状況 …… 37

図版目次

［図版］
図版１　沢田遺跡　全体図
図版２　沢田遺跡　下層０・１・２グリッド遺構図
図版３　沢田遺跡　下層２・３グリッド遺構図
図版４　沢田遺跡　下層３・４・５グリッド遺構図
図版５　沢田遺跡　下層遺構個別図（１）炭集中・SR・SS①
図版６　沢田遺跡　下層遺構個別図（２）SS②
図版７　沢田遺跡　下層遺構個別図（３）SS③・SK・SX①
図版８　沢田遺跡　下層遺構個別図（４）SX②
図版９　沢田遺跡　下層遺構個別図（５）SX③
図版10　沢田遺跡　下層遺構個別図（６）SX④・炭集中SD・Pit・河道跡
図版11　沢田遺跡　下層１・２・３グリッド遺物分布図
図版12　沢田遺跡　下層３・４グリッド遺物分布図
図版13　沢田遺跡　最上層遺構図
図版14　沢田遺跡　出土遺物実測図（１）遺構出土
図版15　沢田遺跡　出土遺物実測図（２）遺構外出土①
図版16　沢田遺跡　出土遺物実測図（３）遺構外出土②河道跡出土　最上層出土
図版17　桜林遺跡　全体図・遺構個別図

［写真］
図版18　沢田遺跡　全体写真
図版19　沢田遺跡　下層遺構・基本層序写真
図版20　沢田遺跡　下層遺構写真（１）
図版21　沢田遺跡　下層遺構写真（２）
図版22　沢田遺跡　下層遺構写真（３）
図版23　沢田遺跡　下層遺構写真（４）
図版24　沢田遺跡　下層遺構写真（５）
図版25　沢田遺跡　下層遺構写真（６）
図版26　沢田遺跡　下層遺構写真（７）
図版27　沢田遺跡　下層遺構写真（８）
図版28　沢田遺跡　下層遺構写真（９）
図版29　沢田遺跡　最上層遺構写真
図版30　沢田遺跡　出土遺物写真（１）遺構出土
図版31　沢田遺跡　出土遺物写真（２）遺構外出土①
図版32　沢田遺跡　出土遺物写真（３）遺構外出土②河道跡出土　最上層出土
図版33　桜林遺跡　調査区全景・基本層序・遺構写真

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

日本海東北自動車道（以下、日東道とする）は、新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田県の秋田自動車道と接続する高速自動車道である。新潟県側は新潟空港～中条インターチェンジ（以下、インターとする）間が平成14年に完成している。中条インター以北は平成元年及び平成３年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する中条・荒川インター間は、平成10年４月に施行命令が出された。これを受けて、東日本高速道路株式会社[註]（以下、東日本高速道路とする）と新潟県教育委員会（以下、県教委とする）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

分布調査　　調査は県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）が平成11年度に中条・朝日インター間で実施した。調査の結果、道路法線上には８か所の遺跡（新発見も含む）と27か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。沢田遺跡は遺跡推定地２、桜林遺跡は遺跡推定地10に当たり、後述する試掘調査により新しく発見された遺跡である。

試掘調査　　沢田遺跡を含む推定地2の試掘調査は、平成13年９月20日から実施した。調査の結果、町道西条・赤川山王線の北側で遺構・遺物を検出し、検出地点の小字名から沢田遺跡として登録した。この時点で推定された本発掘調査面積は8,100㎡（5,400㎡×包含層1.5枚）である。

桜林遺跡を含む遺跡推定地10の試掘調査は、平成14年８月１日から実施した。調査の結果、町道金屋・桃崎線の両脇で遺構・遺物を検出し、検出地点の小字名から桜林遺跡として登録した。本発掘調査面積は10,200㎡である。

試掘調査後、高速自動車道早期供用のため、当面は暫定二車線部分に調査範囲を限定することが決定され、沢田遺跡の本発掘調査面積は5,600㎡（上層3,550㎡＋下層2,050㎡）、桜林遺跡は2,670㎡と修正した。

沢田遺跡 平成16年度本発掘調査　　平成15年10月１日の東日本高速道路・県教委及び埋文事業団との協議（以下、三者協議とする）で、東日本高速道路が示した平成16年度の調査要望は膨大なものであった。しかし、この調査要望も「民営化」や「事業の見直し」など諸問題を抱えている東日本高速道路にあっては確定的なものではなかった。10月８日、県教委と埋文事業団は平成16年度の受託事業について協議を行った。そして、日東道建設が決定し要望どおりの調査量が提示された場合、現調査体制ではこれに対応できないことから、民間調査機関に全面委託するという方針が出された。翌平成16年１月８日、国土開発幹線自動車建設会議が終了し、日東道は東日本高速道路で建設することが可能になった旨が文化行政課に伝えられた。２月20日に最終的な三者協議が開設され、沢田遺跡は平成16年４月から本発掘調査することとなり、調査は埋文事業団職員の管理・監督のもと民間の調査機関に全面委託することとなった。

調査範囲は町道西条・赤川山王線の道路敷も含むことから、本発掘調査を２か年に分け、道路切り廻しに必要な北側3,400㎡（上層2,450㎡＋下層950㎡）を平成16年度に、残りの2,100㎡（上層1,050㎡＋下層1,050㎡）

註）　日本海東北自動車道の事業は、日本道路公団の民営化により、平成17年10月１日に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれた。本文中では「東日本高速道路」と統一して表記する。

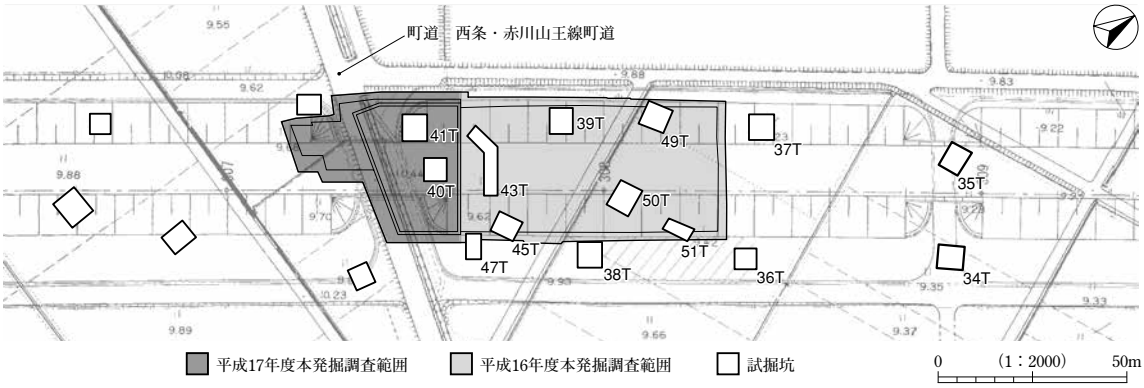
を次年度以降の調査とした。調査は４月７日から９月21日に行い、実質調査面積は下層の調査範囲拡大により4,900㎡（上層2,450㎡＋下層2,450㎡）にのぼった。調査の結果、10世紀前葉から後葉の川辺に立地する製塩関連遺跡であることがわかり、この調査に伴う報告書［熊崎ほか2005］も刊行した。

沢田遺跡道路切り廻し部の工事立会い　　平成17年度調査個所の協議は平成16年９月30日から開始された。東日本高速道路から出された調査希望箇所には沢田遺跡・桜林遺跡も含まれていた。沢田遺跡の町道切り回し工事については平成17年冬期に行う事としたが、この工事に伴い埋蔵文化財の調査が必要となった。取り扱いは切り回し道路が仮設であることと、掘削深度（排水路）が遺物包含層に達しないと推測された事から「工事立会い」とし、平成17年１月20日に埋文事業団職員が行った。立会いの結果は当初の予測通りで、掘削深度は遺物包含層まで達しておらず遺物の出土も無かった。

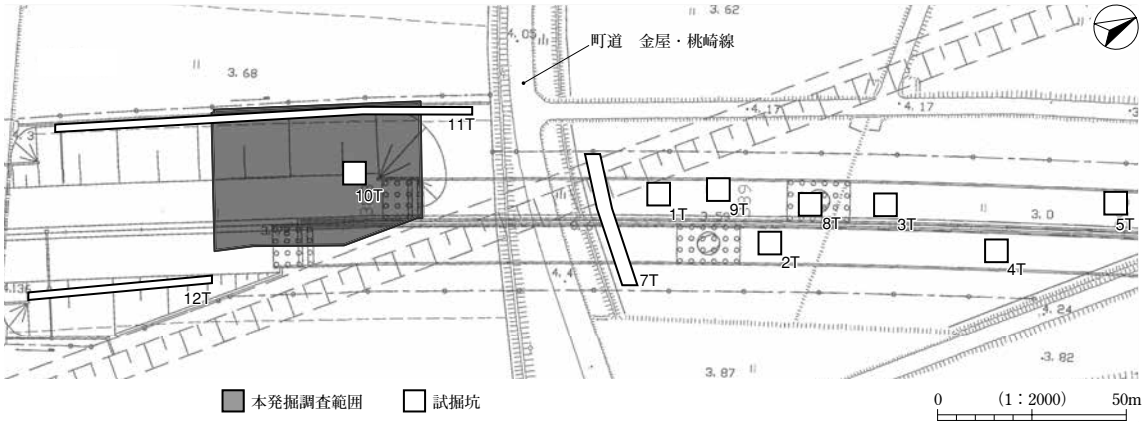
沢田遺跡・桜林遺跡 平成17年度本発掘調査　　平成17年２月17日の三者協議で平成17年度調査個所が決定された。調査は胎内市・荒川町・神林村内の９遺跡、面積にして約76,000㎡である。

沢田遺跡は、平成16年度本発掘調査範囲を除いた2,100㎡（上層1,050㎡＋下層1,050㎡）、桜林遺跡は町道金屋・桃崎線を挟んで南側が橋台、北側が橋脚にあたり、それぞれ2,290㎡と380㎡の計2,670㎡である。沢田遺跡の調査は平成17年４月から開始したが道路切り回し工事が終了した５月中旬以降本格化した。桜林遺跡については沢田遺跡終了後の９月初めから開始したが、北側橋脚については工事設計上、施工位置が決定できず、本発掘調査は次年度以降に持ち越した。

沢田遺跡



桜林遺跡



第１図　試掘調査位置および本発掘調査範囲図

2　調査の方法と経過

A　沢田遺跡

試掘調査　調査は平成13年９月20日～10月２日に行われた。調査対象面積は約68,070㎡、実質調査面積は約2,200㎡である。調査方法は、重機（バックホー）を用い、地表から最深４m前後まで掘り下げ、その間、人力で遺構・遺物の有無を精査し、土層の堆積状況も記録した。地表下約１mに炭化物を含む２枚のシルト層（Ⅵ層灰色粘質シルト・Ⅷ層黒灰色粘質シルト）が存在し、そこから10世紀代の遺物（土師器・須恵器など）が出土した。また、灰色粘質シルト下面で土坑１基、黒灰色粘質シルト下面でピット２基と骨片・魚骨（サケ科の稚骨など）を含んだ焼土範囲２基の遺構を検出した。遺物には製塩土器片26点や多量の破砕礫が含まれ、本遺跡が製塩に関連する遺跡であることを示唆するものであった［栗林 2002］。

平成16年度本発掘調査（第４図、図版１）　調査は平成16年４月７日～９月21日に行われた。調査面積は上下層２層で各2,450㎡、合計4,900㎡である。河川に面した自然堤防上に炉跡・集石遺構そして排水施設と考えられる溝状遺構が検出され、河川に向かう傾斜面には不用品の廃棄場が位置する。遺物包含層は２枚（上層・下層）確認され、上層は10世紀中葉から後葉、下層は10世紀前葉とほぼ連続する時期で、遺構内容も似るが遺構・遺物の量から中心は下層段階である。上層の遺構は炉跡５基、集石遺構１基、土坑１基、廃棄場１か所、炭化物集中部２基、ピット２基、下層は炉跡10基、集石遺構４基、土坑13基、溝状遺構６条、廃棄場３か所、炭化物集中部３基、ピット76基、性格不明遺構11基である。検出された遺構の種類や分布は当該期の一般的集落と様相を異にし、炉や集石といった施設を利用する作業場的性格を持つものである。出土遺物は下層に伴うものがほとんどで、遺構およびその周辺から土師器椀を中心とする10世紀代の遺物が出土した。そして、遺物の中には同時期のバケツ形の製塩土器片（2,231点、個体数は３～４）が含まれることから、遺構・遺物の分布や炉の構造的な分析を通し、製塩（焼き塩等の二次的なものか）や塩を必要とする作業が沢田遺跡で行われたものと推測している。また、廃棄場からはイネ・アズキ・ダイズ等といった食用植物の種子が多量に出土したが、遺跡土壌の珪藻・花粉・植物珪酸体などの各種分析からは、農耕等の痕跡は見つかっていない。出土した種子は他所から持ち込まれた可能性が高い。沢田遺跡の人たちは稲作等の農耕を目的にこの地に進出してきたのではなく、上記の作業場で行った作業に従事する目的で進出して来た可能性が高い。そして、調査範囲で検出した河道の珪藻分析から、当時の川は比較的水量の多い沼沢状河川（下層段階）から浅く止水した沼沢状河川（上層段階）、その後は急激に土砂が堆積し河道が消滅していくという変化が認められ、水上交通の利便性も遺跡の消長に影響を与えたと推測している［熊崎ほか2005］。

平成17年度本発掘調査（図版１）　平成17年４月１日から発掘準備に入り、４月中は埋文事業団との打ち合わせなどが行われた。連休明けの５月10日に、現地で発掘調査区の設定を行った。５月11日から調査区北側より第一次掘削を開始した。13日には今年度調査区北端（4Bグリッド付近）において、当初想定していなかった層位（Ⅲ層）から製塩土器の細片が集中して出土した。14日に第一次掘削を終了した。16日からサブトレンチを設定して、下位の層との関係を調査して、さらに第一次掘削終了面の遺構精査を行った。製塩土器が集中して出土している箇所はSX013と命名した。19日から遺構調査を開始し、24日に県教委の終了確認を受け、その後記録作業を行い、28日に遺構確認面となるⅣ層上面の調査を終了した。

30日から暗渠排水施設の敷設工事を開始し、工事によって発生する残土中に遺物がないかを調べた。

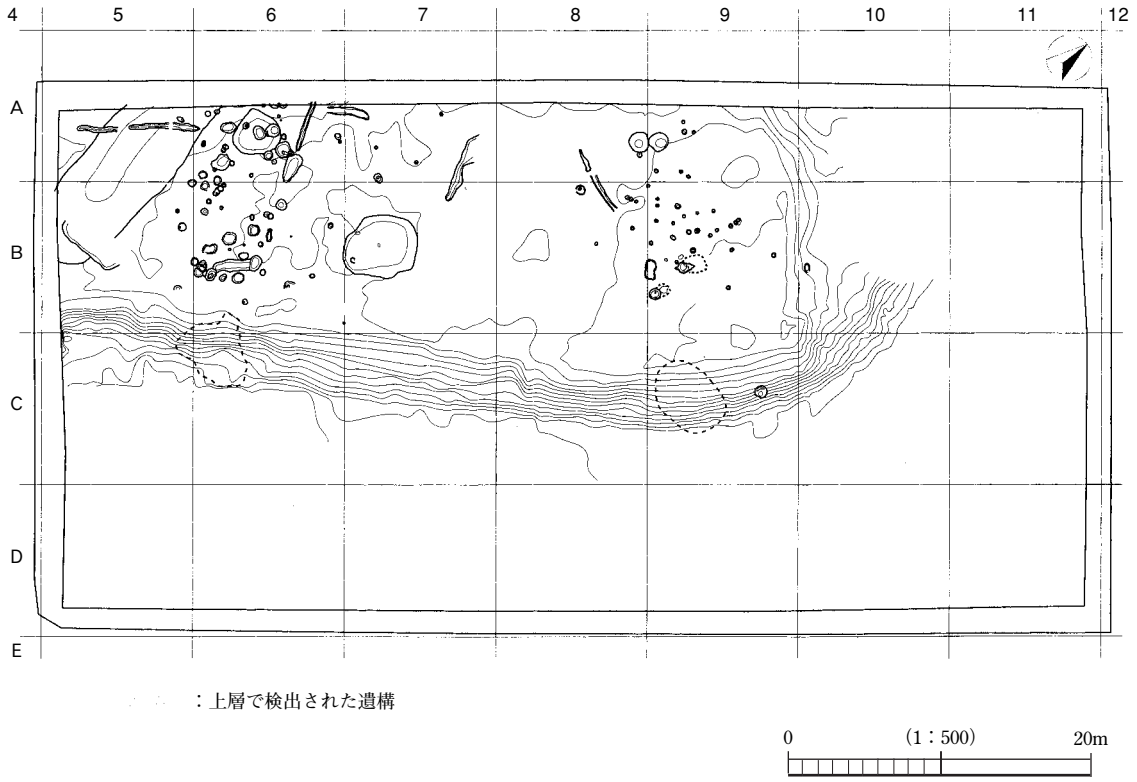
また同時にⅢ層の遺物の洗浄・注記および接合、実測データの処理を行った。6月4日から第二次表土掘削として、Ⅵ層上面まで重機で掘削した。この際、4グリッドラインに東西方向のメインベルトを設け、また調査区西側の壁面を南北方向の土層観察に用いることとした。2A・Bグリッドの北側から4A・Bグリッドの南側にかけて、遺物が散布している状況が確認された。6日には表土掘削が終了している調査区北側からサブトレンチを設けて掘削すると同時に、Ⅵ層の精査を行った。その結果、Ⅵ層からは遺構を確認することができず、遺物も少量しか出土しなかった。21日、県教委によるⅥ層調査の終了確認を受けた。22日、Ⅵ層の全体清掃、23日にローリングタワーを用いて全体写真撮影を行った。24日から28日にⅥ層の全体測量を行い、同層の調査を終えた。

29日からⅧa層の調査を開始、同層の掘削と精査、およびサブトレンチ掘削を行った。同層からは遺構が確認されず、遺物も少量しか出土しなかったため、7月5日に県教委の終了確認を受けた。6日に全体清掃ならびに全体写真撮影、7日に全体測量を行った。

8日からⅧb層の調査を開始、同層の掘削と精査、およびサブトレンチ掘削を行った。遺物の散布量は最も多く、検出される遺構も多いことから、適宜遺物を上げながらの作業となった。図面整理や写真整理といった基礎整理は、夕方や雨で現場作業が中止の時などに行っていたが、遺物の洗浄は12日から本格的に開始している。14日、調査区の南側壁面付近で遺物が多く出土し始め、調査区外へ遺跡の範囲が広がっている可能性があることから、調査区を南側へ約5m拡張することになった。19日から遺構掘削・調査を開始した。22日には通常作業のほか、現地説明会の準備を行なった。23日には現地説明会を開催した。当日は晴天に恵まれ、105人の見学者が訪れた。26日から29日に調査区南側拡張区の表土掘削を行い、30日から拡張区の精査とサブトレンチ掘削を行った。その結果、拡張区南端部のサブトレンチで、Ⅷb層中から焼礫がまとまって出土している箇所が確認され、集石の可能性があることから、8月4日、調査区を南側へさらに約5m拡張することとなった（再拡張区）。5・6日に再拡張区の表土掘削が行われ、8・9日には精査・サブトレンチ掘削を行った。その結果、拡張区と再拡張区は他の調査区と同様、Ⅵ層とⅧa層には遺構は確認されず、遺物も少量であったが、Ⅷb層からは遺物が多く出土し、遺構も炉跡や集石、土坑、性格不明遺構が検出された。しかし再拡張区の南側では遺構は確認されず、遺物もほとんど見られないことから、遺跡の範囲の南端に相当することが予想された。そこでそのことを確認するため、南側をさらに約5m拡張す

第2図　沢田遺跡　発掘作業状況

第3図　沢田遺跡　現地説明会



第４図　沢田遺跡　平成16年度調査の遺跡全体図

ることとなった（再々拡張区）。10日に表土を掘削し、Ⅵ層は遺構･遺物などを確認しながら慎重に掘削し、Ⅸ層上面まで掘削した。その結果、遺構･遺物とも再々拡張区では確認されなかった。当初の調査区では１日から調査区東側の河道にサブトレンチを掘削して、Ⅷb層の河道跡部分での堆積状況と、遺構･遺物の有無の確認を行った。20日、河道跡を除いてⅧb層における包含層ならびに遺構調査を終了した。22日、河道跡の調査を終了、Ⅷb層の全体清掃を行い、23日にラジコンヘリコプターによる同層の全体写真撮影を行った。同日、埋文事業団立会いのもと、県教委から終了確認を受けた。その際、当初予定の層位より下にあたるⅪ層でごく少量の磨耗した土師器片が出土したことから、調査区西側の標高が高い箇所について、同層まで重機で掘削して、遺構･遺物があるか最終確認をするよう指示を受けた。Ⅷb層の全体測量は23日から26日に行った。Ⅺ層の確認は26・27日に行い、磨耗した土師器片が出土したが、遺構は確認されず、河川による二次堆積の結果であることが確認された。29・30日に次の調査遺跡である桜林遺跡へ引越しを行い、そこで9月１日から30日まで、沢田遺跡の遺物の洗浄・注記・接合復元を行った。

B　桜林遺跡

試掘調査　　調査は平成14年８月１日～８月９日と、同年11月18日～11月21日に行われた。調査対象面積は約22,120㎡、実質調査面積は約802㎡である。調査方法は沢田遺跡と同様で掘削は３ｍをめどに行った。遺構はピット６基・井戸１基・土坑１基・溝５条が検出され、町道金屋・桃崎線以北に集中した。包含層は削平されているものの耕作土を中心に古代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼、近世陶磁器、砥石などが出土し、遺跡の主体時期は古代と近世である。遺構･遺物から遺跡は古代と近世の集落の一部と推定された［石川2003］。

本発掘調査　平成17年９月１日に調査区の設定と、手掘りによる試掘を行った。その結果、表土は調査区西側の農道部分を除いて確認されず、本来の遺構確認面が削平されている可能性が考えられた。調査区中央におおよそ南北方向と東西方向のメインベルトを設けた。９月１日～９月３日に表土掘削、９月３日から調査区縁辺部に排水のための開渠掘削、８日からメインベルト脇にサブトレンチを設定し、掘削を開始、また遺構精査も行った。10日から遺構掘削を開始、16日には調査中であったが、遺構は極めて少ない状況であったため、県教委から終了確認を受けた。21日には遺構調査を終了、全体清掃の後ローリングタワーによる全体写真撮影を行った。その後22日まで全体測量を行い、9月30日に発掘調査を終了した。

C　整理作業

10月１日は現場から（株）野上建設興業亀田営業所への撤収を行い、４日は整理作業のための準備を行った。５日から、現場で処理できなかった遺構実測図の修正、および平成16年度と今年度の出土遺物の接合を行った。また同時に遺物の抽出と分類も行った。24日からは遺物実測と拓本を開始した。11月７日には遺構および遺物の仮図版の作成を行い、21日からは遺物実測図のトレースを開始した。また同時に遺構実測図用のＣＡＤデータを報告書用に変換して、図面修正およびデジタルトレースを行った。遺構平面図および全体図はトータルステーションを用いてデジタル化によって作成しており、遺構断面図および集石の遺構微細図は従来からの手書き方式であるため、その双方を合わせてデータ化する作業を12月中に行った。完成したデータは、仮図版としての遺構図に組み込んだ。12月15日からデジタル一眼レフカメラを用いた遺物写真撮影を行った。明けて平成18年１月５日からは遺構・遺物図版の作成を行った。このうち、遺物実測図版は従来どおりの３倍図版台紙を用いて版下を作成した。遺構実測図版と写真図版はデジタルで版下を作成した。原稿執筆は資料収集と合わせて、整理作業の当初から随時行っていた。

3　調査整理体制

【試掘調査】

＜沢田遺跡＞

調査期間	平成13年９月20日～10月２日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　板屋越　麟一）		
管理	須田　益輝（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		専務理事・事務局長）
	長谷川司郎（	同	総務課課長）
	岡本　郁栄（	同	調査課課長）
庶務	椎谷　久雄（	同	総務課主任）
調査指導	寺崎　裕助（	同	調査課公団担当課長代理）
調査担当	小田由美子（	同	調査課主任調査員）
調査職員	小林　芳宏（	同	調査課主任調査員）
	加藤　義隆（	同	調査課主任調査員）
	長沼　吉嗣（	同	調査課嘱託員）

＜桜林遺跡＞

調 査 期 間　平成14年８月１日～９日、11月18日～21日
調 査 主 体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　板屋越　麟一）
管　　理　黒井　幸一（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）
　　長谷川司郎（　　同　　総務課課長）
　　岡本　郁栄（　　同　　調査課課長）
庶　　務　高野　正司（　　同　　総務課班長）
調 査 指 導　寺崎　裕助（　　同　　調査課公団担当課長代理）
調 査 担 当　石川　智紀（　　同　　調査課班長）
調 査 職 員　片岡　千恵（　　同　　調査課嘱託員）

【本発掘調査（平成16年度分）・整理作業】

＜沢田遺跡＞

報告書『沢田遺跡・一杯田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第144集を参照。

【本発掘調査（平成17年度分）・整理作業】

調 査 期 間　沢田遺跡　平成17年４月１日～８月31日
　　桜林遺跡　平成17年９月１日～30日
整 理 期 間　平成17年10月１日～平成18年３月31日
調 査 主 体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　武藤　克己）
管　　理　波多　俊二　（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）
　　長谷川二三夫（　　同　　総務課課長）
　　藤巻　正信　（　　同　　調査課課長）
庶　　務　長谷川　靖　（　　同　　総務課主任）
監　　督　鈴木　俊成　（　　同　　調査課日東道担当課長代理）
　　辻　　範朗　（　　同　　調査課日東道担当主任調査員）
調査組織　株式会社野上建設興業
現場代理人　小熊　晋介（株式会社野上建設興業　埋文調査部）
調 査 担 当　小村　正之（　　同　　埋文調査部調査員）
調　査　員　石垣　義則（　　同　　埋文調査部調査員）

第Ⅱ章　遺跡の環境

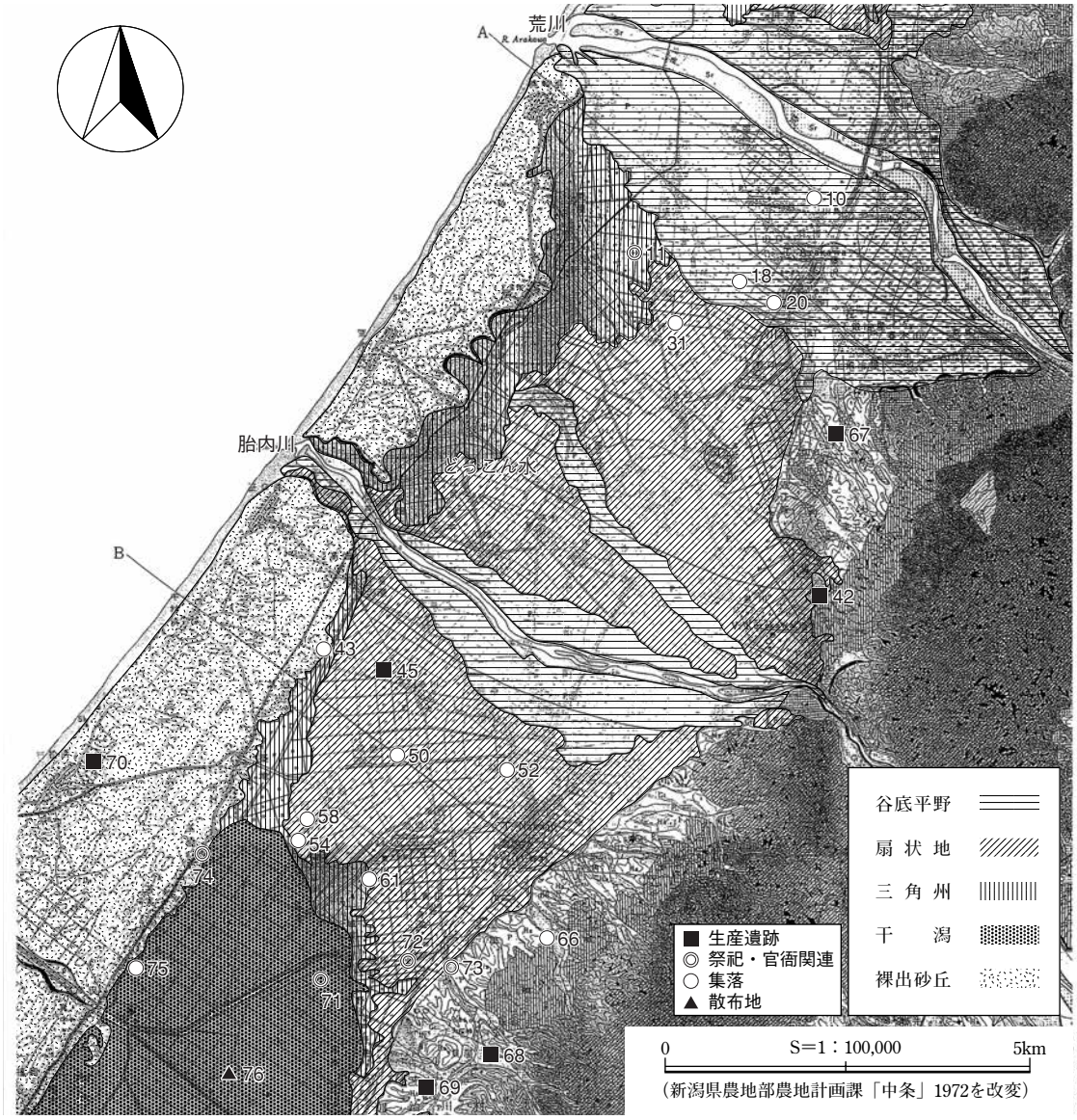
1　地理的環境

沢田遺跡は、新潟県胎内市大字赤川字沢田に所在する。胎内市は、新潟県北部に位置し、平成17年度市町村合併により、旧中条町と旧黒川村が合併して成立した行政区で、総面積265.18㎢、人口約3万4千人の自然豊かな水に恵まれた地域である［胎内市2005］。沢田遺跡から直線距離で８㎞北東へ向かったところに桜林遺跡がある。桜林遺跡は、新潟県岩船郡荒川町大字金屋字桜林に所在する。荒川町は岩船郡に属し、総面積は36.71㎢、人口は約１万１千人を有している。胎内市と荒川町は隣接し、その北東には岩船郡神林村、東には同郡関川村、南西には新発田市がそれぞれ隣接している。

これらの遺跡周辺の地形を概観すると、広大な面積を占める沖積平野は越後平野と呼ばれ、完新世に形成された若い地層である。未固結な砂・粘土・シルトおよび礫からなり、軟弱地盤を形成している［鴨井2000］。東部には南北に伸びる櫛形山地がそびえ、日本海沿いには新潟砂丘の一部である乙砂丘列と北蒲原砂丘が連なり、南部には享保18（1733）年に干拓された紫雲寺潟（塩津潟）［荒川ほか2004］が広がる。谷底平野と扇状地を形成した胎内川は日本海に流れ込む。胎内川の現河口は、明治21（1888）年の放水路開削によるもので、それ以前は乙砂丘列の背後を北流して、荒川の河口に合流していた。以前に胎内川が流れていたところには、現在では乙大日川（旧胎内川）が流れる。また胎内川の伏流水は、扇端部から湧水し、その水は地元では「どっこん水」と呼ばれ、地域住民に親しまれており、水温が低いことから水芭蕉の自生も一部で認められる［石橋1977］。この伏流水は各地に小河川を形成し、沢田遺跡の調査範囲からも古代の河道跡が検出されている。胎内川同様に、桜林遺跡の北側を流れる荒川も、谷底平野と扇状地を形成し、砂丘を分断して日本海に流れ込む。しかし、荒川の現河口は人工的なもので、『日本書紀』の大化元

No	遺　跡　名	時　　代	No	遺　跡　名	時　　代	No	遺　跡　名	時　　代
1	屋敷添遺跡	奈良・室町	27	野口遺跡	奈良・平安	53	反貫目遺跡	古墳
2	桜林遺跡	縄文・古代・室町・近世	28	名割遺跡	平安	54	西川内南遺跡	古墳・古代
3	上相子遺跡	平安	29	田屋遺跡	平安	55	中曽根遺跡	奈良・平安
4	地蔵堂遺跡	平安	30	城山遺跡	弥生・平安	56	野付遺跡	古墳・平安・中世
5	行塚遺跡	奈良・平安	31	高柳Ｂ遺跡	奈良・平安	57	駒込遺跡	古代・中世
6	中曽根遺跡	縄文・古墳・古代・室町・近世	32	高柳Ａ遺跡	奈良・平安	58	西川内北遺跡	古墳・古代
7	宮分遺跡	平安	33	大道端Ｂ遺跡	奈良・平安	59	土居下遺跡	古墳
8	赤井遺跡	平安・中世	34	大道端Ａ遺跡	奈良・平安	60	段袋遺跡	奈良・平安
9	石橋Ａ遺跡	奈良・平安	35	二ツ山遺跡	平安	61	屋敷遺跡	平安
10	田島遺跡	平安・安土	36	下野遺跡	平安	62	天野遺跡	古墳・平安・中世
11	鴨侍遺跡	平安	37	中島遺跡	平安	63	福田遺跡	古墳・平安・中世
12	舘ノ腰遺跡	奈良・平安・南北	38	宮林遺跡	奈良・平安	64	大塚遺跡	平安・中世
13	中倉諏訪ノ木遺跡	奈良・平安	39	北田遺跡	奈良・平安	65	道西遺跡	奈良・中世
14	寺田遺跡	奈良・平安	40	富岡遺跡	古墳	66	高伝坂遺跡	平安～中世
15	金屋小屋地遺跡	平安	41	切田遺跡	古代～中世	67	元山窯跡群	平安
16	古谷地Ｂ遺跡	平安	42	松山窯跡	平安	68	貝屋窯跡	古代
17	名割古谷地遺跡	縄文・平安	43	大坪遺跡	平安	69	下小中山窯跡	古代
18	坂町宮ノ腰Ｄ遺跡	奈良・平安	44	家の浦遺跡	平安	70	下原遺跡	古代
19	坂町宮ノ腰Ｃ遺跡	奈良・平安	45	沢田遺跡	平安	71	船戸川崎遺跡	古代
20	坂町宮ノ腰Ｂ遺跡	奈良・平安	46	一杯田遺跡	古墳	72	船戸桜田遺跡	古代
21	坂町宮ノ腰Ａ遺跡	奈良・平安	47	寺前遺跡	平安	73	蔵ノ坪遺跡	古代
22	古谷地Ａ遺跡	奈良・平安	48	堂前遺跡	平安・中世	74	中倉遺跡	古代
23	道端遺跡	縄文・古墳	49	六斗蒔遺跡	古墳	75	四ツ持遺跡	古代
24	乙宝寺遺跡	平安・室町	50	草野遺跡	古代	76	青田遺跡	縄文・古代
25	前谷地遺跡	奈良・平安	51	下名倉遺跡	奈良・平安・中世			
26	名割宮ノ腰遺跡	奈良・平安	52	下町・坊城遺跡	古代			

第１表　遺跡の位置と周辺の遺跡



No	遺跡名	遺跡の性格	マーク	立地	時期	備考
67	元山窯跡群	生産遺跡（窯跡）	■	荒川左岸の荒川丘陵から沖積地にのびる小丘陵南西斜面	8世紀後半～9世紀前半	
42	松山窯跡	生産遺跡（窯跡）	■	胎内川右岸の丘陵	8～9世紀	阿賀野川以北特有の高台付折縁杯
68	貝屋窯跡	生産遺跡（窯跡）	■	櫛形山脈西麓の（貝屋川によって形成された）解析谷の谷奥付近	8世紀中葉～9世紀初頭	横瓶100個体以上確認
69	下小中山窯跡	生産遺跡（窯跡）	■	櫛形山脈西麓の（貝屋川によって形成された）開析谷の開口部付近	古代	
45	沢田遺跡	生産跡（製塩関連）	■	胎内川扇状地の自然堤防	10世紀前半～後半	川辺に立地する製塩関連遺跡、製塩土器
70	下原遺跡	製塩遺跡	■	（村松浜）砂丘	古代	製塩土器・円筒支脚が出土
71	船戸川崎遺跡	集落・祭祀	◎	潟に流れ込む河口近くの旧船戸川沿	（6世紀）・8～10世紀初	土器を伴う祭祀、木製品のみの祭祀（4次）
72	船戸桜田遺跡	集落・祭祀	◎	谷間から平野部へ川が流れ出る地点の河川沿	8～10世紀初	「郷」木簡（4次調査）「符」木簡（5次調査）
73	蔵ノ坪遺跡	集落（古代の津に関連した施設）	◎	胎内川の扇状地端部	8世紀後葉～9世紀前葉（Ⅰ期） 9世紀中葉～9世紀後葉（Ⅱ期）	掘立柱建物16棟、「少目御館米五斗」木簡、「津」・「麻」墨書土器
61	屋敷遺跡	集落	○	胎内川の扇状地端部	（4世紀・6世紀）・8世紀	「山家石マ真若女」木簡・弓・馬形・盤
66	高伝坂遺跡	集落	○	胎内川左岸の丘陵	9世紀	大型建物（第3号建物跡）
50	草野遺跡	集落	○	胎内川左岸の扇状地	8世紀	物品木簡・九九木簡
54	西川内南遺跡	集落	○	海岸砂丘背後の自然堤防	8世紀後半～9世紀前半	道路状遺構
58	西川内北遺跡	集落	○	海岸砂丘背後の自然堤防	8世紀初頭	道路状遺構、橋脚と考えられる杭列検出
52	下町・坊城遺跡	集落	○	胎内川左岸の扇状地	8世紀	
74	中倉遺跡	集落・祭祀	◎	紫雲寺潟端の砂丘	8～9世紀	文書木簡4点（3次）　川沿の祭祀場所
75	四ツ持遺跡	集落	○	砂丘から潟に突き出た砂丘帯	古代（8世紀後半中心）	古代は砂丘帯の上方で確認
43	大坪遺跡	集落	○	砂丘東側縁	古代	
76	青田遺跡	散布地	▲	紫雲寺潟内	（縄文）、古代	
11	鴨侍遺跡	官衙関連	◎	荒川左岸の微高地（旧自然堤防）	9世紀中葉	円面硯、風字硯、墨書土器
20	坂町宮ノ腰B遺跡	集落	○	荒川左岸の自然堤防	8世紀前半	
18	坂町宮ノ腰D遺跡	集落	○	荒川左岸の自然堤防	9世紀前半	
10	田島遺跡	集落	○	荒川左岸の自然堤防	10世紀前半	緑釉椀（京都洛西産、10C前半）
31	高柳B遺跡	集落	○	荒川左岸の微高地（旧自然堤防）	8世紀後半	

第５図　遺跡周辺の発掘調査成果（古代）

(645) 年12月24日条の分析から、荒川河口の開削が古代に遡るとする考えもある［金子1996］。慶長２(1597) 年の絵図［東京大学史料編纂所1985］では、すでに河口が現在の位置であることが確認できる。

沢田遺跡は胎内川左岸の扇状地の河道に面した自然堤防上に立地する。桜林遺跡は荒川右岸の谷底平野に位置し、荒川の浸食作用によって形成された自然堤防上に立地する。沢田遺跡と桜林遺跡の周辺の現況標高はそれぞれ約9.6mと約3.8mである。

2　歴史的環境

第５図は土地分類基本調査図［新潟県農地部農地計画課1972］をもとに地形ごとにスクリーントーンで色分けを行い、これまでに発掘調査が行われた古代の遺跡を、遺跡の性格ごとに分類したもので、各発掘調査報告書および『越後阿賀北地域の古代土器様相』［新潟古代土器研究会2004］をもとに作成した。また紫雲寺潟の形成について重要な情報を提供する青田遺跡［荒川ほか2004］も取り上げている。第１表と第６図は、「胎内市遺跡分布図」［新潟県2005a］及び「荒川町遺跡分布地図」［新潟県2005b］を参考に、周辺の古墳～古代の遺跡の位置を示した図である。遺跡名の後には上記の図や表に共通する番号を表記する。桜林遺跡は遺構や遺物が希薄であり、遺跡としての位置づけが難しい為、以下では、沢田遺跡を中心にその周辺の歴史的環境を概観する。

古墳時代の遺跡数は少なく、古代になると遺跡数は圧倒的に増加する。古代の行政区画である沼垂郡内の様子は、10世紀に編纂された『和名類聚抄』(以下『和名抄』とする) に、足羽、沼垂、賀地の３つの郷名が記されており、沢田遺跡が立地する旧中条町周辺は足羽郷にあたると推定されている［小林1999］。

第５・６図を見ると、胎内川左岸の扇状地を中心に、砂丘背後の三角州や紫雲寺潟の端部に遺跡が分布している状況がうかがえる。生産遺跡のうち窯業遺跡（窯跡）の分布を見てみると、荒川丘陵に立地する元山窯跡群 (67) は、８世紀後半から９世紀前半の須恵器窯が７基のほかに、９世紀後半～11世紀前半の製錬炉1基、木炭窯３基、焼土炉３基が確認されている［吉井1999］。元山窯跡群生産品の供給先については、寺田遺跡 (14)［吉井1994］から出土した須恵器を蛍光Ｘ線で分析したところ元山窯跡群の製品が含まれていることがわかり［三辻1999］、当時の流通を考える上でひとつの手掛かりになろうと考えられる。ほかに、胎内川右岸の丘陵に松山窯跡 (42)［伊藤1998］、櫛形山地西麓には貝屋窯跡 (68)［川上1982］・下小中山窯跡 (69)［戸根1973］の須恵器窯が確認されている。越後を含めた古代北陸の土器生産体制は「一郡一窯体制」と言われている［宇野1994］。窯業以外の生産遺跡では、製塩関連が挙げられる。沢田遺跡 (45) の平成16年度調査範囲からは、海から約３㎞離れたやや内陸地であるにも関わらず、製塩土器が多量に出土し、焼き塩等の二次的な製塩を行っていたと推測されている［熊崎ほか2005］。この他に海岸線より0.5㎞ほど内陸に入った村松浜の砂丘に立地する下原遺跡 (70) では製塩土器と円筒支脚が出土している［水澤1996］。

次に、水系ごとの遺跡分布を見ると、旧紫雲寺潟へ流れ込む船戸川水系には船戸川崎遺跡 (71)、船戸桜田遺跡 (72) が立地し、船戸川崎遺跡からは木簡や馬形、斎串が出土し［水澤2002］、船戸桜田遺跡の調査でも河道跡から木簡が出土し、土師器椀の大量廃棄が確認された［水澤ほか2002］。中でも船戸川崎遺跡の存在意義として、船戸川と柴橋川が合流する地点を押さえることにあったと指摘している［水澤2005］。蔵ノ坪遺跡 (73) があり、「少目御館米五斗」と書かれた荷札木簡や「津」と記された墨書土器が出土し、物資集積に関わる津関連施設としての役割を果たしたと考えられている［飯坂ほか2002］。扇状地の南西端

第 6 図　遺跡の位置と周辺の遺跡

に立地する屋敷遺跡（61）からは、「山家石マ真若女」と書かれた木簡が出土している［水澤2004・平川2005］。胎内川左岸の丘陵には、9世紀代の大型建物が検出された高伝坂遺跡（66）［水澤1994］がある。大江川水系が紫雲寺潟に流れ込む胎内川左岸の扇状地には、物品木簡や「九九」木簡が出土した草野遺跡（50）［水澤2004］、道路状遺構や橋脚の痕跡と推定できる杭列が検出され、橋や道路といった交通施設が集まる「交通の要衝」であったと考えられている西川内北遺跡（58）・西川内南遺跡（54）［野水ほか2005］、また柴橋川水系には下町・坊城遺跡（52）［水澤1999c］がある。

紫雲寺潟端の砂丘東側に立地する中倉遺跡（74）からは文書木簡が４点、墨書・刻書が22点出土し、律令祭祀の様相がうかがえ、僅かに製塩土器も出土している。遺跡の立地状況や生産段階の焼損じ品（須恵器）の出土から、遺跡は物資の集積地・終着地であっただろうと指摘されている［水澤1999b］。砂丘東側には四ツ持遺跡（75）［水澤1999a］や大坪遺跡（43）［水澤1996］がある。また紫雲寺潟内には縄文時代晩期の掘立柱建物で構成される集落跡である青田遺跡（76）があり、平安時代の足跡が多数検出され、洪水により運ばれてきた木製品も出土している［荒川ほか2004］。これらの状況に加え、地震活動や液状化等から紫雲寺潟が９世紀末～10世紀初頭に形成されたことが明らかになっている［高濱・卜部2004］。

桜林遺跡の周辺の様子も見てみると、やはり古墳時代の遺跡が少なく、古代の遺跡が数多く分布する。掘立柱建物が10棟検出され、円面硯や風字硯が出土し、官衙関連の様相をみせる鴨侍遺跡（11）［吉井2002］、荒川左岸には竪穴住居を２棟検出した坂町宮ノ腰Ｂ遺跡（20）［吉井1993］、竪穴住居を１棟検出した坂町宮ノ腰Ｄ遺跡（18）［吉井2000］、緑釉輪花皿や灰釉陶器が出土した田島遺跡（10）［吉井2001］、打ち込み工法による建物跡が検出され、「夫」もしくは「天」と記した墨書土器が出土した高柳Ｂ遺跡（31）［吉井1996］などがある。

以上のことから、扇状地上の微高地（自然堤防）を縫って流れる各水系付近には、数多くの古代の遺跡が立地し、内水面交通を利用した生活の場が築かれたと思われる。また砂丘の東側にも遺跡が多く立地し、このような遺跡の在りかたは胎内市のみならず、阿賀野川以北の地域でも一般的に見られる。第５図や第６図の遺跡の分布状況からもわかるように、胎内川右岸の扇状地には遺跡の分布が見られず、乙大日川（旧胎内川）の堆積作用によって、この時期の遺跡が埋没している可能性が極めて高いと考えられている［戸根2004］。また、この地域では８～９世紀の遺跡は多く分布するが、10世紀以降の遺跡の数が減少する。10世紀前半～後半に位置づけられる沢田遺跡は、内陸の扇状地に位置しながらも、製塩土器が多く出土していることから当該期では希少な遺跡である。各水系に分布する遺跡との関わりや当時の生活及び生産・流通を明らかにしていく上で沢田遺跡は重要であると考えられる。

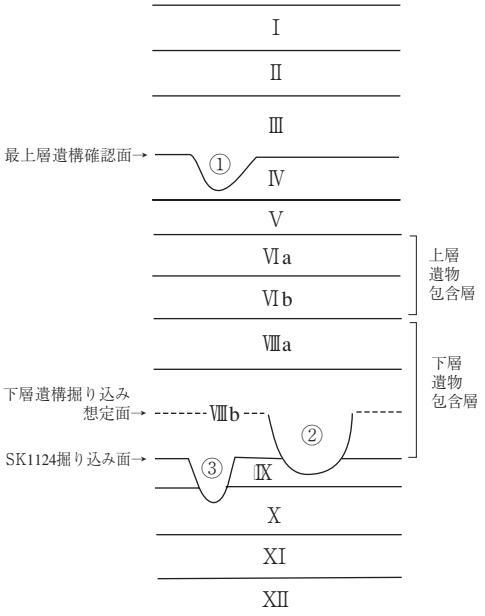
第Ⅲ章　沢田遺跡

1　概　　要

A　遺跡の概要

沢田遺跡は、平成16・17年度の２か年にわたって本発掘調査を行ってきた。このうち平成16年度調査は、上下２層の遺物包含層と、２面の遺構確認面が検出された。このうち下層（Ⅷ層）の遺構は炉跡10基、集石遺構５基、土坑13基、溝状遺構６条、性格不明遺構15基、炭化物集中部５基、ピット78基が検出された。上層（Ⅵ層）の遺構は炉跡および地床炉５基、集石遺構１基、土坑１基、性格不明遺構１基、炭化物集中部２基、ピット２基が検出された。遺物は上下層とも10世紀代の遺物で、土師器食膳具が主体となり、これに少量の土師器煮炊具や製塩土器、および須恵器の貯蔵具が出土している。

今回の調査において検出した遺構は下層（Ⅷ層）で炉跡１基、集石４基、土坑２基、性格不明遺構13基、ピット４基、溝状遺構３条である。また調査区東側は河道跡となっている。上層（Ⅵ層）では遺構は検出されていない。最上層（Ⅲ層）では性格不明遺構と溝状遺構が各１である（第７図①）。このうち下層では、遺構が調査区西側の河道斜面から自然堤防上にかけて検出されている。集石ＳＳ1141のように廃棄などの行為によって形成された遺構を除けば、その多くはⅨ層以下が安定した調査区西側の自然堤防上で確認されている。遺構確認面は、Ⅷb層下面～Ⅸ層上面であるが、調査区壁面やメインベルト付近に位置する遺構の掘り込みは、Ⅷb層中位からのものがほとんどで（第７図②）、Ⅸ層上面から掘り込まれているのはＳＫ1124のみ（第７図③）である。



第７図　遺構と遺物の層位概念図

出土した遺物は主に土師器の食膳具（杯・椀）と煮炊具（甕・鍋）、製塩土器及び製塩関連遺物、それに須恵器の貯蔵具（甕・壺・瓶類）である。このほか流木や堅果類といった植物遺体や獣骨、そして礫片も出土した。土器類はそのほとんどが包含層から出土しており、その中でも下層に相当するⅧb層からのものが大半を占めている。土器片や礫片には細かく破砕したものが多く出土している。

また破砕前の最終使用状況において、二次焼成を受けて、灰色化・赤褐色化したものや煤が付着したものが見られた。中でも土師器椀（１・34・50・51）には、通常の食膳具の使用では見られない内面の剥離痕が確認でき、これらの土師器椀は食膳具として使用されたのではなく、何かに転用したものと考えられる。しかし、今回の報告では、具体的な転用実態を明らかにすることはできなかった。これらの遺物の痕跡については、各遺物の説明で詳しく報告する。

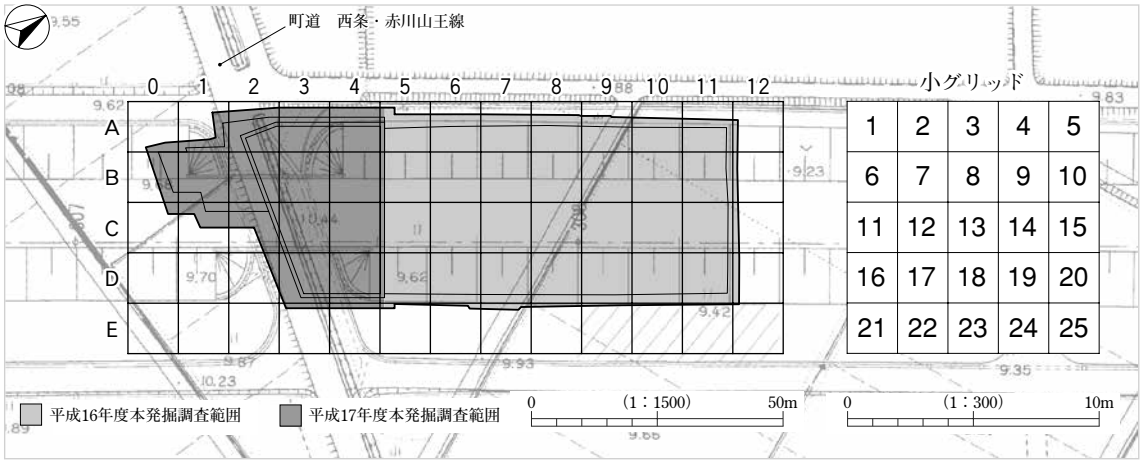
出土分布を見ると、調査区西側の標高が高い地点に多く分布しており、特に２Ａ・Ｂグリッド北側から

4A・Bグリッド南側にかけて多く集中する。このことは遺構の分布状況とも一致している。

本遺跡の遺構は2か年とも居住域を示す遺構が検出されず、炉跡や集石など、当該期の一般集落では通常見られない遺構が検出されている。遺物でも製塩土器が出土していることを考え合わせると、本遺跡の性格が製塩にかかわるものである可能性が高いと考えられる。ここで製塩の定義を考えてみると、従来から、狭義では塩水から塩分を濃縮する採鹹、さらに煮詰めて塩を取り出す煎熬までであるが、広義では一連の作業として、塩分の純度を高める精製、すなわち焼塩や固形塩作りも製塩として扱う［近藤1979］。したがって、ここでは焼塩作りも二次製塩と呼ぶこととする。

B　グリッドの設定

グリッドは、平成16年度調査の際に設定されたものをそのまま利用している。すなわち起点を世界測地系座標でX＝230067.558、Y＝77051.518として、道路法線に沿った形でグリッドの主軸を設定した。主軸方向は真北方向に対して31°51′30″東側に傾く。グリッドは大小2種類からなる。このうち大グリッドは前述の起点を「1A」グリッドと称し、主軸方向をおおむね南から北方向へ10mごとにアラビア数字で1からつけ、主軸と直行する方向は西から10mごとにアルファベットの大文字でAからつけた。なお主軸方向の基点の南側は調査区の拡張によって0グリッドとした。小グリッドは各大グリッドを2m四方で25等分したもので、南西角から北へ1・2・3・4・5とつけ、小グリッド1の東は6・11・16・21とつけた。グリッドの表記は大グリッド＋小グリッドで「1A1」とした。



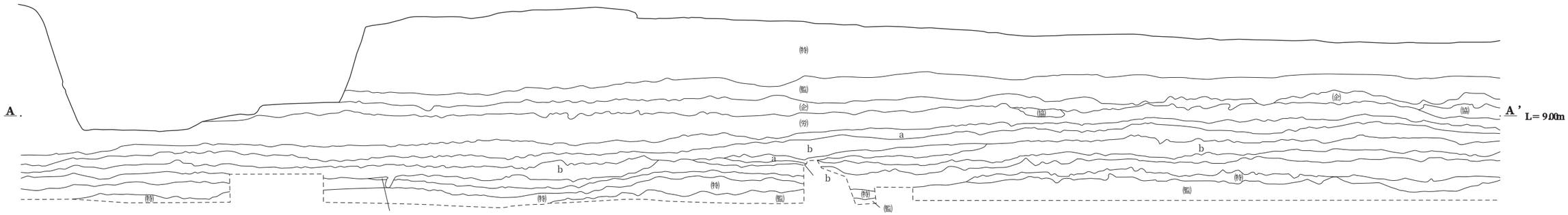
第8図　沢田遺跡　グリッド設定図

C　基本層序

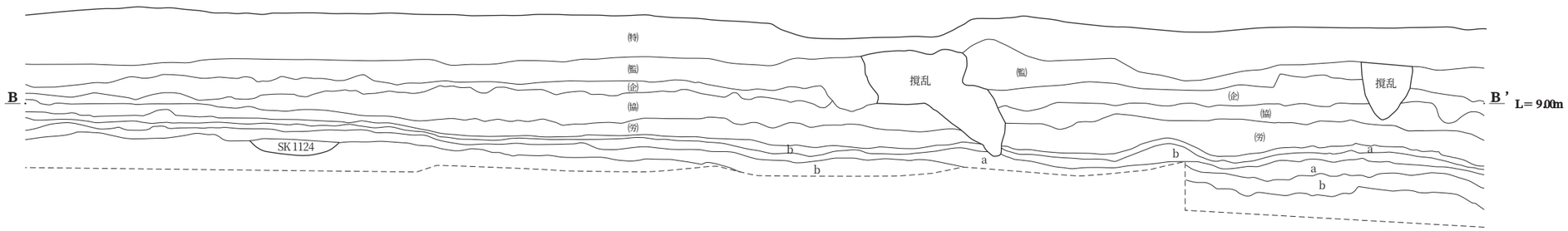
本遺跡は、胎内川によって形成された扇状地の扇端部にある。調査前の地目は水田であり、耕作土はほ場整備等によって大規模な客土が行われたことがわかっている。それはⅠ・Ⅱ層に相当する。Ⅲ層は黒色土が主体で比較的平坦である。これに対してⅧb層以下は調査区の西側と東側で大きく異なる。おそらく東側の河川によって形成された自然堤防が西側の高まりと考えられる。

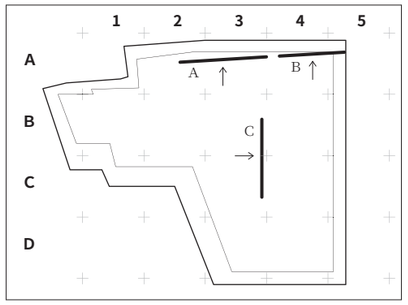
西側は標高が高く、その中でも2Aグリッド付近と4Aグリッド付近は下層の遺構確認面（Ⅸ層上面）の標高が約8.5mであり、さらに調査区外に向かって高まっていくと考えられる。遺構・遺物とも西側で検出されている。遺物包含層であるⅥ・Ⅷ層はそれぞれ上下2層に分層できるが、層の厚さが薄く、場所によって分層が困難である。Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層はいずれも河川堆積物であり、かつ自然堤防を形成する層と

調査区西壁A（調査区 西側）

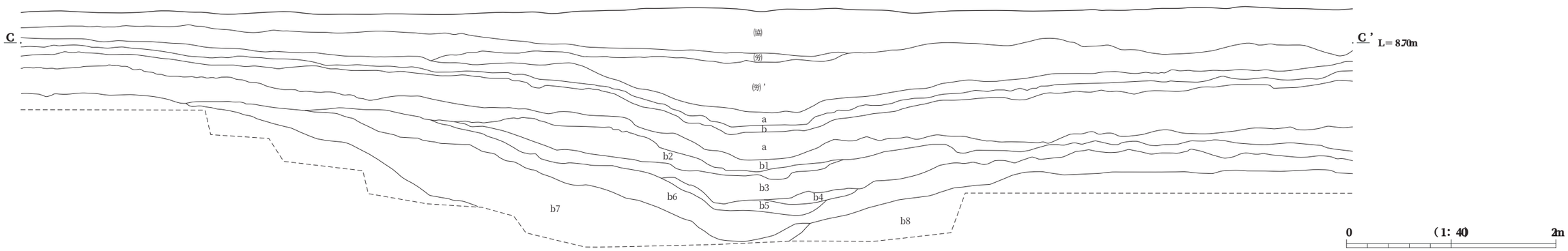


調査区西壁B（調査区 西側）





メインベルトC（調査区 東側、河道跡）



第９図　沢田遺跡　基本層序

考えられ、比較的安定した堆積を示している。このうちXI層からは磨耗した土師器細片が出土している。なお平成16年度調査の際、Ⅶ層とした土壌は今回確認できなかった。

一方東側は地形が落ち込む。各層は厚くなり、堆積物が「ガツボ」と呼ばれる腐植物層や砂層が主体となり、水の作用を受けて変質・堆積したことがわかる。このことから、調査区東側は流れの緩やかな小規模河川が存在していた可能性が高く、幾度かの洪水等によって徐々に埋没していったと考えられる。この河川は、本遺跡が機能していた10世紀代にはまだ川として流れていたが、Ⅴ層の堆積時で大部分が埋まり、規模が縮小したものと考えられる。

基本層序の土層説明の詳細は以下の通りである。

調査区西側（自然堤防上）

Ⅰ層　黒褐色（10YR3/1）砂質シルト層。締り・粘性とも弱い。水田耕作土。

Ⅱ層　灰色（N6/）砂質シルト層。締り・粘性とも弱い。一部に薄く酸化鉄分が付着している。旧水田耕作土。

Ⅲ層　オリーブ黒色（5GY2/1）砂質シルト層。締りはやや弱く、粘性は弱い。最上層の遺物包含層。

Ⅳ層　灰色（10Y6/1）シルト＋砂。互層をなす。締り・粘性とも弱い。最上層の遺構確認面。

Ⅴ層　灰色（7.5Y6/1）シルト＋暗灰色（N3/）シルト。互層をなす。V’層は灰色砂が縞状に混入する。

Ⅵa層　灰色（5Y6/1）シルト層。締りは弱く、粘性は中程度、炭化物は微量、細砂は少量含む。上層の遺物包含層。遺構は確認されなかった。

Ⅵb層　灰色（5Y5/1）シルト層。締りは弱く、粘性は中程度、炭化物はⅥa層より多く含む。上層の遺物包含層。遺構は確認されなかった。

Ⅷa層　灰色（N5/）シルト層。締りは弱く（Ⅵ層より弱い）、粘性は中程度、炭化物を少量含む。下層の遺物包含層。遺構は確認されなかった。

Ⅷb層　灰色（N4/）砂質シルト層。炭の混入により黒味を帯びる部分がある。粘性は弱く、締りは中程度。炭化物はⅧa層より多い。下層の遺物包含層。下層の遺構はこの層の下位より掘り込まれている場合が多い。ただし分層は困難である。

Ⅸ層　灰色（5Y6/1）細砂層＋灰色（5Y6/1）砂層。締りは中程度、粘性は弱い。炭化物を微量に含む。下層の遺構確認面。

Ⅹ層　灰色（5Y5/1）砂質シルト層。締りは弱く、粘性は中程度。炭化物を少量含む。自然堤防を形成する層で、比較的安定した堆積を示す。

XI層　灰色（10Y5/1）粗砂層。締りは強く、粘性はなし。川による流れ込み遺物を包含する。

XII層　灰色（7.5Y4/1）粗砂層。締りは強く、粘性はなし。小礫が少量混入する。

調査区東側（河道跡Ⅷb層は以下のように細分される）。

Ⅷb1層　暗灰色（N3/）砂質シルト層。締りはやや強く、粘性はやや弱い。西側のⅧb層とほぼ同じであるが、腐植物が少量混入する。遺物が出土している。

Ⅷb2層　黒褐色（10YR3/2）シルト＋灰色（5Y6/1）砂層。締り・粘性とも弱い。流木を少量含む。

Ⅷb3層　黒褐色（2.5Y3/2）シルト層。締り・粘性ともやや弱い。下位のほうに腐植物を多く含む。遺物が出土している。

Ⅷb4層　灰色（N5/）砂質シルト層＋灰色砂層。締り・粘性ともやや弱い。流木を含む。

Ⅷb5層　暗灰色（N3/）砂質シルト層。締り・粘性ともやや弱い。流木や腐植物を非常に多く含む。

Ⅷb6層　暗灰色（N3/）砂質シルト層＋極暗褐色（7.5YR2/3）シルト層。締り・粘性ともやや弱い。腐植物を含む。

Ⅷb7層　灰色（N4/）砂質シルト層。締りはやや弱く、粘性は弱い。腐植物を含む。遺物を包含する。

Ⅷb8層　灰色（5Y6/1）シルト層。締りはやや弱く、粘性は弱い。腐植物を少量含む。Ⅸ層に相当する可能性も考えられるが、河道の西側では確認されていない。

2　遺　　構

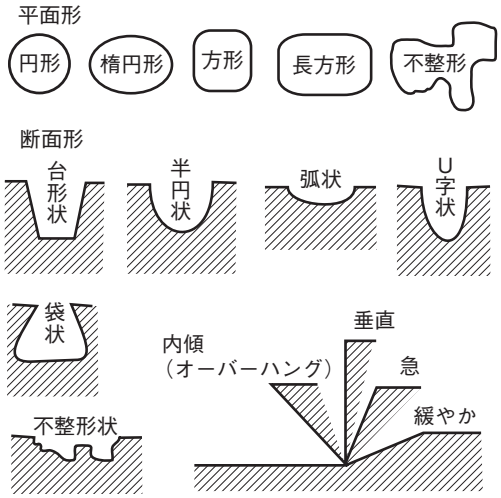
A　記述の方法

検出した遺構は遺構の種別に関係なく、平成16年度からの通し番号とした。このうち下層は４桁の番号を付けた。平成17年度調査の遺構番号は1124～1153である。また確認した時点で遺構として番号をつけたが、調査の結果遺構でなかったものについては、その番号は欠番となっている。最上層は平成16年度の上層より上の層に相当するが、遺構番号はその続きの013・014とした。それぞれの遺構番号の前には遺構種別を示す略号を付した。

遺構種別の略号は以下の通りである。

SR：炉跡、SS：集石、SK：土坑、SX：性格不明遺構、P：ピット、SD：溝状遺構

本文を記述する際に、遺構の平面および断面の表記は和泉Ａ遺跡［荒川ほか1999］に準拠し、断面形に不整形状を加えた。



第10図　遺構の凡例

平面形態

円　　形：長径が短径の1.2倍未満のもの。

楕 円 形：長径が短径の1.2倍以上のもの。

方　　形：長軸が短軸の1.2倍未満のもの。

長 方 形：長軸が短軸の1.2倍以上のもの。

不 整 形：凸凹で一定の平面形を持たないもの。

断面形態

台 形 状：底部に平坦面を持ち、壁が垂直よりは緩やかに立ち上がるもの。

弧　　状：底部に平坦面を持たない皿状で、壁が緩やかに立ち上がるもの。

半 円 状：底部に平坦部を持たない椀状で、壁が急角度に立ち上がるもの。

Ｕ 字 状：確認面の長径・長軸より深さの値が大きく、壁がほぼ垂直に立ち上がるもの。

袋　　状：確認面の径よりも底部の径が大きく、壁が内傾して立ち上がるもの。

不整形状：底面に凹凸を持ち、壁が垂直より緩やかに立ち上がるもの。

B　下層の遺構

1）炉　　跡

今年度の調査で検出された下層の炉跡は１基である。

SR1153（図版２、図版５、図版20）

本遺構は1B25、2B16・21グリッドで検出され、確認面の標高は8.1mである。本遺構は調査区の南側を二度にわたって拡張した結果、隣接するSS1151などとともに焼礫が少量散布している状況で検出された。平面形は長軸81㎝、短軸80㎝の隅丸方形である。確認面からの深さは６㎝、断面形は浅い弧状である。遺構確認面と遺構底面はともにⅧb層中にある。覆土は３層からなり、いずれも炭化物粒が、さらに１・

２層には焼土粒が混入する。底面は厚さ１㎝程度が被熱によって赤化している。このことから、本遺構は火を用いた可能性が高い。しかし、遺存状況があまり良くないため、地床炉か石囲いもしくは石敷きの炉であったかについてと、その用途は不明である。ただし、覆土１・２層の重軽鉱物分析の結果、胎内川流域の砕屑物と同じ組成であることから、珪藻土等の搬入物を用いて構築してはいない（第Ⅲ章４Ｃ）。本遺構と北側に隣接するＳＳ1151との関係であるが、両遺構は検出面がほぼ同一であり、切り合い関係も見られないこと、土師器甕の小型品（２）は両遺構の同一面から出土した破片が接合していることから、両遺構には関連性があると推定できる。この場合、ＳＳ1151が廃棄行為によって形成された集石ならば、ＳＲ1153で使用された焼礫を一時的においた場所がＳＳ1151であると考えられる。しかし、ＳＳ1151が石敷き炉の場合は、遺構として一体のものなのか、それぞれ別の遺構が関連性を持つものなのか、遺構の検出状況からは把握できなかった。またＳＳ1151の北側に炭化物の集中する箇所が検出された。炭化物層は１㎝未満で、掘り込みは検出されなかった。これらも周辺に火を使用した痕跡が認められるのがＳＲ1153だけであること、検出面がＳＲ1153やＳＳ1151と同一レベルにあることから、一連の遺構群とも考えられる。遺物は土師器５点、礫14点が出土している。

２）集　　石

今年度の調査で検出された下層の集石は4基である。

ＳＳ1151（図版２、図版5、図版20）

本遺構は２Ｂ16・21・22、２Ｃ１グリッドで検出され、確認面の標高は8.1mである。本遺構は調査区南側の拡張の際、サブトレンチ内に焼礫が数点まとまっているのが確認され、再拡張時にＳＲ1153とともに検出された。集石の範囲は礫・土器片の分布から長軸140㎝、短軸60～75㎝と推定される。掘り込みは確認されず、礫はⅧb層中に分布する。礫の本来の大きさは、握り拳大より大きく人頭大より小さい。礫はほとんどが１段で、礫と礫の間にわずかに炭化物粒が見られる。礫は97点出土しており、このうち81点について観察したところ、被熱した礫は80点である。それらの礫のほとんどはひび割れているが、他の集石と違って分散していない。また礫表面は赤や黒に変色し、炭化物の付着も認められる。また礫の石材もほかの集石と違って、花崗岩系が半分以上を占める。このことから、本遺構が廃棄行為によって形成された集石ではなく、敷石炉である可能性も考えられる。本遺構の南側に隣接しているＳＲ1153と、ほぼ同一時期に存在していたと推定される。遺物は前述の礫のほかに土師器が１点、礫と礫の間から出土している。

ＳＳ1135（図版３、図版７、図版21）

本遺構は３Ｂ22、３Ｃ２グリッドで検出され、確認面の標高は8.0mである。本遺構は、Ⅷb層掘削中に礫が少量まとまった状態で検出され、堆積した土を除去して集石の範囲を確認した。その結果、集石の範囲は礫・土器片の分布から東西約60㎝、南北約100㎝と推定され、平面形は楕円形である。掘り込みは確認されていない。礫片は部分的に２段に重なっている。礫片136点が出土し、そのうち123点には被熱により、破砕、礫表面の亀裂、赤変、黒変、脆弱化、炭化物やタール状物質の付着が認められた。また礫の石材は砂岩が半分以上を占める。本遺構は、被熱によって破砕した礫が主体であることと、礫の下からは被熱による赤化が認められなかったことから、周辺の遺構にともなう礫が捨てられて、集石が形成されたとも考えられる。しかし、集石の範囲が楕円形にまとまっていることを考えると、単なる廃棄行為によって形成されたとも言い難いことから、敷石炉の可能性も考えなければならない。この場合、礫の下に被熱面は形成されず、礫上面が被熱していると考えられるが、遺構の埋没過程で礫が多少なりとも動いており、また

両面が被熱しているものも見られることから、断定することはできなかった。遺物は前述の礫のほか、土師器片４点が礫と礫の間から出土している。

ＳＳ1136（図版３、図版７、図版21）

本遺構は３Ｂ18・23グリッドで検出され、確認面の標高は8.0mである。本遺構は、Ⅷb層の層厚を確認するためのサブトレンチ掘削中に礫がまとまった状態で検出され、堆積した土を除去して集石の範囲を確認した。集石の範囲は礫片・土器片の分布から東西約100㎝、南北約100㎝の規模が推定され、平面形は円形である。掘り込みは確認されていない。礫は全体的に１～２段になっているが、一部３段に重なっている部分があり、ＳＳ1135より礫片が密に分布している印象を持つ。礫片356点が出土し、72点について観察したところ、65点は被熱により、破砕、礫表面の亀裂、赤変、黒変、炭化物の付着が認められた。また礫の石材は砂岩が半分以上を占め、花崗岩系は10％に満たない。本遺構は、被熱によって破砕した礫が主体であることと、礫の下からは被熱による赤化が認められなかったことから、周辺の遺構にともなう礫が捨てられて、集石が形成されたとも考えられる。しかし、集石の範囲が円形にまとまっていることを考えると、単なる廃棄行為によって形成されたとも言い難いことから、敷石炉の可能性も考えなければならない。この場合、礫の下に被熱面は形成されず、礫上面が被熱していると考えられるが、遺構の埋没過程で礫が多少なりとも動いており、また両面が被熱しているものも見られることから、断定することはできなかった。遺物は前述の礫のほか、土師器３点が礫と礫の間から出土している。

ＳＳ1141（図版３、図版６、図版21）

本遺構は３Ｂ13～15・18～20グリッドで検出され、確認面の標高は8.2～8.4mで、河道跡へ向かう緩やかな傾斜地で検出された。本遺構は、Ⅷb層の層厚を確認するためのサブトレンチ掘削中に礫がまとまった状態で検出され、堆積した土を除去して集石の範囲を確認した。ＳＳ1135・ＳＳ1136とは異なり、集石の範囲が広く、礫・土器片の分布から東西約2.9m、南北約3.3mの規模が推定される。掘り込みは確認されていない。河道上に堆積したⅧb層の上面に礫や少量の土器片が分布している。礫は全体的に１～２段になっており、一部３段に重なっている部分がある。礫片395点が出土し、88点について観察したところ、87点が被熱により、破砕、礫表面の亀裂、赤変、黒変、炭化物やタール状物質の付着が認められた。また礫の石材は砂岩が半分以上を占める。本遺構は、被熱により礫が破砕しているが、多量の炭化物や焼土が伴って検出されていないため、炉跡とは考え難く、周辺の遺構にともなう礫が捨てられて、集石が形成されたと考えられる。また位置関係から、本遺構の西側に隣接するＳＸ1140との関連性も考えられる。遺物は前述の礫のほか、土師器２点が礫と礫の間から出土している。

３）土　　坑

今年度の調査で検出された下層の土坑は２基である。

ＳＫ1124（図版４、図版７、図版21・22）

本遺構は４Ａ８・９グリッドで検出され、確認面の標高は8.6mである。遺構の周辺は、遺物が多く散布していた。平面規模は径100㎝以上で、遺構の大半は調査区より西側に存在する。確認面からの深さは26㎝以上である。遺構掘り込み面は、調査区西側壁面の断面からⅧb層下面もしくはⅨ層上面である。底面はⅨ層下面もしくはⅩ層上面に達している。覆土は２層に分層され、いずれの層も砂質分を含み、炭化物粒の混入が見られる。遺物は土師器25点（うち製塩土器１点）、須恵器３点、礫１点、粘土塊３点が出土している。土師器杯・椀が比較的多く、とくに覆土１層中に全体的に分布している。また覆土１層からごく

少量であるが焼けた魚骨の細片が出土しており、食物残滓の可能性がある。

SK1150（図版２、図版７、図版22）

本遺構は１Ｂ５・10、２Ｂ１・６グリッドで検出され、確認面の標高は8.4mである。平面形は長軸113㎝、短軸102㎝のほぼ円形、遺構確認面からの深さ19㎝、断面形は台形状である。遺構確認面はⅧb層中、遺構底面はⅧb層下位である。覆土は３層に分層され、炭化物粒の混入が認められる。遺物は土師器３点、礫２点がいずれも１層上位から出土している。

４）性格不明遺構

今年度の調査で検出された下層の性格不明遺構は13基である。この中で特筆すべき点は、調査区西側に設けた暗渠排水溝に沿って、３基の大型遺構（SX1125・1128・1129）があったことである。いずれも遺構の長軸方向の中央部を暗渠排水溝によって切られており、当初は暗渠排水溝によって地面が沈下した結果、このような落ち込みが形成されたと想定していた。しかし暗渠排水溝によるものであるならば、断続的に楕円形に落ち込むのは不自然であると考え、性格不明遺構として調査を行った。

SX1125（図版４、図版７、図版22）

本遺構は４Ａ７・８・11～13グリッドで検出され、確認面の標高は8.4mである。遺構の長軸方向は暗渠排水溝によって切られており、遺存状況は悪い。平面形は長軸推定337㎝、短軸241㎝の楕円形、遺構確認面からの深さ50㎝以上、断面形は台形状と推定される。遺構確認面はⅨ層上面、底面はⅪ層中に達する。覆土は４層に分層され、砂質分に富み、炭化物粒をわずかに含む。遺物は土師器17点、土製品（支脚）１点、礫８点、粘土塊１点が出土している。遺物分布状況は土師器椀・甕が主に覆土１・２層に分布し、いずれも遺構の端部より中央部の方が出土レベルは低くなる。遺物の分布密度は端部から中央部に向かって低くなる。

SX1126（図版３、図版８、図版22）

本遺構は２Ａ15、３Ａ11グリッドで検出され、確認面の標高は8.4mである。平面形は暗渠排水溝やサブトレンチで切られ全容は不明、確認面からの深さは14㎝、断面形は半円状と推定される。遺構確認面はⅧb層中、底面はⅨ層である。覆土は単層で砂質シルトが主体となり、炭化物粒を含み、ＳＸ1128の覆土との区別が容易である。したがって、遺構の検出は比較的判断しやすく、断面もはっきり確認できる状況であった。新旧関係はSX1128より新しい。遺物は覆土上位から土師器４点、礫１点が出土している。本遺構は隣接しているSX1134と覆土、遺構の形態が似ているため、同一の遺構と考えられるが、報告書では個々の遺構として掲載する。

SX1128（図版３、図版８、図版23）

本遺構は２Ａ９・10・14・15・20、３Ａ６・11グリッドで検出され、確認面の標高は8.3～8.5mである。遺構の長軸方向は暗渠排水溝によって切られており、遺存状況は悪い。平面形は長軸推定400㎝、短軸250㎝の楕円形、遺構確認面からの深さは70㎝以上、断面形は台形状と推定される。遺構確認面はⅨ層上面、底面はⅪ層中に達する。覆土は４層に分層され砂質分に富む。新旧関係はSX1126・1134より古い。遺物は土師器23点（うち製塩土器１点）、須恵器２点、礫８点が出土している。遺物は覆土１・２層に分布し、いずれも遺構の端部より中央部のほうが出土レベルは低くなる。遺物の分布密度は端部から中央部に向かって低くなる。

SX1129（図版３、図版８、図版23）

本遺構は３Ａ８～10・13～15グリッドで検出され、確認面の標高は8.5mである。遺構の長軸方向は暗渠排水溝によって切られており、遺存状況は悪い。平面形は長軸推定390㎝、短軸250㎝の楕円形、遺構確認面からの深さは43㎝以上、断面形は台形状と推定される。遺構確認面はⅨ層上面、底面はⅪ層中に達する。覆土は４層に分層され、砂質分に富む。遺物は土師器が１点、２層の下位から出土している。

SX1133（図版３、図版８、図版23）

本遺構は３Ａ17・18・22・23グリッドで検出され、確認面の標高は8.6mである。平面形は長径148㎝、短径134㎝の不整円形である。確認面からの深さは９㎝、断面形は弧状を呈し、底面に不規則で高低差がそれほど目立たない凹凸を持つ。遺構確認面はⅧb層中、底面はⅨ層である。覆土は単層で、砂質シルトが主体であるが、焼土粒や炭化物粒を含んでいる。覆土下位に被熱層及び床面に焼けた痕跡がないため炉跡とは考え難く、焼土を含む土壌が自然の落ち込みに堆積したとも考えられる。遺物は礫２点が覆土上位から出土している。

SX1134（図版３、図版８、図版23）

本遺構は２Ａ14・15・19・20グリッドで検出され、確認面の標高は8.4mである。平面形は暗渠排水溝やサブトレンチで切られているため不明、確認面からの深さは11㎝、断面形は半円状と推定される。遺構確認面はⅧb層中、底面はⅨ層である。覆土は単層で砂質シルトが主体、炭化物粒を含み、ＳＸ1126同様、本遺構とＳＸ1128との区別は明瞭で、断面もはっきり確認できる状況であった。新旧関係はＳＸ1128より新しい。遺物は覆土の上位から、土師器６点が出土している。

SX1138（図版３、図版９、図版24）

本遺構は、３Ｂ６～８・11・12グリッドの河道跡へ向かう緩やかな傾斜地で検出され、確認面の標高は8.5mである。平面形は長径232㎝、短径217㎝の不整円形である。確認面からの深さ13㎝、断面は弧状である。確認面はⅧb層中、底面はⅨ層である。覆土は３層に分層され、３層とも砂質シルトが主体である。１・２層は炭化物粒のほか、焼土粒、細骨片を含むため、遺構の検出、分層ともに比較的容易であった。しかし３層はⅧb層に似ているため、分層および遺構の平面プランを確認するのに時間を要した。覆土下位に被熱層及び床面に焼けた痕跡がないため炉跡とは考え難く、遺構も傾斜地に立地することから、焼土を含む土壌が落ち込みに堆積したとも考えられる。遺物は覆土１層より土師器14点、須恵器１点、礫21点が出土している。

SX1139（図版３、図版９、図版24・25）

本遺構は２Ｂ14・15・19・20グリッドで検出され、確認面の標高は8.1～8.4mである。ＳＸ1138同様、河道跡へ向かう緩やかな傾斜地で検出された。平面形は暗渠排水溝で切られているが、長径182㎝、短径161㎝の円形、確認面からの深さ13㎝、断面は弧状である。確認面と底面はともにⅨ層である。覆土は２層に分層され、このうち１層は炭化物粒を多量に含むため、地山との区別が容易である。したがって、遺構の検出は比較的判断しやすく、断面もはっきり確認できる状況であった。しかし、２層は砂質シルトが主体で、Ⅷb層に似ているため、遺構の平面プランを確認するのに時間を要した。遺物は覆土１層より土師器８点、須恵器２点、礫６点が出土した。

SX1140（図版３、図版９、図版25）

本遺構は３Ｂ４・５・９・10・14・15グリッドで検出され、確認面の標高は8.5mである。平面形は試掘トレンチ41に切られているが、長径267㎝、短径は150㎝以上、平面形は不整楕円形と推定される。確認面

からの深さ８㎝と非常に浅く、断面は弧状である。確認面はⅧb層、底面はⅨ層にある。覆土は単層、砂質シルトが主体で、炭化物粒を多量に含み、焼土粒、細骨片を微量に含んでいる。新旧関係はSD1142より古い。遺物は覆土上位より、土師器51点、須恵器６点、礫片142点が出土している。

SX1143（図版３、図版10、図版25）

本遺構は３Ｂ２グリッドで検出され、確認面の標高は8.5mである。長径は73㎝、遺構の東側はサブトレンチによって切られているため、平面形は不明、確認面からの深さは11㎝、断面形は底面に凹凸を持つため不整形である。確認面はⅨ層上面、底面は一部Ｘ層に達している。覆土は単層で、砂質シルトを主体にして、炭化物粒を少量含んでいる。遺物は土師器１点、礫２点が覆土上位から出土している。

SX1146（図版４、図版９、図版26）

本遺構は３Ａ25、３Ｂ５、４Ａ21・22、４Ｂ１グリッドで検出され、確認面の標高は8.5mである。遺構の東側は一部サブトレンチによって切られている。平面形は長径288㎝、短径235㎝の楕円形、確認面からの深さ15㎝、断面形は弧状である。確認面と底面はともにⅨ層である。覆土は２層に分層され、砂質分と炭化物粒の混入が認められる。遺物は土師器３点が覆土上位から出土している。

SX1147（図版４、図版９、図版26）

本遺構は４Ｂ３・４・８・９グリッドで検出され、確認面の標高は8.2～8.3mである。遺構の南側は一部試掘トレンチ41に接している。平面形は長軸208㎝、短軸188㎝以上の不整形、確認面からの深さ12㎝、断面形は弧状である。確認面と底面はともにⅨ層である。覆土は２層に分層され、炭化物粒の混入が認められる。遺物は出土していない。

SX1152（図版２、図版10、図版26）

本遺構は１Ｂ９・14グリッドに位置し、確認面の標高は8.5mである。平面形は長径78㎝、短径56㎝の楕円形、遺構確認面からの深さは４㎝、断面形は浅い弧状で、底面中央部がわずかに高まる。遺構確認面と遺構底面はともにⅧb層中にある。遺構確認面付近では、土師器を主体とした遺物が散布している。覆土は単層で、炭化物粒と焼土粒が混入する。遺構の東側は河道跡に向かって傾斜しており、長さ250㎝以上、幅150㎝以上、厚さ２㎝にわたって炭化物粒を主体とする炭集中４が確認され、ここにも土師器の細片が散布している。本遺構は炉の可能性が考えられるが、被熱面が確認されなかったため、性格不明遺構とした。遺物は土師器９点が覆土上位から出土している。

５）ピ　ッ　ト

今年度の調査で検出されたピットは４基である。

P1127（図版３、図版10、図版26）

本遺構は２Ａ20、３Ａ16グリッドで検出され、確認面の標高は8.4mである。平面は直径22㎝の円形、確認面からの深さ35㎝、断面形はＵ字状である。確認面はＸ層、底面はⅪ層中である。覆土は２層に分層され、１層は砂質シルトが主体で、炭化物粒を含み、２層はⅨ層の土に30％ほど１層の覆土が混入している。遺物は覆土１層上位で土師器２点が出土している。

P1130（図版３、図版10、図版27）

本遺構は３Ａ24グリッドで検出され、確認面の標高は8.6mである。平面形は直径32㎝の円形、確認面からの深さ38㎝、断面はＵ字状である。確認面はⅨ層、底面はⅪ層に達している。覆土は単層で、砂質シルトが主体、炭化物粒を含む。遺物は覆土上位で、礫４点が出土している。

P1131（図版３、図版10、図版27）

本遺構は３Ａ25グリッドで検出され、確認面の標高は8.5mである。遺構の大半はサブトレンチに切られているため、その断面からピットの形状などを確認した。平面形は円形と推定、確認面からの深さ38㎝、断面はＵ字状である。確認面はＸ層、底面はⅪ層である。ピット上面で薄く炭化物の範囲が検出されたが、断面で確認したところ、炭化物は非常に薄いものであった。遺物は出土していない。

P1137（図版３、図版10、図版27）

本遺構は２Ａ24グリッドで検出され、確認面の標高は8.4mである。平面形は径22㎝の円形、確認面からの深さは37㎝、断面はＵ字状である。確認面はⅨ層、底面はⅪ層に達する。覆土は単層である。覆土上位から13点の被熱した礫片が出土した。

６）溝状遺構

今年度の調査で検出された下層の溝状遺構は３条である。

SD1142（図版３、図版10、図版27）

本遺構は３Ａ25、３Ｂ５グリッドで検出され、確認面の標高は8.5mである。ＳＸ1140とほぼ同じ標高で検出され、ＳＸ1140を切っている。遺構の中心部はサブトレンチで切られているが、平面は溝状に細長く、長さ216㎝、幅23㎝、断面は半円状、深さ８㎝である。覆土は砂質シルトが主体の単層で、炭化物粒を含み、断面もはっきり確認できた。遺物は土師器２点、礫３点が出土した。

SD1144（図版４、図版10、図版28）

本遺構は４Ａ20・25、４Ｂ５・８～10・12～15・17～19グリッドで検出され、確認面の標高は8.2～8.3mである。平面規模は長さ930㎝以上、幅120㎝以上、平面形はわずかに蛇行気味で、北側で大きく屈曲する。北側は暗渠排水溝に切られている。確認面からの深さ11㎝、断面形は弧状である。平成16年度調査では、本遺構に相当する遺構が検出されておらず､暗渠排水溝の範囲内で遺構は終わっているものと推定できる。覆土はシルトが主体の単層で、炭化物粒を少量含む。遺物は土師器２点が覆土上位から出土している。

SD1145（図版４、図版10、図版28）

本遺構は４Ａ18・19・22～24、４Ｂ２・３グリッドで検出され、確認面の標高は8.2～8.3mである。平面規模は長さ445㎝以上、幅60～160㎝、平面形はわずかに蛇行気味で、北側は膨らみ、南側は試掘トレンチ41によって切られている。確認面からの深さ８㎝、断面は弧状である。確認面・底面ともⅨ層中である。覆土は単層で、炭化物粒を微量含む。遺物は出土していない。

７）河　道　跡（図版10、図版28）

調査区の東側は河道跡が検出されている。本河道は平成16年度調査区からの続きであり、わずかに蛇行気味である。南に向かうに従って、方向は西寄りになる。埋没土は、砂層とシルト層が幾重にも互層をなす。とくにシルト層には腐植物が多く含まれており、また大きな流木がかたまって確認されている。河道の底面は標高6.9m付近で確認され、底面付近では腐植物が認められる。第Ⅲ章１Ｃでも述べたように、Ⅷb層が幾層にも分層される状態で厚く堆積し、最終的にはⅣ層の堆積時にほぼ埋まりきったものと考えられる。河道の堆積土および堆積状況からは、河道跡は氾濫を繰り返しながら徐々に埋没していったものと考えられる。遺物は土師器18点、須恵器３点が出土している。

C　最上層の遺構

最上層（Ⅲ層）で検出された遺構は性格不明遺構１基と溝状遺構が１条である。本来、この面は調査対象ではなかったが、表土除去の最中に製塩土器の細片が４Ｂグリッド付近で集中して出土したため、急遽調査を行った。遺構はいずれも遺存状況が悪く、遺物もＳＸ013に集中して出土した製塩土器細片だけであった。

ＳＸ013（図版13、図版29）

４Ａ13・18～20・22～25、４Ｂ２～５・７～10・13～15・18グリッドで検出され、確認面の標高は8.9mである。本遺構は平面形が不整形の掘り込みが浅い部分と、その中央部を東西に貫く溝状部分からなる。北側は平成16年度調査区の法面によって、南側は試掘トレンチ41によってそれぞれ切られている。規模は長軸850㎝、短軸500㎝以上、確認面からの深さ17㎝、断面形は弧状である。溝状部分は長さ1,062㎝、幅82～112㎝、断面形は半円状である。遺構全体の覆土は３層に分層される。覆土中には少量の炭化物粒が認められたが、被熱面はまったく確認されず、状況から判断して、製塩遺構ではないことは明らかである。確認面付近には製塩土器の細片が分布しており、層位的には覆土２層に集中する傾向にある。出土遺物は製塩土器147点である。

ＳＤ014（図版13、図版29）

３Ａ８グリッドから３Ｃ19グリッドまで、東西方向をほぼ直線的に貫く状況で検出され、確認面の標高は9.0mである。西側は調査区外へ伸び、東側は河道によって切られる。長さは1,150㎝以上、幅は20～35㎝である。確認面からの深さ13㎝、断面形は弧状である。覆土は単層である。遺物は出土しなかった。

3　遺　　物

A　記述の方法と分類

記述の方法と分類は以下の通りである（第11図）。

1）土　師　器

食　膳　具

杯　　椀に比べて底径が大きく、器高が低い。底部の切り離し技法は回転ヘラ切り、体部はまっすぐ開きながら立ち上がる（６・７）。

椀　　杯に比べて底径が小さく、器高が高い。底部の切り離し技法は回転糸切り、体部は内湾気味に立ち上がる。今回の調査で出土したのはいずれも無台椀である。

椀Ａ：体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は大きく開く。底部は切り離し後にヘラで調整している。ほかの杯・椀類に比べ、大ぶりである（８）。

椀Ｂ：底部から内湾気味に立ち上がる。体部はロクロナデ、底部は回転糸切り無調整である。今回の調査で最も多く出土した（１・３～５・９～11・16・17・20・26・30・32～36・43～67・105～108）。

椀Ｃ：ロクロナデ後、内面にミガキ調整を施している。

Ｃ１：黒色処理が施されない（29・68～73）。

Ｃ２：内面もしくは内外面に黒色処理を施す。いわゆる黒色土器（12・25・41・74～80）。

煮　炊　具

甕　　口径値より器高値のほうが大きい。プロポーション的には頸部が内側に「く」の字状にくびれ、そこから口縁部に向かって外に開く。最大径は胴部、もしくは口縁部と胴部がほぼ同じ値を示す。器厚は鍋に比べて薄く、体部はナデもしくはナデ→ハケ目調整を施している。長胴甕と小甕に分けられるが、今回の調査では明確に形状がわかったものは小甕（82）１点しかない。

鍋　　器高値より口径値のほうが大きい。プロポーション的には甕に比べて体部上半のくびれは小さく、口縁部が最大径となる。器厚は甕に比べて厚く、体部はナデもしくは叩き目が見られる。今回の調査では完形に近いものは出土しておらず、比較的形状が推定しやすい口縁部付近を掲載した（87）。

製塩土器・製塩関連遺物

ほとんどが細片であり、接合もできない状況のため、器形がわかるものはほとんどなかった。胎土は、雲母が多く混入するタイプが目立ち、また海綿骨針が少量混入するものが多い。今回の調査ではバケツ形（114・117）のほか、輪積み成形の土師器甕の小型品（２）と、製塩関連遺物と考えられる支脚（18）が出土している。

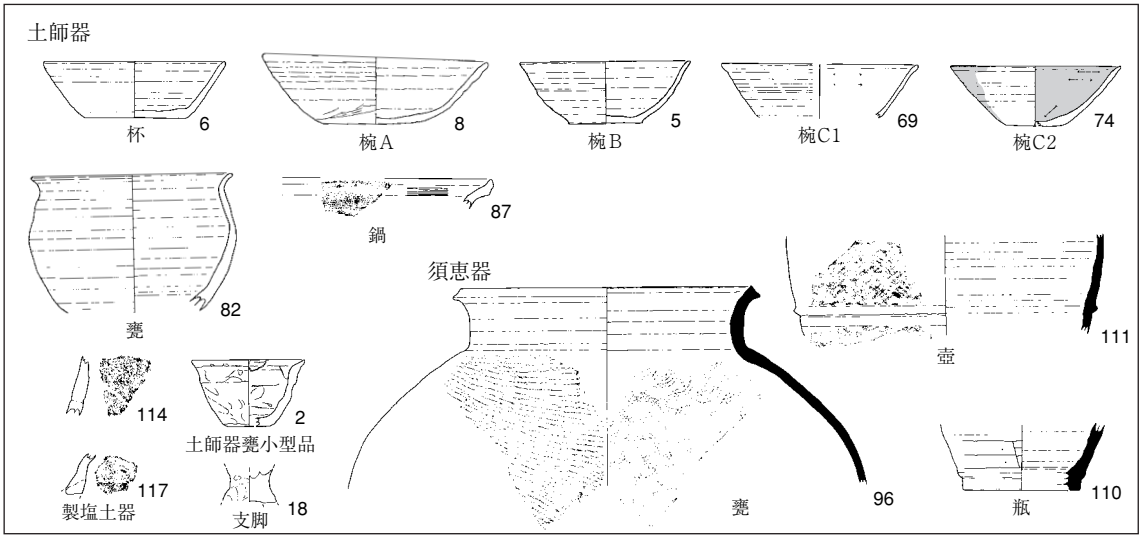
2）須　恵　器

須恵器はいずれも貯蔵具であり、甕・壺・瓶に大別される。食膳具は認められなかった。

甕　　口径が大きく広がる。体部外面には叩き目が、内面には当て具痕がつく（96）。

壺　　口径が小さい。体部は大きく丸く膨らみ、ロクロナデや叩き目が見られる。また凸帯付四耳壺などの装飾的要素のある器形もある（111）。

瓶　　体部はロクロナデで、底部に高台が付く。甕や壺に対して体部は大きく膨らまない（110）。



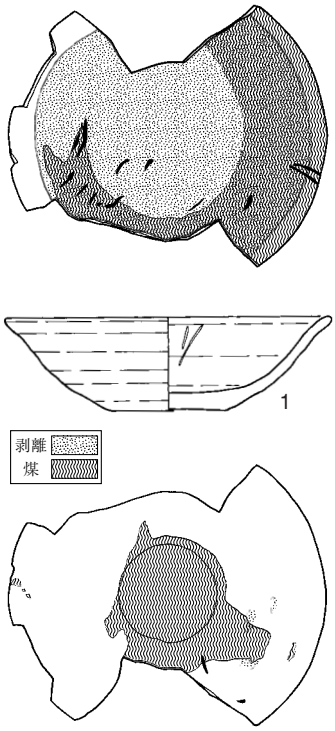
第11図　遺物の分類基準

B　下層及び上層の遺物

1）遺構出土の遺物

SR1153（図版14、図版30）

1は椀Bである。覆土1層の上面から出土し、本遺構の周囲の包含層（Ⅷb層）出土遺物と接合した。口縁端部が外反し、ほかの椀Bと比べて身が浅い。二次焼成を受け、外面は淡赤色・灰色化している。外面は底部から体部にかけて、内面は口縁部から体部にかけて煤が付着する。口縁端部下の内側5～10㎜程度は剥離しないが、体部と底部の内面全体に剥離が広がり、ロクロ目が明瞭でない。外面にも僅かに剥離がみられるが、ロクロ目は明瞭に残っている。剥離の状況は均一でなく、強い剥離と弱い剥離部分が見られる。口縁部及び底部内面には、人為的に付けられたような長さ1～2㎝程度の引っかき傷も見られる。（第12図参照）



第12図　SR1153出土椀の剥離及び煤付着状況

SS1151（図版14、図版30）

2は土師器甕の小型品である。本遺構の南側に隣接するSR1153の覆土1層から出土した底部片と接合した。輪積みで成形され、内外面に指頭圧痕を残し、作りが粗雑である。胎土に雲母が多く混入し、海綿骨針も含む。二次焼成を受け、灰色化している。

SS1135（図版14、図版30）

3は椀Bである。体部下半から口縁部に向い、まっすぐ立ち上がる。胎土には雲母、海綿骨針を含む。二次焼成により、外面が灰色化、内面が赤色化している。

SS1136（図版14、図版30）

4は椀Bである。体部から口縁部に向い、まっすぐ立ち上がる。胎土は雲母を含む。二次焼成を受け、灰色化している。

SS1141（図版14、図版30）

5は椀Bである。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部が外反する。内外面ロクロナデで、底部外面に回転糸切り痕が残る。内面は磨耗している。胎土は雲母、海綿骨針を含む。

SK1124（図版14、図版30）

6・7は土師器の杯である。ともに底径が大きく、体部はまっすぐに立ち上がる。胎土は粗く、1～5㎜の小礫が目立つ。このうち6は正位の状態で出土している。内外面ロクロナデ、底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土には海綿骨針を含む。二次焼成を受け、口縁部から体部内外面に薄っすらと煤が付着する。7の底部外面は回転ヘラ切り後にナデを行う。内外面全体に1㎜程度の褐色粒が見られる。8～12は土師器椀である。8は椀Aで、正位の状態で出土した。他の土師器椀に比べ器形が大きく、体部はやや内湾して立ち上がる。内外面ロクロナデ後、体部外面下半に手持ちヘラケズリを、底部外面は切り離し後にヘラケズリを行う。底部外面の数か所に炭化物の付着が見られる。前述の杯6・7と共伴する。9は椀Bである。厚手の作りで、口縁部に向かって、まっすぐ立ち上がり、口縁端部はやや鋭角気味である。胎土は粗

く、３㎜前後の小礫が目立ち、内外面全体に１㎜程度の褐色粒が見られる。10・11はともに椀Ｂであり、口縁端部が外反する。10は外面全体及び内面の一部に１㎜程度の褐色粒がみられる。12は椀Ｃ２の底部である。内外面ロクロナデ、底部内面に放射状のミガキを行う。外面は磨耗している。13は製塩土器の底部である。外面は二次焼成を受けて剥離し、部分的に欠損しているが、粘土紐の輪積みの痕跡は確認できる。底部内面にナデを行う。胎土には１～３㎜の小礫が多く見られる。

14・15は須恵器である。このうち14は突帯付の壺類の胴部上半である。内外面ロクロナデを行う。肩部に断面三角形の突帯をめぐらす。胎土には非常に細かい白色粒子が含まれ、１㎜以下の黒色の斑点が見られる。15は短頸壺である。内外面ロクロナデで、口縁端部が突帯状に外へ張り出す。胎土には白色粒子、海綿骨針を含む。頸部内外面が弾けたように剥離するが、焼成時の際の剥離と思われる。

ＳＸ1125（図版14、図版30）

16・17は椀Ｂである。ともに内外面が磨耗する。内外面全体に褐色化した１㎜以下の細かい斑点が確認でき、同一個体の可能性がある。このうち16は底部から口縁部に向い、まっすぐ立ち上がる。一方、17は体部下半から底部の外面に煤が付着している。18は支脚と考えられる。輪積み成形が行われ、輪積み痕及び外面に指頭圧痕を残す。胎土には雲母、長石、海綿骨針を含む。二次焼成を受ける。

ＳＸ1126（図版14、図版30）

19は甕の体部である。外面にハケ目が残る。二次焼成を受け、外面に煤が付着する。

ＳＸ1128（図版14、図版30）

20は椀Ｂである。まっすぐに立ち上がり、体部に若干の膨らみをもち、薄手の作りである。胎土には海綿骨針を含む。21～23は土師器鍋である。21は口縁部で、外反気味に開く。22は口縁部で、内外面にロクロナデ、口縁部内面にヨコ方向にヘラナデを行うが明瞭ではない。23は体部で、内面にタテ方向にナデを行うが、その痕跡は弱く、明瞭ではない。胎土は粗く、３㎜前後の小礫が目立つ。24は須恵器の壺類である。叩き成形が行なわれた後、内外面にロクロナデを行う。外面の叩き痕は部分的に消えている。胎土には非常に細かい白色粒子が見られる。胎土や調整痕から111と同一個体と考えられる。

ＳＸ1129（図版14、図版30）

25は椀Ｃ２の底部である。内外面ロクロナデ後、体部外面下半にヘラケズリを、底部内面には放射状にミガキを行い、底部外面に回転糸切り痕を残す。内外面に黒色処理が施される。

ＳＸ1138（図版14、図版30）

26は椀Ｂである。二次焼成を受け、内面及び口縁部外面が赤色化し、体部外面は白色化している。内外面に煤が付着する。27は甕の体部である。外面にはヨコナデを行う。28は須恵器の甕である。外面は灰黄褐色、内面は黒褐色を呈する。外面は平行叩き痕、内面は同心円状当て具痕を残す。胎土は小礫が多めで粗く、雲母を含んでいる。二次焼成を受け、外面は剥離し、内外面には煤が付着する。

ＳＸ1139（図版14、図版30）

29は椀Ｃ１で、ロクロ目が明瞭で、口縁端部が外反する。内外面ロクロナデ後、体部外面には回転ヘラケズリが行われ、その後、一部ナデが施される。内面は横方向にミガキを行う。ミガキは底面へ向かって強い。30は椀Ｂで、体部外面下半および底部外面に回転ヘラケズリを行う。内面が剥離している。31は須恵器の甕である。外面には平行叩き痕が重なって格子状に残り、内面には平行当て具痕を残す。胎土には、非常に細かい白色粒、石英、長石を含む。

SX1140（図版14、図版30）

遺構内全域から遺物が出土している。32～36は椀Ｂであり、32は体部がやや屈曲し、口縁部が開くように立ち上がる。33・34はともに厚手の作りである。34は口縁端部が厚みを持ち、二次焼成を受け、体部内面の一部が赤色化している。口縁端部内面と体部外面に煤が付着している。内面には１に類似した剥離状況が見られ、口縁端部下の内側５㎜程度は剥離しないが、体部内面全体に剥離が広がり、ロクロ目が明瞭でない。外面にはロクロ目が明瞭に残る。内面には、人為的に付けられたような長さ１～２㎝程度の引っかき傷が数か所に見られる。35は内外面ロクロナデで、底部外面に糸切り痕を残す。36はSS1135出土の土師器椀と接合した。内外面ロクロナデで、底部外面は切り離し後に、ヘラケズリを行う。破砕後に二次焼成を受け、内外面および断面には部分的に煤が付着する。37・38は須恵器の甕である。ともに胎土中に白色粒子を含む。このうち37は体部外面上半に横方向の平行線文の叩き痕、下半には平行叩き痕が重なり格子状に残る。体部内面に同心円状の当て具痕、さらに体部内面上半にロクロの回転を使用したカキ目が平行に二段残る。37と98は、平成16年度報告遺物№79と接合した（図版11参照）。38は、外面にタテ方向の平行線文の叩き痕が重なり格子状に残り、内面に平行当て具痕が残る。

SK1150（図版14、図版30）

39は製塩土器である。内外面ロクロナデ後、口縁部内面に横方向のナデを行う。口縁部に輪積み痕を残す。

SX1152（図版14、図版30）

40は鍋である。内外面ロクロナデ後、口縁部内面に横方向に強くナデを行う。

P1127（図版14、図版30）

41は椀Ｃ２である。内外面ロクロナデ後、内面にヨコミガキを行う。

SD1144（図版14、図版30）

42は土師器甕である。内外面ロクロナデ後、頸部外面は縦と斜め方向にナデを、頸部内面に横方向にナデを行う。頸部内面には煤が付着する。

２）遺構外出土遺物（図版15・16、図版31・32）

遺構外出土遺物のうち、上層のⅥ層から出土したものは土師器１点、礫１点である。この中から図化できる土師器１点を掲載した（81）。また、河道跡以外で下層のⅧa～b層で出土した遺物は917点である。内訳は土師器799点（内、製塩土器41点）、須恵器118点である。この中から土師器53点（43～95）、須恵器９点（96～104）を掲載した。

43～67は椀Ｂである。43～45は内外面はロクロナデである。43・44は口縁端部が強く外反する。45は底部外面が磨耗している。46の底部外面は回転糸切り後に、一部ナデが施されている。47は薄手の作りで、体部がまっすぐ立ち上がり、外面は磨耗している。48の口縁端部は厚みをもち、外反する。50・51は厚手の作りで、口縁端部が厚みをもつ。内面には１・34に見られるような剥離した痕跡が確認できるがロクロ目は明瞭ではない。50の口縁内外面に煤が付着し、油がしみたような痕跡も残る。内面の剥離した状況のほかに、斜め方向の引っかき傷も見られる。52は内外面ロクロナデ後、底部外面にケズリのような痕跡がみられるが遺存状態が悪く、はっきり確認できない。底部は口縁部に対して小さく、全体的に小ぶりである。53は薄手の作りで、体部が若干膨らみ、口縁端部が強く外反する。54は内面が磨耗している。55は非常に薄手の作りである。56・57は体部がやや屈曲し、まっすぐ立ち上がる。57は口縁端部がやや鋭角気味

である。二次焼成を受け、内外面が赤色化する。煤は体部下半には薄っすらと、体部内面には２㎜前後の細かな斑点状に付着する。58～67は土師器椀の底部である。58は内外面が磨耗する。

68～73は椀Ｃ１で、内面は黒色になっていないが、内面にはミガキ調整が顕著で、黒色土器を意識して作られたものと考えられる。68は内外面ロクロナデ後、外面をヘラナデ、内面はヨコミガキを行う。69は内外面ロクロナデ後、内面にヨコミガキを行う。

74～80は椀Ｃ２である。74は内外面ロクロナデ後、底部内面に放射状ミガキ、口縁内側にヨコミガキを行う。77～80は椀Ｃ２の底部である。77は内外面ロクロナデ後、体部外面下半にヘラケズリ、底部内面にヨコミガキ、底部外面に糸切り後にヘラケズリを行う。78は内外面ロクロナデ後、内面に放射状ミガキ、底部外面に回転糸切り後ヘラケズリを行う。外面が一部黒色化している。79は内外面ロクロナデ後、底部内面に放射状、体部内面にヨコミガキを行う。80は内外面ロクロナデ後、底部内面に放射状ミガキ、底部外面に回転糸切り痕が残る。

81～85は土師器甕である。このうち81はⅥ層から出土した甕である。二次焼成を受け、頸部内面及び体部外面に煤が付着する。82は土師器の小甕である。内面全体に炭化物が付着し、外面には口縁から頸部にかけて吹きこぼれによる炭化物の付着も確認できる。体部外面下半には煤が付着している。83・84は甕の体部であり、ともに外面にはハケ目が残る。外面に炭化物が付着する。85は甕の体部上半である。内外面ロクロナデ後、カキ目が残る。

86～94は土師器鍋である。このうち86～92は口縁部である。86は内外面ロクロナデ後、口縁部外面にヘラ状工具で調整した痕跡が残る。また口縁部内側のナデが丁寧ではない。87は内外面ロクロナデ後、内面にカキ目が残る。二次焼成を受け、外面に煤が付着する。88は口縁端部が短く外反する。内外面ともにロクロナデ後、ヘラナデを行うが、痕跡は明瞭ではない。89は口縁部の輪積み痕が確認できる。89～92も二次焼成を受け、煤が付着する破片も確認できる。93・94は体部である。93は内外面ロクロナデ後、ヘラナデを行う。94は内外面ロクロナデ後、内面にヨコナデを行う。外面に平行叩き痕が残る。ともに二次焼成を受けている。

95は製塩土器の体部片である。内外面に輪積み痕を残す。内面にナデ、外面には内面より弱いナデを行う。内面に指頭圧痕が残る。胎土は粗く、雲母・海綿骨針を含む。二次焼成を受け、内面が灰色化している。

96～104は須恵器である。このうち96～103は甕である。96の頸部は内外面ロクロナデで、叩き痕を消す。体部外面上半に横方向に揃った平行叩き痕、体部内面に同心円当て具痕が残る。97は口縁部で、内外面にロクロナデを行う。口縁端部に剥離がみられる。98は肩の部分に当たる。外面は叩き後にナデを行う。内面は当て具痕を消すようにロクロナデを行い、その後カキ目を施す。平成16年度報告遺物№79と接合した。99は体部片である。外面は斜め方向の平行叩きを行ない、その後にカキ目調整を行なう。内面は当て具痕を消すようにカキ目が残る。胎土は長石・石英を含む。100の体部外面には平行叩き痕が重なり、内面には斜め方向に揃った平行当て具痕が残る。101は底部付近の体部片にあたる。外面に斜め方向の平行叩き痕が、内面に同心円当て具痕が残る。102の調整痕は100に、103の調整痕は101に似る。それぞれ同一個体と考えられる。104は瓶類の底部である。内外面ロクロナデ、底部外面はケズリ調整後に高台を付け、ロクロナデを行う。

3）河道跡出土の遺物（図版16、図版32）

河道跡からは土師器18点、須恵器３点、動物遺体１点が出土している。このうち土師器４点（105～108）、須恵器３点（109～111）を掲載した。

105～108はいずれも椀Ｂである。105は口縁部が外反する。内外面ロクロナデで、底部外面には回転糸切り痕が残る。106は河道底面付近から逆位の状態で出土している。内外面ロクロナデで、底部外面には回転糸切り痕が残る。体部外面に墨書が見られるが、文字の部分が欠損しているため、文字は判読できなかった。107は内外面ロクロナデ、底部外面に回転糸切り痕が残る。二次焼成を受け、内外面に煤が付着する。108は底径が小さく、体部の立ち上がりも緩やかである。内外面はロクロナデで、その際についたしわのような縮れがみられる。色調は外面がつや消し掛かった黒褐色、内面がにぶい黄橙色である。

109～111は須恵器である。109は甕であり、口縁部は内外面ロクロナデである。110は瓶類の底部である。内外面ロクロナデ後、体部外面下半にヘラケズリを、底部外面はケズリ調整後に高台を付け、ロクロナデを行う。111は突帯付の壺類である。叩きが行なわれた後、内外面にロクロナデを行う。外面の叩き痕が部分的に消えている。体部に断面三角形の突帯をめぐらす。胎土には１㎜以下の白色粒子を含んでいる。佐渡小泊カメ畑１～３号窯跡に類例がみられる［坂井・鶴間・春日1991］。110・111は内外面および断面に煤が付着するため、廃棄後に二次焼成を受けたと考えられる。

XI層出土の遺物（図版16、図版32）

XI層からは土師器３点が出土した。このうち１点を掲載する。112は甕類の破片と考えられる。全体的に磨耗しているが、内外面ロクロナデ後、内面にカキ目を施す。遺物の時期は不明である。

C　最上層の遺物（図版16、図版32）

SX013からは、製塩土器の細片が147点出土している。このうち８点を掲載する。113は口縁部片である。二次焼成を受け、赤色化している。114～116は体部片である。114は成形が粗雑で、輪積み痕が残る。117～120は底部片である。いずれも輪積み部分で欠損している。

4　自然科学分析

A　はじめに

沢田遺跡は、新潟県北部の日本海沿岸に形成された沖積低地に立地する。この沖積低地の背後南東側には櫛形山地が広がり、山地と沖積低地との間には丘陵が分布している。また、沖積低地の北西側には海岸砂丘が形成されている。本遺跡の位置する沖積低地は、主に胎内川により形成されたと考えられるが、胎内川の源流は櫛形山地のさらに背後に広がる飯豊山地に発している。

沢田遺跡の発掘調査では、古代とされる遺構や遺物が検出されている。今回は、それらの発掘調査において設定された課題に対し、自然科学分析調査手法を用いることにより、解析と資料の作成を行うものである。以下に、今回設定された分析調査課題とその内容について述べる。

ａ）遺構の覆土および遺物包含層に相当する河道跡埋没土中より出土した骨の種類と遺存部位を同定し、沢田遺跡における当時の動物質食糧に関わる情報を得る。

ｂ）炉などの焼土を伴う遺構では、火床面と地山との間に赤褐色を呈する土の堆積が認められている。平成16年度発掘調査所見では、この赤褐色土を炉底部の防湿を目的とした搬入土である可能性があるとしている。ここでは、赤褐色土とそれ以外の覆土、遺構の地山、さらに調査区内の遺物包含層などとの間で、含まれる鉱物の組成を比較し、地質学的にみた赤褐色土の由来について検証する。

ｃ）遺物包含層下層の河道跡へ向かう斜面では、樹皮とされる遺物が出土し、その周囲では遺物も出土している。ここでは、樹皮とされた遺物の観察から、その種類の特定を試み、当時の植物利用状況に関する検討材料を得る。

B　骨　同　定

1）試　　料

試料は、河道跡（3Bグリッド）、SK1124、P1137から採取されている。河道跡内のメインベルトは、層序が大きくⅣ～Ⅸ層まで分層され、さらにこれらの層位が細分されている。河道跡覆土のⅧb4層から骨（A1）が出土し、これが土ごと取り上げられている。SK1124は、規模推定1m、深さ26㎝以上の土坑で、覆土が炭化物を多く含む堆積物2層よりなり、覆土上位層から焼骨（A2）が確認された。P1137は、直径22㎝、深さ37㎝のピットで、覆土中から炭化物とともに焼骨（A3）が確認された。各試料の帰属する時代は、いずれも古代とされている。

2）分析方法

試料A1については、土壌が付着した状態であるが、土壌を全て除去すると形質を保てない状態であったため、乾いた筆等で土壌を一部除去する程度にとどめた。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。なお、同定は金子浩昌先生の協力を得た。

3）結果および考察

河道跡（3Bグリッド）試料は、非焼骨である。保存状態が極めて悪く、形質をほとんどとどめていないが、獣類の四肢骨と判断される。大きさ等からみてカモシカ程度の大きさの獣類とみられる。SK1124お

よびP1137は、いずれも焼骨であり、魚類の鰭棘片等を含む細片である。種類不明のため詳細を明らかにできないが、この焼骨は食糧資源等として利用された後、生活残滓とともに遺構内へ破棄されたと考えられる。

C　炉跡覆土・焼土の分析

1）試　　料

分析対象とした遺構は、平成16年度調査で検出された炉跡であるSR1002、SR1022、SR1028、平成17年度調査で検出された炉跡であるSR1153の4基である。また、比較対照試料として、平成16年度調査区西壁より採取された遺物包含層および地山の堆積物が選択された。試料の点数は合計16点である。以下に、各地点、各遺構の試料を述べる。

a）平成16年度調査区西壁

試料は、遺物包含層であるⅥb、Ⅷa、Ⅷbの各層とその下位の地山とされているⅨ層の各層より1点ずつ採取された4点の堆積物である。西壁では厚さ数㎝のⅥb層の直下に厚さ10㎝程度のⅧa層が堆積し、その下位に同程度の厚さのⅧb層、さらに地山とされるⅨ層が堆積している。Ⅵb層は灰色の粘土質シルト、Ⅷa層はオリーブ黒色のシルト、Ⅷb層は灰色の砂質シルト、Ⅸ層は灰色の砂である。

b）SR1002

覆土は上位より1層から6層まで分層されている。このうち、2層から6層までの各層から1点ずつ、計5点の試料が採取された。また、覆土中より出土した焼土塊1点も試料とされた。2層から4層までは黄褐色を呈するシルトであり、発掘調査所見では焼土とされ、5層は黒褐色シルト、炉底直上の6層は灰色のシルトである。また、焼土塊は、灰白色を呈するシルトであるが、部分的に黄橙色を帯びている。また、他の堆積物に比べて非常に軽いことが特徴である。

c）SR1022

地床炉、被熱面およびその下位という試料名が付された2点の試料である。地床炉は、1層と2層に分層された覆土の下位の覆土である2層から採取された灰色シルトであり、やや赤化している。被熱面およびその下位は、炉の構築されている地山の層から採取された黒褐色のシルトである。

d）SR1028

火床部、掘り形（焼土下）という試料名が付された2点の試料である。火床部は、覆土中部の層位である14層より採取されたにぶい黄褐色を呈するシルトであり、掘り形（焼土下）は、その下位の覆土である16層より採取されたオリーブ黒色を呈するシルトである。

e）SR1153

覆土は3層に分層され、このうち1・2層より1点ずつ、計2点の試料が採取されている。どちらも黒褐色を呈するシルトであるが、発掘調査所見では、2層が焼土とされている。

2）分 析 方 法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4㎜－1/8㎜の砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物と軽鉱物をそれぞれ250粒に達するまで偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈す

るもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とした。「その他」は軽鉱物中においても同様である。また、火山ガラスは、便宜上軽鉱物組成に入れ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および繊維束状のものとする。

３）結　　果

分析結果を第２表、第13図に示す。重鉱物組成では、SR1002の２層、同３層、同焼土塊、SR1022地床炉、SR1153の２層の５点を除く11点の試料においてほぼ類似する組成を示す。すなわち、角閃石が突出して多く、これに少量の輝石類と角閃石族、黒雲母、緑レン石、蛍石（またはザクロ石）など多種の鉱物を伴うという組成である。一方、上述した５点の試料は、いずれも「その他」とした粒子の割合が、角閃石より多い。特に、SR1153の２層では、「その他」が80％を占める。ただし、「その他」を除いた組成では、これら５点は、いずれも他の試料と同様に、角閃石が多く、輝石類と角閃石類、黒雲母、緑レン石、蛍石（またはザクロ石）など多種の鉱物を少量伴う組成である。なお、「その他」とした粒は、鏡下では不透明不定形の粒であるが、その形態と、後述するように軽鉱物において多量の黒雲母片が認められたことから、黒雲母の風化変質粒である可能性がある。

軽鉱物組成では、SR1002の焼土塊を除いた15点の試料において、石英、長石、「その他」の３者からなる組成を示す。このうち、石英はいずれの試料においても最も割合が低く、長石と「その他」の量比は、試料によって異なっている。なお、これらの試料における「その他」とした粒子は、未分解の粘土粒や岩石片などである。ここで、長石と「その他」の量比関係を地点・遺構ごとに見ると、以下の通りである。調査区西壁では、遺物包含層の３点で長石が多く、地山のⅨ層のみ「その他」が多い。SR1002では、２層から５層までは「その他」が多く、６層では長石が多い。また、上位の試料ほど「その他」が多い傾向がある。SR1022では地床炉、SR1028では火床部、SR1153では２層（焼土）とされた試料が、いずれも「その他」の多い組成を示し、もう一方の試料が長石の多い組成を示す。なお、以上に述べた15点の試料の軽鉱物中には、多量の雲母片が混在しているが、これらは薄片状であり、容易に破砕するため、粒数の計数からは除外している。

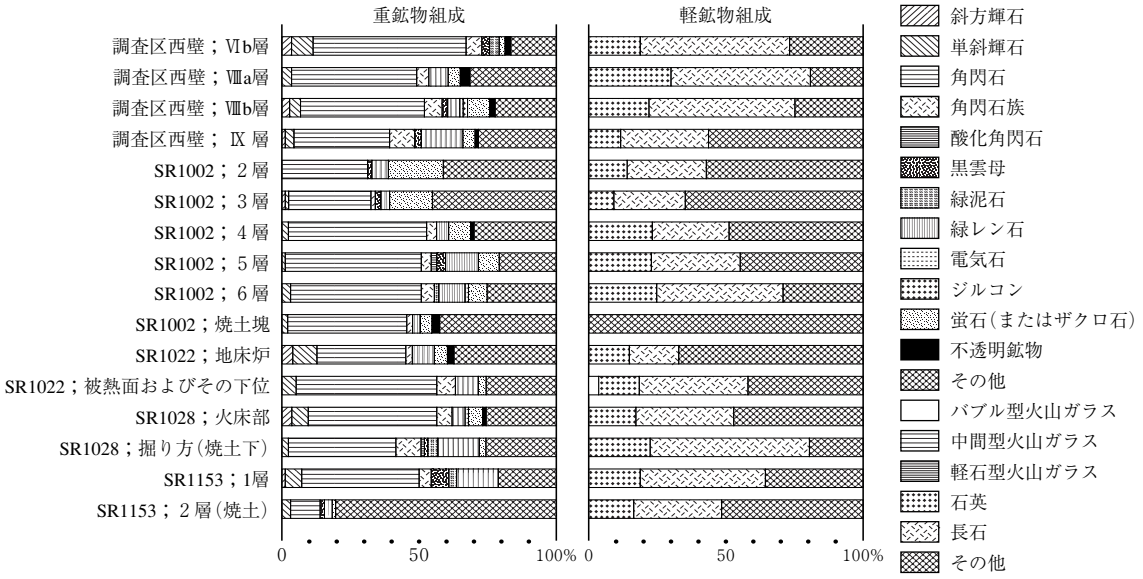
SR1002の焼土塊の軽鉱物分は、計数上はほとんどが「その他」となっているが、本試料中の「その他」は、他の試料における未分解粘土粒や岩石片ではなく、放散虫および珪藻の微化石片である。

４）考　　察

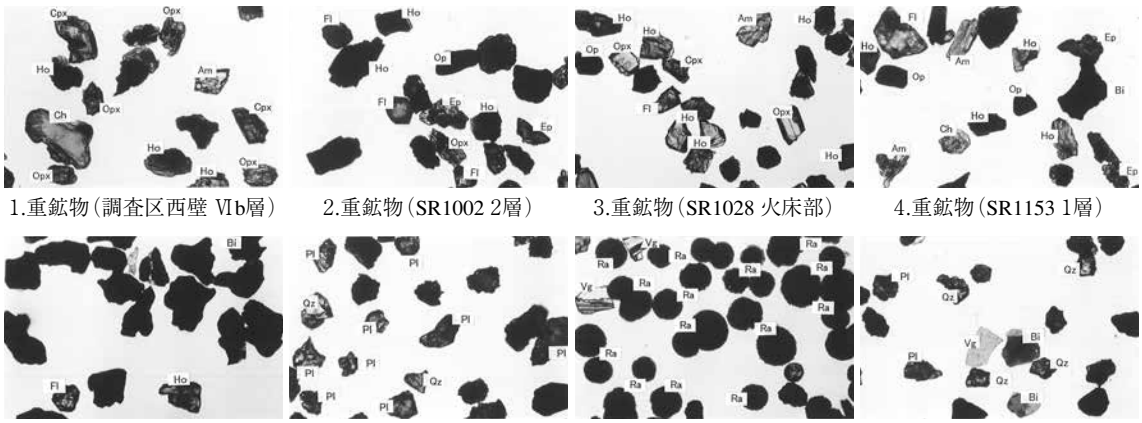
重鉱物組成では、角閃石と「その他」との量比関係の違いが試料間で認められるが、「その他」を除いた重鉱物組成は、全試料ともに同様であると言って良い。「その他」は前述したように風化変質粒であると考えられるから、その量比は、堆積物の堆積時の環境やその後の環境変化に起因すると考えられる。すなわち、堆積物を構成する砕屑物の給源の違いではない。したがって、調査区西壁の堆積物と各遺構覆土とは、地質学で捉えられる範囲において同一の起源であると考えられる。ここで言う地質学で捉えられる範囲とは、胎内川によって供給される砕屑物の分布する範囲となる。胎内川の流域に分布する地質については、日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会［1988］や新潟県商工労働部工業振興課［1989］などの記載に従えば、櫛形山地の主体部を構成する白亜紀の花崗閃緑岩と櫛形山地を取り囲む丘陵を構成する新第三

地点名	試料名	注記	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	角閃	石族	酸化角閃石	黒雲母	緑泥石	緑レン石	モナザイト 電気石	ジルコン	蛍石(またはザクロ石)	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
調査区西壁	Ⅵb層		5	11	78	8	0	4	5	2	0	0	0	3	3	21	140	0	0	0	47	136	67	250
調査区西壁	Ⅷa層		0	4	52	5	0	0	2	8	0	0	1	5	4	33	114	0	0	0	75	127	48	250
調査区西壁	Ⅷb層		7	10	113	16	0	5	2	11	0	3	4	20	5	54	250	0	1	2	55	133	59	250
調査区西壁	Ⅸ層		3	8	87	23	1	6	1	38	0	1	2	11	3	66	250	0	0	0	29	80	141	250
SR1002	2層		1	2	78	1	1	4	0	15	0	1	1	50	0	96	250	0	2	0	35	72	141	250
SR1002	3層		3	3	75	4	0	5	0	8	0	0	2	39	2	109	250	1	1	2	23	65	158	250
SR1002	4層		1	6	126	9	1	0	0	11	0	0	2	20	3	71	250	1	0	0	58	70	121	250
SR1002	5層		1	3	124	9	5	8	1	30	0	1	0	19	1	48	250	0	1	1	57	81	110	250
SR1002	6層		2	8	119	12	0	2	4	24	1	3	1	17	1	56	250	0	0	1	62	115	72	250
SR1002	焼土塊	№143－145	2	3	62	3	0	2	1	4	0	0	1	6	4	55	143	1	0	2	2	0	245	250
SR1022	地床炉	64号覆土2層	10	22	81	6	0	1	0	20	0	1	2	12	6	89	250	0	0	2	37	45	166	250
SR1022	被熱面およびその下位	64号覆土3層	2	13	128	17	0	1	2	21	0	1	2	7	1	55	250	9	0	1	37	99	104	250
SR1208	火床部		9	15	117	14	0	0	2	12	0	3	2	13	3	60	250	1	0	2	43	89	115	250
SR1208	堀り方(焼土下)		2	6	98	23	3	3	9	38	1	1	2	6	2	56	250	0	0	1	56	145	48	250
SR1153	1層		3	15	107	11	0	16	7	38	0	1	0	1	1	50	250	0	1	2	47	114	86	250
SR1153	2層(焼土)		1	8	27	2	0	4	1	7	0	1	0	3	2	194	250	1	1	0	41	80	127	250

第２表　沢田遺跡　重軽鉱物分析結果



第13図　沢田遺跡　重軽鉱物組成



1.重鉱物(調査区西壁 Ⅵb層)　2.重鉱物(SR1002 2層)　3.重鉱物(SR1028 火床部)　4.重鉱物(SR1153 1層)

5.重鉱物(SR1153 2層焼土)　6.軽鉱物(調査区西壁 Ⅵb層)　7.軽鉱物(SR1002 焼土塊)　8.軽鉱物(SR1022 被熱面及びその下位)

Qz:石英　Pl:斜長石　Bi:黒雲母　Ch:緑泥石　Opx:斜方輝石　Cpx:単斜輝石　Ho:角閃石
Ep:緑レン石　Op:不透明鉱物　Fl:蛍石　Am:角閃岩　Vg:火山ガラス　Ra:放散虫

0.5㎜

第14図　沢田遺跡　重軽鉱物写真

紀中新世の泥岩および凝灰岩が主要な地質であり、上流部の飯豊山地には中・古生代の堆積岩からなる足尾帯と呼ばれる地質が分布している。今回の試料中に認められた重鉱物は、角閃石をはじめとしてほとんどが櫛形山地の花崗閃緑岩に由来すると考えられる。また、緑レン石や緑泥石などは、新第三紀の地層にも由来すると考えられる。さらに、軽鉱物中における多量の黒雲母片は、櫛形山地の花崗閃緑岩に由来するものである。このような由来を持つ胎内川の砕屑物は、旧中条町の沖積低地の範囲ほぼ全域に分布していると考えられるから、今回の発掘調査所見で言うところの搬入については、この範囲内で行われていた場合には、今回の結果から判断することはむずかしい。

なお、今回の試料の中でSR1002の焼土塊のみは、重鉱物組成では他の試料との違いは大きくなかったが、軽鉱物組成において他の試料とは全く異なる組成であった。この試料は、前述したように、色調や重さなどの質感から他の試料とは異なる堆積物であることがわかるが、それを構成する砕屑物の主体が、放散虫および珪藻などの珪酸質の微化石からなることが明らかとされた。いわゆる「珪藻土」に相当するものであり、このような堆積物は、本遺跡の立地する沖積低地にはない。それが堆積する最も近い場所としては、櫛形山地周縁の丘陵を構成する新第三紀の地層中が考えられる。すなわち、SR1002の焼土塊は、何らかの目的により丘陵から運ばれてきたものである可能性が高い。その用途や性格などについては、今後の類例の出土状況をもって検討するべきであろう。

D　植物遺体の同定

1）試　　料

試料は、包含層下層から出土した樹皮状の植物遺体１点である。

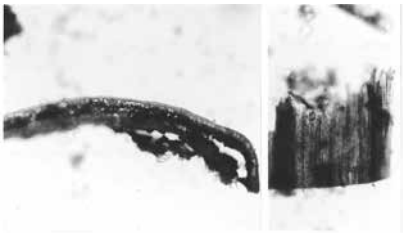
2）分 析 方 法

試料は保存状態が悪い。剃刀の刃を用いて横断面・縦断面の切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール,アラビアゴム粉末,グリセリン,蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3）結　　果

植物遺体は、横断面では繊維細胞と柔細胞が認められるが、観察した範囲では放射組織は認められない。縦断面では、柔細胞が軸方向に短冊状に配列している様子が観察できる。

以上の特徴から、植物遺体は樹皮ではなく、イネ科等の草本類と考えられるが、繊維細胞と柔細胞以外の組織が観察できないため、種類は不明である。



1.草本類（包含層下層；樹皮）
a：横断面（左）　b：縦断面（右）　200μm

第15図　沢田遺跡　植物遺体写真

4）考　　察

植物遺体は、包含層下層の河道跡に向かう斜面で出土しており、周囲から遺物が出土している状況から敷物等に利用された可能性が考えられている。草本類のうち、イネ科植物には編物や敷物等に利用する種類も含まれていることから、イネ科等の植物遺体が敷物に利用された可能性がある。

E　沢田遺跡の集石遺構の礫組成について

1）試　　料

試料は平成17年度の調査で確認された４基の集石遺構（SS1135、SS1136、SS1141、SS1151）と１基の炉（SR1153）である。集石遺構は径１㎝～20㎝の礫からなり、多くの礫が被熱している。これらのうちSR1153は礫14点中11点、SS1135は礫136点中126点を対象とし、SS1136とSS1141、SS1151は礫の量が多いため礫径の大きなものから順に80点前後を分析対象とした。

2）分 析 方 法

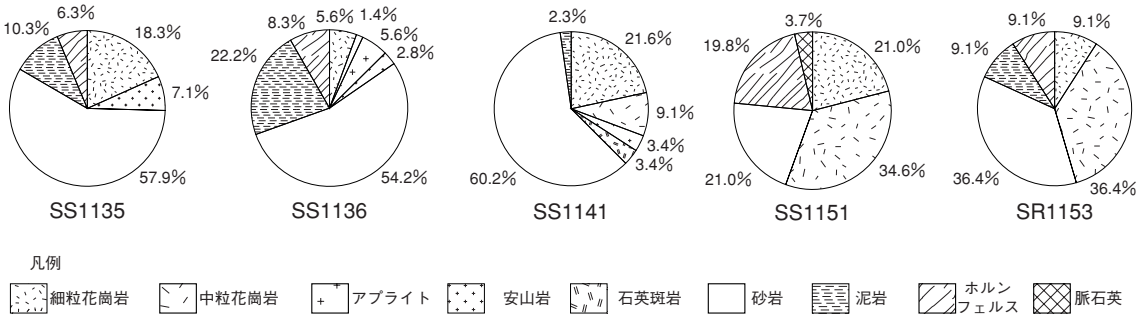
礫の鑑定はルーペによる肉眼鑑定とし、その際、礫種と岩石学的な特徴、礫表面に見られる被熱状況、形状の記録を行なった。

3）分 析 結 果

集石遺構の礫組成を第３表と第16図に示す。

礫　　種	遺　構　名				
	SS1135	SS1136	SS1141	SS1151	SR1153
細粒花崗岩	23	4	19	17	1
中粒花崗岩	0	1	8	28	4
アプライト	0	4	0	0	0
安　山　岩	9	2	3	0	0
石 英 斑 岩	0	0	3	0	0
砂　　岩	73	39	53	17	4
泥　　岩	13	16	2	0	1
ホルンフェルス	8	6	0	16	1
脈　石　英	0	0	0	3	0
小　　計	126	72	88	81	11
被熱を受けた礫	123	65	87	80	11
被熱無し	3	7	1	1	0
被熱の状況	破砕，礫表面の亀裂，脆弱化，赤変，黒変，炭化物・タール状物質の付着	破砕，礫表面の亀裂，赤変，黒変，炭化物の付着	破砕，礫表面の亀裂，赤変，黒変，炭化物・タール状の付着	破砕，礫表面の亀裂，赤変，黒変，炭化物の付着	破砕，礫表面の亀裂，赤変，黒変，炭化物の付着

第３表　沢田遺跡　集石遺構の礫組成と被熱の状況



第16図　沢田遺跡　礫群組成

SS1135

礫種は細粒花崗岩23（18.3%）、安山岩９（7.1%）、砂岩73（57.9%）、泥岩13（10.3%）、ホルンフェルス８（6.3%）が確認された。礫は割れているものが多く、形状は円磨された亜円礫や円礫で扁平な形状を示すものもみられる。被熱の状況は123点に破砕や礫表面の亀裂、赤変、黒変、脆弱化、炭化物の付着、タール状物質の付着が認められた。接合したものは認められない。

SS1136

礫種は細粒花崗岩４（5.6%）、中粒花崗岩１（1.4%）、アプライト４（5.6%）、安山岩２（2.8%）、砂岩39（54.2%）、泥岩16（22.2%）、ホルンフェルス６（8.3%）が確認された。礫は割れているものがほとんどで、形状は亜円礫が多く亜角礫も含まれている。被熱の状況は65点に破砕や礫表面の亀裂、赤変、黒変、炭化物の付着が認められた。礫組成を検討したものの中で14点が接合試料である。

SS1141

礫種は細粒花崗岩19（21.6%）、中粒花崗岩８（9.1%）、安山岩３（3.4%）、石英斑岩３（3.4%）、砂岩53（60.2%）、泥岩２（2.3%）が確認された。礫は割れているものがほとんどで、形状は亜円礫や亜角礫を示す。被熱の状況は87点に破砕や礫表面の亀裂、赤変、黒変、炭化物の付着、タール状物質の付着が認められた。礫組成を検討したものの中で17点が接合試料である。

SS1151

礫種は細粒花崗岩17（21.0%）、中粒花崗岩28（34.6%）、砂岩17（21.0%）、ホルンフェルス16（19.8%）、脈石英３（3.7%）が確認された。礫は割れているものがほとんどで、形状は亜円礫や亜角礫を示す。被熱の状況は80点に破砕や礫表面の亀裂、赤変、黒変、炭化物の付着が認められた。接合したものは認められない。

SR1153

礫種は細粒花崗岩１（9.1%）、中粒花崗岩４（36.4%）、砂岩４（36.4%）、泥岩１（9.1%）、ホルンフェルス１（9.1%）が確認された。礫は割れているものが多く、形状はよく円磨された亜円礫から円礫である。被熱の状況は11点全てに認められ、破砕、礫表面の亀裂、赤変、黒変、炭化物の付着がみられた。11点とも接合試料で、ほぼ完形である。

４）考　　察

礫組成の検討の結果、花崗岩類や砂岩、泥岩などの堆積岩類、安山岩、石英斑岩などの火成岩類など９種類が確認された。いずれの遺構も類似した礫組成を示し、特に花崗岩類と砂岩が優先する傾向が認められる。

胎内川扇状地の後背地である櫛形山地は白亜紀の花崗岩類や新第三系からなり、扇状地を構成する礫はこれらの地質から供給されている。集石遺構の礫組成もこれらの地質と調和的であり、現在の胎内川河床でも見られる礫組成と考えられるが、遺跡と胎内川とは1.5㎞ほど離れており河床から運ばれたとは考えにくい。遺跡付近の表層地質には礫まじりの砂層が存在することから［日本道路公団 2003］、集石遺構の礫は地層中から自然に露出したものが集められた可能性が高い。

5　まとめ

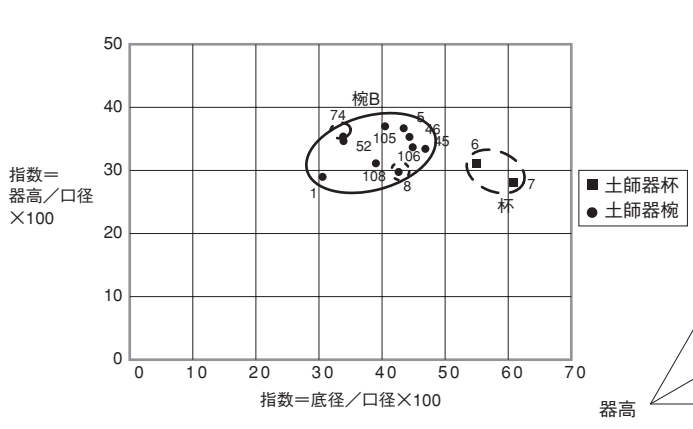
A　沢田遺跡出土の遺物について

平成17年度の調査では、下層（Ⅷa・Ⅷb層）からの出土遺物が大半を占め、上層（Ⅵa・Ⅵb層）からは土器および礫が少量出土し、最上層（Ⅲ層）からは製塩土器のみが確認できた。土器については、土師器が主体で、須恵器は少量である。土師器は食膳具の杯・椀、煮炊具の甕・鍋、そして製塩土器が、須恵器は貯蔵用の甕・壺・瓶が確認された。遺構からは一括出土は見られず、また河道跡への一括廃棄を窺わせる状況も確認できなかった。

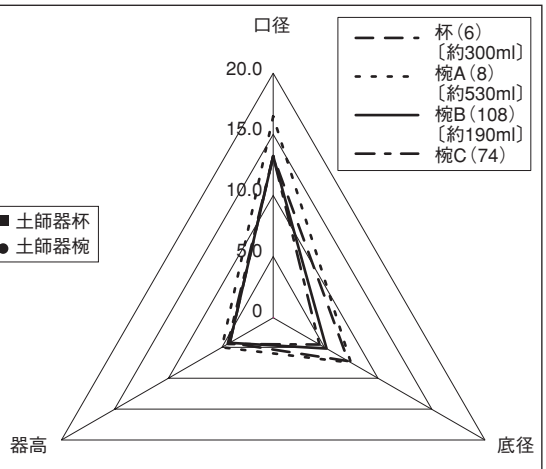
以下では、本遺跡の主体となる下層出土の遺物について触れる。

食膳具については、平成16年度の調査成果同様に、須恵器は出土せず、土師器のみであった。土師器の食膳具には、杯・椀がみられたが、小皿のように身が浅いものや有台椀は確認できなかった。杯はSK1124から出土しており、椀に比べ底径が大きく、体部から口縁にかけて内湾せずにまっすぐ立ち上がり、須恵器杯と類似する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、器形的に土師器椀より古い様相をみせるが、作り自体は粗雑な印象を受ける。椀については、椀Ａのように切り離し後、底部外面や体部外面下半にケズリ調整を施すものもあるが、ほとんどが椀Ｂのように回転糸切り後無調整である。椀Ｂの中には器壁が薄いもの（4・10・20・47・53・55）や厚いもの（34・48・50・51）、口縁部が屈曲し立ち上がるもの（56・57）がみられる。椀Ｃの内、Ｃ１は黒色処理を施さないが、内面にミガキ調整が行われ、Ｃ２の黒色土器を意識して作られたと考えられる。また、口縁端部が外反するもの（69・70・71）を含んでいる。椀Ｃ２には、底部回転糸切り後無調整（74・80）と体部外面下半にケズリ調整が施されるもの（77）が存在する。

第17図は沢田遺跡出土の土師器食膳具の法量分布図であり、杯は底径指数54以上を、椀Ｂは底径指数30～45を示す。椀Ｃ２も椀Ｂが示す範囲内に収まり、両者は器形が似ていることを表している。椀Ｂ・Ｃ２の中でも１・52・74のように底径指数30～34を示すものは、底径が比較的小さいことを表している。椀Ａは他の椀に比べ大ぶりであるが、図を見る限りでは、椀Ｂの示す範囲内に収まり、両者は器形が似ていることを表している。椀Ａと椀Ｂの１は器高指数が30前後を示し、他の椀に比べ身が浅いものである。また、第18図は口径・底径・器高をレーダーチャートで表した図であり、土師器食膳具の中から、分類案の代表的な杯（6）・椀Ａ（8）・椀Ｂ（108）・椀Ｃ２（74）についてに示した。椀Ａは、椀Ｂ・椀Ｃ２に比べて、



第17図　土師器食膳具の法量分布図



第18図　土師器食膳具のレーダーチャート図

口径・底径・器高のいずれの数値も上回り、出土した土師器椀の中で器形が大きく、土師器杯は椀Ｂ・椀Ｃ2と比べ、口径は差ほど変わらないが、底径は大きいことがわかる。椀Ｂと椀Ｃ2は似たような数値の範囲を示し、整形技法は異なるが器形は似ていることがわかる。第17図で取上げなかった食膳具についてもほぼ同様の傾向がみられる。

下層の土師器杯・椀には上記のような形態・技術上の特徴が見い出せ、椀Ｂ・Ｃは概ねⅦ１・２期（10世紀前葉～後葉）の範疇に属する。従って下層の遺物は、平成16年度の成果同様10世紀前葉～中葉が主体と考えられる。但しSK1124№６・７と類似する土器が、長岡市門新遺跡SB01P246の掘り形から出土し、地鎮の例とされている。SB01雨落溝出土の「延長六年十月」（928年）銘の漆紙文書よりも時期が古く、10世紀第１四半期後半の可能性が指摘されている［田中1995］。本遺跡のSK1124の所属層位が他遺構より下層である調査結果と合わせ、遺物についても遺跡内では古いⅥ～Ⅶ１期に相当する可能性を指摘しておきたい。沢田遺跡周辺で同時期と考えられている遺跡としては、荒川町田島遺跡［吉井2001］が挙げられる。

須恵器については、貯蔵用の甕・壺・瓶が確認された。出土数が少なく、器形を復元できるものは、少ない状況であったが、中には平成16年度の調査区出土の甕と接合した破片もあった。一部、97や99のように胎土が粗い甕の破片もあるが、比較的精良な胎土で、１㎜前後の白色粒子を含む特徴が見られる。春日真実氏が須恵器の胎土分類を行っているが［春日2001］、その分類を参考にするとＣ２類にあたり、佐渡小泊窯跡群産の可能性が高いと言える。また、白色粒子のほかに0.5～２㎜の黒色の斑点が見られるものもあり、坂井秀弥氏が分類した須恵器の胎土Ｂ群の特徴にあたり［坂井1989］、前述同様に佐渡小泊窯跡群の製品と考えられる。以上から今年度出土した須恵器の中には、小泊窯跡群の製品が含まれている可能性が高いことが窺える。

Ｂ　沢田遺跡の性格と変遷について

沢田遺跡は、現在の海岸線から約３㎞のところにある。本遺跡が活動していた９～10世紀代は海岸砂丘がすでに存在しており、現在と海岸線の距離はさほど変わらないと推定される。平成16年度の調査では炉跡が上下層合わせて15基、集石が５基検出されており、この中には製塩土器や焼礫が出土している遺構もあること、炉跡や性格不明遺構の一部から魚類の焼骨片が出土していることなどから、製塩関連もしくは塩を使った加工品作りに特化した作業場であると位置づけている。特に炉跡SR1002（第19図）出土の焼土は海洋性の珪藻土と分析され、重軽鉱物分析では、この珪藻土は遺跡周辺の沖積層には求められず、産出地は最短距離で櫛形山地周辺の丘陵部と推定されている。仮に遺跡から離れた丘陵より珪藻土を搬入して炉を構築したとすれば、通常の屋外炉とは趣を異にし、SR1002は通常の煮炊などの行為よりも強い火力、または火力（温度）管理などの向上のために考案された施設であった可能性が高い。平成16年度調査の報文にもあるように、土堤及び炉壁を有する炉［近藤1980］の可能性があり製塩炉の一つと考えたい。

平成17年度調査で検出された炉跡SR1153は被熱面を持っており、火を使用したと考えられる遺構である。その北側に隣接する集石SS1151は被熱して破砕した礫が一定範囲内に分布し、周辺に炭化物粒や焼土粒子も見られ、両遺構は一体のものと考えられる。SR1153からは１・２の土師器椀と土師器甕小型品（SS1151出土と接合）がいずれも集石面や被熱面直上で出土している。また、双方とも二次焼成を受けている。この内２は器壁に炭化物の付着が見られないことから、少なくとも廃棄直前の煮沸行為で有機物入りの液体を煮込んだとは考えられない状況である。2は輪積み痕を内外面に残す粗雑な作りであることから、

製塩関連の土器である可能性が高いと考えられる。また、器形が若干異なるが、新潟市出山遺跡出土の小型で平底の製塩土器と類似点が多い［甘粕ほか1994］。

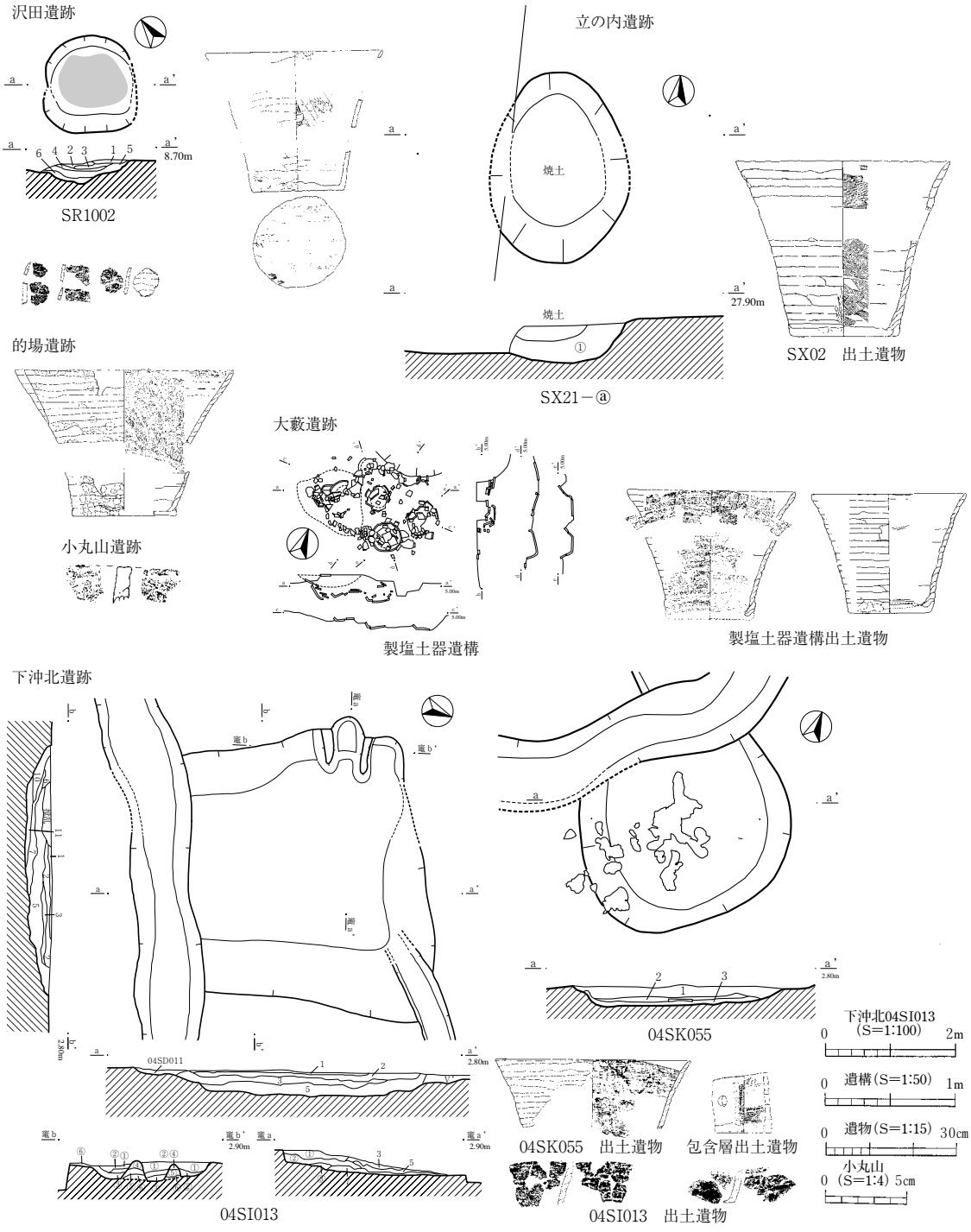
沢田遺跡では掘立柱建物跡や竪穴住居跡などの居住域が検出されていない。これは、本遺跡が当時の一般的な集落とは性格を異にしていたためであろう。

県内では７世紀末～８世紀初頭から土器製塩が海岸近くで始まり、９世紀中葉には内陸部にも製塩関連の遺跡が見られるようになるという［坂井1992］。内陸に位置し、製塩関連遺構もしくは遺物が検出された遺跡の内、官衙関連の新潟市的場遺跡（第19図）［小池ほか1993］、富裕農民の居住域と目される同市小丸山遺跡（第19図）［藤塚ほか1987・甘粕ほか1994］などは、遺跡の性格や出土状況から、製塩土器を塩の運搬具とし水産物加工や調理塩として使用した、塩の消費遺跡の様相を示す。一方、糸魚川市立ノ内遺跡（第19図）［高橋保ほか1988］など居住域を示す建物等は周辺に検出されず、小規模ながら製塩関連の作業場と目される遺跡である。後者については、調査範囲の制約から居住域の検討ができないという限界もあるが、少なくとも居住域とは少し離れた所で作業が行われた可能性が遺構の配置などから窺われる。調査面積が狭く不明な点が多いが新潟市大藪遺跡（第19図）［甘粕ほか1994］では、製塩土器遺構や焼土状遺構が集中することから、作業場が想定される。また、柏崎市下沖北遺跡（第19図）も竪穴状遺構やその周辺から製塩土器が出土し、焼土遺構と製塩土器を廃棄した土坑も検出され［山崎ほか2005］、作業場の可能性がある。検出遺構は不定形の落ち込み内に火床を持つもの（立ノ内遺跡）、焼土状遺構や被熱破砕礫及び炭化物の散布（大藪遺跡）などで、特に大藪遺跡遺構群のあり方は沢田遺跡のそれに近いと考えられる。

これらの遺跡は、いずれも海岸線から数㎞以内の河川や低湿地、潟湖などの内水面に面した立地条件にあり、沢田遺跡同様、内水面交通の利便性を意識し選地した可能性が高い。平成16年度の調査成果からも遺跡の中心時期である下層の時期には、遺跡東側は、比較的水量の多い沼沢状河川であったことが分かっている。しかし、遺跡が衰退する上層の時期には川が浅く止水した沼沢状河川に変化し、水上交通の利便性を失っていったと考えられている［熊崎ほか2005］。平成17年度の調査からも河道部Ⅷb層相当層は、シルトと砂層が幾重にも重なり層厚約１mあり、この層の上位と下位から10世紀代の遺物が出土し、比較的短期間に河川が埋没していったことを物語っている。このことから遺跡の盛衰に水上交通の利便性が少なからずかかわっていた可能性が高い。

最後に遺構・遺物からみた沢田遺跡の性格及び変遷について、平成16年度の調査成果も踏まえ簡単に述べたい。遺跡の最盛期は10世紀前葉で、不確実ながらその前身は９世紀に遡る可能性がある。最盛期には遺構のあり方から一般的な集落ではなく、ある作業に半ば特化した作業場であったと考えられ、「ある作業」とは出土遺物や検出遺構から塩作りまたは、塩を用いる作業が想定される。この想定の補足として植物珪酸体分析では、周辺での稲作の痕跡は見つからず、反面イネ・アズキ・アサ・ダイズ・ナス・モモ・クルミ・トチなどの食用植物の種実が大量に出土した。当地に進出した理由は稲作等の農耕のためではなく、むしろそれ以外の目的であろう。出土した食用植物は食料として、本拠地の集落から持ち込まれたと考えられる。仮に塩作りやそれによって得られた塩を用いた作業（食品加工など）を目的としたのであれば、作業期間の制限が考えられ、季節を選んでの作業形態も考慮しなければならないであろう。作業は土器型式から10世紀中葉まで続けられたが、この段階の遺構は極めて少ない。これが実際の作業規模の縮小を示すのか、もともとこの程度の作業規模が10世紀前葉から累積し、視覚的に規模が小さく見えるのかは検討の余地がある。この間の河道の変遷は前述した通りであるが、遺跡の盛衰には内水面の水上交通の利便性が大きくかかわっていたと考えられる。上層での活動後、さらに土壌の堆積は進み自然堤防上で30㎝

前後、河道上でそれ以上の堆積が見られ調査区内はほぼ平坦になっていく。最上層段階では性格不明遺構と溝状遺構が確認されたのみであるため、遺跡内で塩作り等の作業が行われたことについては疑問が残る。しかし、この層の段階で調査区東側隅に新たな川が形成されており、作業が再開された可能性も否定できない。時期については製塩土器以外の遺物が出土しなかったため不明であるが、土器製塩の下限はおよそ11世紀頃より下ることはないと考えられる［高橋保1999］。



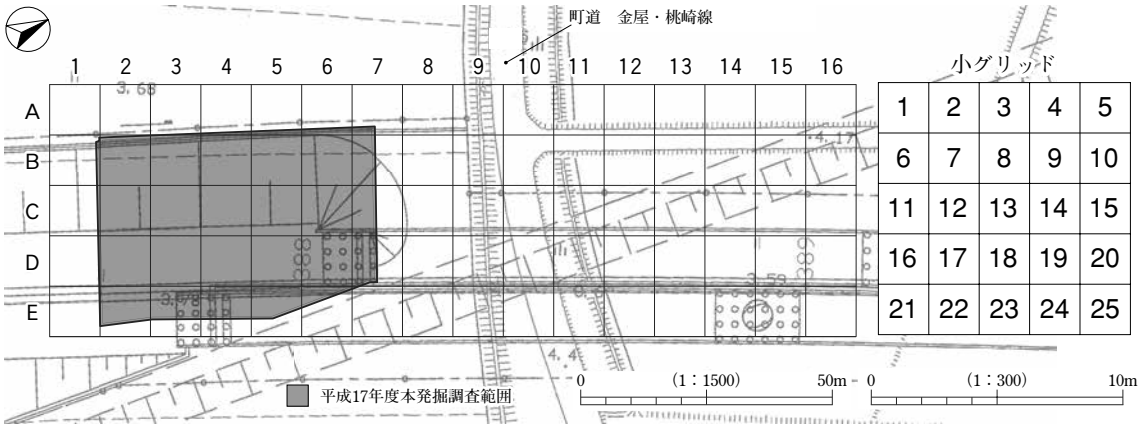
第19図　新潟県内の内陸部の製塩関連の遺構と遺物

第Ⅳ章　桜林遺跡

1　調査の概要

A　グリットの設定

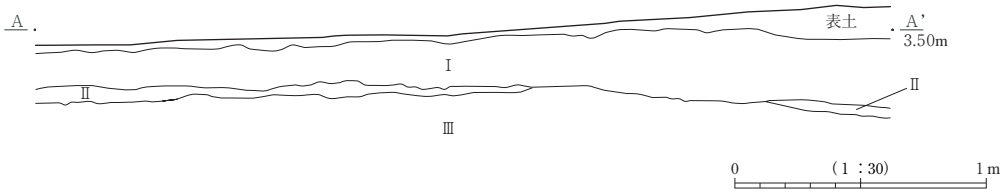
調査グリッドは、道路法線のセンター杭ＳＴＡ388（Ｘ：237193.216、Ｙ：80644.082）とＳＴＡ389（Ｘ：237283.440、Ｙ：80687.194）を結ぶラインを南北方向の主軸として設定した。主軸は、真北方向に対して26°06′29″東へ傾く。グリッドの表示方法については沢田遺跡と同じである。



第20図　桜林遺跡グリッド設定図

B　基本層序

今回の調査範囲には、地山上部を含め遺物包含層は削平により存在せず、表土除去後すぐに遺構確認面となった。標高は3.2～3.4mである。



第21図　桜林遺跡基本層序

以下に層序を記す。

Ⅰ層　浅黄色（2.5Y7/3）砂質シルト層。砂の粒子が細かく、粘性・締りともにやや強く、φ１㎜以下の褐鉄粒を多量に含み、植物遺体を少量含む。φ20～50㎜の褐灰色（10YR5/1）粘性シルトがブロック状に混入。場所によっては、灰白色（5Y7/1）に変色している。その部分には酸化した植物遺体が目立つ。

Ⅱ層　灰白色（2.5Y8/2）砂層。砂の粒子が細かく、部分的に砂質シルトが混入。粘性弱く、締り強い。

Ⅲ層　浅黄色（2.5Y7/4）シルト層。粘性・締りともに強い。φ１㎜以下の褐鉄粒を多量に含み、植物遺体は少量に含まれる。Ⅰ層同様に、場所によっては、灰白色（5Y7/1）に変色している。

2 遺　　構

A 概　　要

調査区北側、４Ｂ～Ｃ、５Ａ～Ｃ、６Ｃ、７Ｃグリッドに遺構が分布している。検出された遺構は溝状遺構２条、ピット１基であるが、遺物が出土していないため時代を特定できない。

B 各　　説

SD001（図版17・図版33）

４Ｃ・Ｄ、５Ａ～Ｃグリッドに位置する細長い溝状遺構である。長さは約14.3m、幅は48～104㎝、断面は弧状を呈するが、部分的に階段状を呈し、深さは15～18㎝である。覆土は２層でレンズ状に堆積しているが、地山が高く残存する部分でのみ確認できる。１・２層ともに砂質シルトが主体で、１層には炭化物粒を多量に、２層には炭化物粒を極微量に含んでいる。

SD002（図版17・図版33）

５～７Ｃグリッドに位置する細長い溝状遺構である。SD001に直交するような状況で検出されるが、新旧関係は確認できなった。長さは22.6m、幅は20～24㎝、断面は弧状を呈し、遺構の南側に向かって、覆土の堆積が薄くなり、深さは６～８㎝である。覆土は２層でレンズ状に堆積しているが、６Ｃ５・７Ｃ１～２グリッド部分でのみ確認できる。１・２層ともに砂質シルトが主体で、炭化物粒を極微量に含んでいるが、１層は非常に薄く堆積し、２層のほうが土のしまりが強い。

P003（図版17・図版33）

４Ｂ25、５Ｂ21グリッドに位置するピットである。平面は円形で、直径が28㎝、断面はＵ字状を呈しており、深さは48㎝である。覆土は単層で、暗灰黄色の砂質シルトが主体、炭化物粒を多量に含んでいる。先端は細長く北に伸び、人為的な掘り込みというより、木の根の可能性がある。

3 遺　　物

表土中や近現代の溝から近世以降の陶磁器や寛永通宝がわずかに出土したのみで、具体的に遺跡の時代や性格を特定する遺物は１点も出土しなかった。

4 ま と め

今回の調査範囲からは、溝状遺構２条、ピット１基が検出されただけで、その時代を特定する遺構の検出および遺物の出土は見られなかった。以前に行われた試掘の結果から、桜林遺跡は古代及び近世の集落跡と推定されており、今回の調査範囲より北側の地区で中世以前の遺構及び遺物が確認されている［石川2003］。今回の調査範囲は桜林遺跡の中心的な部分から外れた地区であったと考えられる。

要　　約

沢田遺跡

1　沢田遺跡は新潟県胎内市（北蒲原郡旧中条町）大字赤川字沢田1843-１ほかに所在する。

2　遺跡は新潟平野の北東部に位置し、胎内川扇状地の端部に形成された小規模な自然堤防上にある。遺構確認面の標高は約8.8mである。

3　発掘調査は、日本海東北自動車道建設に伴い、試掘調査は平成13年９月20日～10月２日に実施した。平成16年度本発掘調査は平成16年４月７日～９月21日まで５グリッド以北について、平成17年度本発掘調査は平成17年４月１日～８月31日まで４グリッド以南について実施した。本書の対象は平成17年度本発掘調査である。調査面積は3,740㎡（Ⅲ層830㎡、Ⅵ層830㎡、Ⅷa層1,040㎡、Ⅷb層1,040㎡）である。

4　調査の結果、最上層（Ⅲ層）と上層（Ⅵ層）、下層２層（Ⅷa・Ⅷb層）の計４層で遺物包含層が確認された。また遺構は遺物包含層Ⅲ・Ⅷb層に伴うものが検出された。いずれも古代（平安時代中期）の遺構と遺物である。

5　下層からは炉跡１基、集石４基、土坑２基、性格不明遺構13基、ピット４基、溝状遺構３条が検出された。また遺跡の東側半分は河道跡によって占められることも判明した。遺物では土師器食膳具（杯・椀）、土師器煮炊具（甕・鍋）、製塩土器および製塩関連遺物（バケツ形・土師器甕の小型品・支脚）、須恵器貯蔵具（甕・壺・瓶）、自然遺物（植物遺体・獣骨）、礫が出土した。

6　最上層では性格不明遺構１基と溝状遺構１条が検出され、このうち性格不明遺構ＳＸ013からは、製塩土器細片が出土した。

7　調査区は遺跡の南端部に相当すると考えられる。調査区外西側の農道に向かって、遺構・遺物が密になる状況が窺えることから、遺跡の中心は西側のより標高の高い箇所にあると推定される。

8　平成16年度調査の炉跡ＳＲ1002の焼土塊は、重軽鉱物分析の結果、櫛形山地の丘陵地から持ち込まれたものと推定できる。したがって、同遺構は強い火力を要した炉であり、遺物の出土状況等も考え合わせ、製塩関連の遺構である可能性が高いといえる。

9　遺跡の性格は一般的な集落ではなく、内水面に接し、二次製塩やそれによって得られた塩を用いた食品加工をなかば専業的に行った作業場と考えられる。

桜林遺跡

1　桜林遺跡は新潟県岩船郡荒川町大字金屋字桜林1372ほかに所在する。

2　遺跡は新潟平野の北東部に位置し、確認面の標高は約3.3mである。

3　発掘調査は、日本海東北自動車道建設に伴い、試掘調査は平成14年８月１日～８月９日と同年11月18日～11月21日に実施した。本発掘調査は平成17年９月１日～９月30日に実施した。本書の対象は平成17年度本発掘調査である。調査面積は2,000㎡である。

4　表土層と遺物包含層は調査前にすでに削平を受け確認できなかった。遺構は溝状遺構２条とピット１基が検出された。遺物は近世以降の陶磁器や寛永通宝のみであった。

5　遺跡の性格や時期を判断する資料は得られなかった。

引用・参考文献

甘粕　健ほか 1994　『新潟市史』資料編Ⅰ　新潟市

荒川隆史ほか 1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉Ａ遺跡（本文・観察表編）』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史ほか 2004　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡（本文・観察表編）』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

飯坂盛泰ほか 2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第115集 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀　2003　「推定地10（桜林遺跡）試掘調査」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成14年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

石橋輝樹　1977　「Ⅶ地下資源 4 水資源 4 ・ 2 地下水」『新潟県地質図説説明書』新潟県

伊藤　崇　1998　『松山窯跡』新潟県黒川町教育委員会

宇野隆夫　1994　「一郡一窯的体制について」『北陸古代土器研究』第４号　北陸古代土器研究会

春日真実　1997　「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第７号　北陸古代土器研究会

春日真実　1999　「第４章 古代 第２節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院

春日真実　2001　「第Ⅴ章　遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第104集 梯子谷窯跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

金子拓男　1996　「大化元年「越国奏上」についての検討」『越と古代の北陸』古代王権と交流３　名著出版

鴨井幸彦　2000　「Ⅵ応用地質 1 土木地質 1.1 平野部の地盤 1.1.1 沖積平野の特徴」『新潟県地質図説説明書(2000年度)』新潟県商工労働部商工振興課

川上貞雄　1982　『加治川村文化財調査報告（１） 貝屋須恵窯址』加治川村教育委員会

熊崎　保ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第144集 沢田遺跡・一杯田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

栗林宣明　2002　「推定地２（沢田遺跡）一次調査」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成13年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池邦明ほか 1993　『新潟市的場遺跡』新潟市教育委員会

小林昌二　1999　「第3章1 国郡制の施行」『村上市史』通史編１　村上市

近藤義郎　1979　「土器製塩の話（１）」『考古学研究』第26巻第３号　考古学研究会

近藤義郎　1980　「土器製塩の話（４）」『考古学研究』第27巻第２号　考古学研究会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　2002　『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成13年度』

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　2003　『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成14年度』

坂井秀弥　1989　「第Ⅴ章 3 奈良・平安時代 Ａ土器の概観」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実　1991　「佐渡の須恵器」『新潟考古』第２号　新潟県考古学会

坂井秀弥　1992　「新潟平野における古代塩生産の変容」『新潟考古学談話会会報』第10号　新潟考古学談話会

高橋　保　1988　「新潟県における古代の土器製塩」『新潟考古学談話会会報』第２号　新潟考古学談話会

高橋　保　1999　「第４章 第４節 生産と流通 第４項製塩」『新潟県の考古学』高志書院

高橋　保ほか 1988　『新潟県埋蔵文化財調査報告 第49集 立ノ内遺跡』新潟県教育委員会

高濱信行・卜部厚志　2004　「第Ⅰ章 1　青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 青田遺跡（関連諸科学・写真図版編）』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

胎 内 市　2005　『市勢要覧』

田中　靖　1995　『和島村文化財調査報告書 第４集 門新遺跡』和島村教育委員会

東京大学史料編纂所　1985　『越後国郡絵図 二 瀬波郡』東京大学出版会
戸根与八郎　1973　「新潟県北蒲原郡加治川村下小中山の須恵器窯」『越佐研究』第33集
戸根与八郎　2004　「第一編 考古・古代　第三章 律令の時代　第一節 律令国家の成立と展開」『中条町史』通史編 中条町史編さん委員会
富井秀正　2004　「第三編 近世　第三章 産業の発展　第一節 農業」『中条町史』通史編　中条町史編さん委員会
新 潟 県　2005a　「胎内市遺跡分布図」『市町村別遺跡分布地図』
新 潟 県　2005b　「荒川町遺跡分布地図」『市町村別遺跡分布地図』
新潟県商工労働部工業振興課　1989　『新潟県地質図（20万分の１）および説明書』新潟県
新潟県農地部農地計画課　1972　『下越開発地域 土地分類基準調査 中条』新潟県
新潟古代土器研究会　2004　『越後阿賀北地域の古代土器様相』
日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会　1988　『日本の地質４　中部地方Ⅰ』共立出版
日本道路公団　2003　『日本海東北自動車道 新潟空港ＩＣ～中条ＩＣ間 建設誌』日本道路公団北陸支社 新潟工事事務所
野水晃子ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第146集 西川内北遺跡 西川内南遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
平川　南　2005　「古代越後国の磐船郡と沼垂郡」『古代の越後と佐渡－環日本海歴史民俗学叢書12－』高志書院
藤塚　明ほか 1987　『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』新潟市教育委員会
水澤幸一　1994　『中条町埋蔵文化財調査報告 第４集 高伝坂遺跡・中ノ沢遺跡』中条町教育委員会
水澤幸一　1996　『中条町埋蔵文化財調査報告 第９集 下町・坊城遺跡・中倉遺跡ほか』中条町教育委員会
水澤幸一　1999a　『中条町埋蔵文化財調査報告 第15集 兵衛遺跡・四ツ持遺跡』中条町教育委員会
水澤幸一　1999b　『中条町埋蔵文化財調査報告 第16集 中倉遺跡３次』中条町教育委員会
水澤幸一　1999c　『中条町埋蔵文化財調査報告 第18集 下町・坊城遺跡Ⅲ』中条町教育委員会
水澤幸一　2004　『中条町埋蔵文化財調査報告 第30集 草野遺跡２次』中条町教育委員会
水澤幸一　2005　「潟街道の遺跡群」『古代の越後と佐渡－環日本海歴史民俗学叢書12－』高志書院
水澤幸一ほか 2002　『中条町埋蔵文化財調査報告 第25集 船戸桜田遺跡４・５次 船戸川崎遺跡６次』中条町教育委員会
水澤幸一ほか 2004　『中条町埋蔵文化財調査報告 第31集 屋敷遺跡２次』中条町教育委員会
三辻利一　1999　「第５章 第１節 元山窯跡群出土須恵器の蛍光Ｘ線分析」『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第５集 元山窯跡群』荒川町教育委員会
山崎忠良ほか 2005　「第Ⅳ章 下沖北遺跡　３下層の調査」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第140集 東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉井雅勇　1993　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第１集 坂町宮ノ腰Ｂ遺跡』荒川町教育委員会
吉井雅勇　1994　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第２集 古谷地Ｂ遺跡・寺田遺跡・赤井遺跡』荒川町教育委員会
吉井雅勇　1996　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第３集 高柳Ａ遺跡・高柳Ｂ遺跡・名割遺跡』荒川町教育委員会
吉井雅勇　1999　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第５集 元山窯跡群』荒川町教育委員会
吉井雅勇　2000　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第６集 坂町宮ノ腰Ｄ遺跡』荒川町教育委員会
吉井雅勇　2001　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第７集 田島遺跡』荒川町教育委員会
吉井雅勇　2002　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第８集 鴨侍遺跡』荒川町教育委員会
吉井雅勇　2003　『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第10集 田屋遺跡・坂町宮ノ腰Ｃ遺跡』荒川町教育委員会

沢田遺跡 遺物観察表（1）

報告No.	種類	器種	椀の分類	出土位置			法量			胎土	色調		焼成	調整・技法			ロクロの回転方向		口縁残存(X/16)	底径/口径	器高/口径	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高		外面	内面		外面	内面	底面	水挽	ケズリ				
1	土師器	椀	B	2B	SR1153	1層	13.0	4.6	3.8	やや密、φ0.5㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	－	5	0.37	0.29	二次焼成、内外面に煤付着、内面が剥離、タテ傷有り
2	土師器	甕	－	2B	SS1151	1層	7.5	3.0	4.6	やや粗、φ0.5～4㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	灰黄	灰黄	やや不良	輪積み、指頭圧痕	輪積み、指圧頭痕	－	－	－	4	－	－	二次焼成、小型品、作りが粗雑
3	土師器	椀	B	3B	SS1135	1層	11.6	－	－	密、φ0.5～1㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	2	－	－	二次焼成
4	土師器	椀	B	3B	SS1136	1層	13.2	－	－	やや密、φ0.5～1㎜小礫、雲母	灰褐	灰褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	3	－	－	二次焼成
5	土師器	椀	B	3B	SS1141	1層	12.2	5.3	4.5	密、φ0.5～2㎜小礫、雲母、海綿骨針	浅黄橙	灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	－	1	0.43	0.37	内面磨耗
6	土師器	杯	－	4A	SK1124	1層	13.1	7.2	4.1	やや粗、φ1～5㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	右	－	13	0.55	0.31	二次焼成、外面に煤付着
7	土師器	杯	－	4A	SK1124	1層	13.8	8.4	3.9	やや粗、φ1～5㎜小礫、石英、長石、雲母、φ1㎜褐色粒	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り→回転ナデ調整	右	－	7	0.61	0.28	
8	土師器	椀	A	4A	SK1124	2層	16.4	7.0	4.9	密、φ0.5～2㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	浅黄橙	橙	良	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	切り離し→ヘラケズリ	右	－	12	0.43	0.30	底部外面に煤付着
9	土師器	椀	B	4A	SK1124	1層	11.6	－	－	やや粗、φ1～5㎜小礫、雲母、海綿骨針、φ1㎜褐色粒	浅黄橙	浅黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	－	－	
10	土師器	椀	B	4A	SK1124	1層	11.0	－	－	密、褐色粒、石英、長石、海綿骨針	灰白	にぶい黄橙	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	5	－	－	二次焼成
11	土師器	椀	B	4A	SK1124	1層	－	－	－	やや密、白色粒、赤色粒、石英	にぶい黄橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	1	－	－	口縁部内面黒ずむ
12	土師器	椀	C2	4A	SK1124	1層	－	5.8	－	密、φ0.5～1㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい橙	オリーブ黒	良	ロクロナデ	ロクロナデ→放射状ミガキ	回転糸切り	右	－	－	－	－	内面黒色処理、外面磨耗
13	土師器	製塩土器	－	4A	SK1124	1層	－	－	－	粗、φ1～3㎜小礫、石英、長石	にぶい褐	にぶい赤褐	良	輪積み	輪積み→ナデ	－	－	－	－	－	－	二次焼成
14	須恵器	壺類	－	4A	SK1124	1層	－	－	－	やや密、白色粒	灰	灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	－	－	肩部外面自然釉付着、突帯付き、黒色斑点、109と同一個体の可能性有り
15	須恵器	短頸壺	－	4A	SK1124	1層	16.2	－	－	やや密、白色粒、長石、海綿骨針	灰	灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	1	－	－	頸部内外面が剥離
16	土師器	椀	B	4A	SX1125	1層	13.0	－	－	密、φ0.5㎜以下小礫、4㎜小礫、海綿骨針	浅黄橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	右	－	2	－	－	褐色の細かい斑点、17と同一個体の可能性有り
17	土師器	椀	B	4A	SX1125	1層	－	4.8	－	密、φ0.5㎜以下砂、長石、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	－	－	褐色の細かい斑点、底部外面に煤付着、16と同一個体の可能性有り
18	土師器	支脚	－	4A	SX1125	1層	－	－	－	やや粗、φ1～2㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	にぶい橙	－	やや不良	輪積み、指圧痕	－	－	－	－	－	－	－	二次焼成
19	土師器	甕	－	3A	SX1126	1層	－	－	－	やや粗、φ0.5～3㎜小礫	暗灰黄	暗灰黄	良	ハケ目	ナデ	－	－	－	－	－	－	二次焼成、外面に煤付着
20	土師器	椀	B	3A	SX1128	1層	－	－	－	密、φ0.5㎜以下白色粒、海綿骨針	にぶい橙	にぶい灰橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	1	－	－	
21	土師器	鍋	－	2A	SX1128	1層	－	－	－	やや粗、φ0.5～2㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい灰橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	1	－	－	外面のロクロナデ一部不安定
22	土師器	鍋	－	3A	SX1128	1層	－	－	－	やや粗、φ1～2㎜小礫、雲母	灰黄	暗灰黄	良	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラナデ	－	－	－	1	－	－	二次焼成
23	土師器	鍋	－	2A	SX1128	1層	－	－	－	やや粗、φ1～4㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰白	灰白	普	－	ナデ	－	－	－	－	－	－	二次焼成
24	須恵器	壺類	－	3A	SX1128	1層	－	－	－	やや密、φ0.5～1㎜小礫、白色粒	灰白	灰	良	叩き目→ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	－	－	黒色斑点、111と同一個体の可能性有り
25	土師器	椀	C2	3A	SX1129	2層	－	6.2	－	密、雲母、海綿骨針	黒	黒	良	ロクロナデ→回転ヘラケズリ	ロクロナデ→放射状ミガキ	回転糸切り	－	－	－	－	－	内外面黒色処理

沢田遺跡 遺物観察表(2)

報告No.	種類	器種	椀の分類	出土位置			法量			胎土	色調		焼成	調整・技法			ロクロの回転方向		口縁残存(X/16)	底径/口径	器高/口径	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高		外面	内面		外面	内面	底面	水挽	ケズリ				
26	土師器	椀	B	3B	SX1138	1層	−	−	−	密、φ0.5㎜以下小礫、雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	右	−	−	−	−	二次焼成、内外面に煤付着
27	土師器	甕	−	3B	SX1138	3層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜2㎜小礫、雲母	灰白	黄灰褐色	良	ヨコナデ	ナデ	−	−	−	−	−	−	二次焼成
28	須恵器	甕	−	3B	SX1138	1層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜4㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰黄褐	黒褐	良	平行叩き	同心円状当て具	−	−	−	−	−	−	二次焼成、内面に煤付着、外面剥離
29	土師器	椀	C1	2B	SX1139	1層	−	−	−	密、φ0.5〜1㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰黄	灰黄	良	ロクロナデ→部分的に回転ヘラケズリ	ロクロナデ→ヨコミガキ	−	−	右	1	−	−	ミガキ調整は下部のほうが強い
30	土師器	椀	B	2B	SX1139	1層	−	6.8	−	やや粗、黒色粒、長石、雲母	灰黄	灰黄	良	ロクロナデ→回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	右	右	−	−	−	内面剥離
31	須恵器	甕	−	2B	SX1139	1層	−	−	−	やや密、白色粒、石英、長石	灰	灰	良	格子状叩き	平行当て具	−	−	−	−	−	−	
32	土師器	椀	B	3B	SX1140	1層	14.9	−	−	密、白色粒、赤色粒、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	
33	土師器	椀	B	3B	SX1140	1層	12.4	−	−	密、白色粒、石英	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	外面に煤付着
34	土師器	椀	B	3B	SX1140	1層	13.0	−	−	やや密、石英、長石、雲母	にぶい黄褐	灰黄褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	3	−	−	二次焼成、内面剥離
35	土師器	椀	B	3B	SX1140	1層	−	7.2	−	やや粗、白色粒、石英、長石	橙	橙	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	−	−	−	−	−	
36	土師器	椀	B	3B	SX1140	1層	−	5.6	−	やや密、白色粒、雲母	灰褐	灰褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ	切り離し→手持ちヘラケズリ	−	−	−	−	−	SX1135出土の遺物と接合、二次焼成、内外面・断面に煤付着
37	須恵器	甕	−	3A、3B	SX1140	1層	−	−	−	やや密、φ0.5〜3㎜白色粒	灰	灰	良	ヨコ方向+複数方向の平行叩き	同心円当て具→カキ目	−	−	−	−	−	−	黒色斑点、昨年度調査出土の甕・98と接合
38	須恵器	甕	−	3B	SX1140	1層	−	−	−	やや密、φ0.5〜2㎜白色粒	灰	灰	良	複数方向の平行叩き	平行当て具	−	−	−	−	−	−	
39	土師器	製塩土器	−	2B	SK1150	1層	−	−	−	やや密、φ0.5〜2㎜小礫、長石	褐灰	黄灰	やや良	輪積み→ロクロナデ→ヨコナデ	輪積み→ロクロナデ→ヨコナデ	−	−	−	1	−	−	
40	土師器	鍋	−	1B	SX1152	1層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜2㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	灰黄	灰黄	普	ロクロナデ	ロクロナデ→ヨコナデ	−	−	−	1	−	−	二次焼成、外面に煤付着
41	土師器	椀	C2	2A	P1127	1層	−	−	−	やや密、φ0.5〜1㎜小礫、雲母	灰黄褐	黒褐	良	ロクロナデ→ヨコミガキ	ロクロナデ→ヨコミガキ	−	−	−	2	−	−	内面黒色処理
42	土師器	甕	−	4A	SD1144	1層	−	−	−	やや粗、φ1〜3㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ→複数方向のナデ	ロクロナデ→ナデ	−	−	−	1	−	−	二次焼成、内面に煤付着
43	土師器	椀	B	4A22	−	Ⅷb層	12.8	−	−	やや密、φ0.5㎜小礫、雲母	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	二次焼成、内外面に煤付着
44	土師器	椀	B	4A	−	Ⅷb層	−	−	−	やや密、φ0.5〜1㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	右	−	3	−	−	二次焼成、内面に煤付着
45	土師器	椀	B	4A17	−	Ⅷb層	12.8	6.0	4.3	密、白色粒、黒色粒、石英、長石	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	1	0.47	0.34	底部磨耗して調整痕が不明瞭
46	土師器	椀	B	2B9	−	Ⅷb層	12.4	5.5	4.4	やや密、雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→ナデ(一部)	−	−	11	0.44	0.35	体部外面が一部黒色化
47	土師器	椀	B	3B9	−	Ⅷb層	13.4	−	−	やや密、φ0.5㎜小礫、海綿骨針	浅黄橙	浅黄橙	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	外面磨耗
48	土師器	椀	B	4A16	−	Ⅷb層	−	−	−	密、φ0.5㎜以下小礫、雲母	浅黄橙	にぶい橙	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	右	−	2	−	−	
49	土師器	椀	B	4B11	−	Ⅷb層	13.8	7.4	4.2	密、φ0.5〜1㎜小礫、海綿骨針	にぶい橙	明赤褐	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	0.54	0.30	
50	土師器	椀	B	4A17	−	Ⅷb層	12.5	−	−	やや密、白色粒、灰色粒、雲母	灰黄褐	灰黄褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	3	−	−	二次焼成、内外面に煤付着、内面剥離

沢田遺跡 遺物観察表(3)

報告No.	種類	器種	椀の分類	出土位置			法量			胎土	色調		焼成	調整・技法			ロクロの回転方向		口縁残存(X/16)	底径/口径	器高/口径	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高		外面	内面		外面	内面	底面	水挽	ケズリ				
51	土師器	椀	B	4A16	−	Ⅷb層	14.0	−	−	やや密、雲母	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	二次焼成、内外面に煤付着、内面剥離
52	土師器	椀	B	3A8	−	Ⅷb層	11.2	3.8	3.9	やや密、φ0.5～1㎜小礫、海綿骨針	にぶい褐	にぶい褐	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	1	0.34	0.35	
53	土師器	椀	B	3B1	−	Ⅷb層	13.8	−	−	やや粗、φ0.5～3㎜小礫、雲母	浅黄橙	浅黄橙	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	二次焼成、外面に煤付着
54	土師器	椀	B	2A20	−	Ⅷb層	13.9	−	−	やや密、φ0.5～2㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰白	灰白	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	内面磨耗
55	土師器	椀	B	5A6	−	Ⅷb層	−	−	−	やや密、φ0.5～1㎜小礫	橙	橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	1	−	−	外面に煤・灰付着
56	土師器	椀	B	4A21	−	Ⅷb層	13.6	−	−	やや粗、黒色粒、石英、長石、雲母	浅黄橙	浅黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	4	−	−	外面タール状物質付着
57	土師器	椀	B	4A18	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5～2㎜・5㎜小礫、雲母	にぶい橙	にぶい橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	二次焼成、内外面に煤付着、内面に煤の斑点状
58	土師器	椀	B	3B11	−	Ⅷb層	−	4.4	−	密、φ0.5～1㎜小礫、雲母	灰白	灰白	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り→ナデ	−	−	−	−	−	内外面に煤付着、内外面磨耗
59	土師器	椀	B	3A7	−	Ⅷb層	−	5.4	−	やや密、φ0.5～1㎜・4㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	浅黄橙	浅黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	−	−	−	二次焼成、外面に煤付着
60	土師器	椀	B	3A22	−	Ⅷb層	−	5.9	−	やや粗、φ0.5～2㎜小礫、雲母	灰黄褐	灰褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	−	−	−	−	−	二次焼成、内外面に煤付着、内面荒れる
61	土師器	椀	B	3A16	−	Ⅷb層	−	5.0	−	やや粗、φ0.5～2㎜小礫、雲母	橙	橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	−	−	−	内外面に煤付着、底部外面に粘土塊接着
62	土師器	椀	B	4A21	−	Ⅷb層	−	5.8	−	やや粗、φ0.5～1㎜小礫、雲母	にぶい橙	にぶい橙	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	−	−	−	底部外面に煤付着
63	土師器	椀	B	4B12	−	Ⅷb層	−	5.2	−	やや密、φ0.5㎜以下砂、雲母、海綿骨針	灰白	灰白	良	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	−	−	−	−	
64	土師器	椀	B	3A11	−	Ⅷb層	−	7.4	−	やや密、φ0.5～1㎜小礫	橙	橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	−	−	−	−	−	
65	土師器	椀	B	4B12	−	Ⅷb層	−	3.8	−	やや密、φ0.5～1㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	浅黄橙	浅黄橙	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	−	−	−	底部立ち上がりの調整が丁寧
66	土師器	椀	B	4B9	−	Ⅷb層	−	5.8	−	やや密、φ0.5㎜以下小礫、海綿骨針	灰白	灰白	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	−	−	−	−	−	底部外面一部に黒味帯びる、内面磨耗
67	土師器	椀	B	4A12	−	Ⅷb層	−	5.5	−	やや密、φ0.5～1㎜小礫、8㎜小礫、雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	−	−	−	
68	土師器	椀	C1	2B7	−	Ⅷb層	14.6	−	−	密、φ0.5㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰黄	灰黄	良	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヨコミガキ	−	−	−	2	−	−	
69	土師器	椀	C1	4B11	−	Ⅷb層	−	−	−	密、φ0.5㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	褐灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ→ヨコミガキ	−	右	−	1	−	−	内面部分的に黒色化
70	土師器	椀	C1	3B1	−	Ⅷb層	−	−	−	密、φ0.5㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰白・ｵﾘｰﾌﾞ黒	褐灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	1	−	−	内外面部分的に黒色化
71	土師器	椀	C1	2A9	−	Ⅷb層	−	−	−	やや密、φ0.5～1㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰白	灰白	良	ロクロナデ	ロクロナデ→ヨコミガキ	−	右	−	1	−	−	口縁部外面に1段の凹、内面にタテ傷2か所
72	土師器	椀	C1	4B11	−	Ⅷb層	12.2	−	−	密、φ0.5㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰黄	灰黄	良	ロクロナデ	ロクロナデ→ヨコミガキ	−	−	−	1	−	−	内面にナナメ傷2か所
73	土師器	椀	C1	3B1	−	Ⅷb層	−	5.4	−	やや密、φ0.5～1㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ→放射状ミガキ	回転糸切り	−	−	−	−	−	
74	土師器	椀	C2	4B7	−	Ⅷb層	12.4	4.2	4.4	密、φ0.5㎜小礫、海綿骨針	橙+黒褐	黒褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ→放射状・ヨコミガキ	回転糸切り	−	−	1	0.34	0.35	内面黒色処理、外面一部に黒色処理
75	土師器	椀	C2	4A25	−	Ⅷb層	−	−	−	密、φ0.5㎜小礫、海綿骨針	にぶい黄橙	黒褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ→ヨコミガキ	−	−	−	1	−	−	内面黒色処理

沢田遺跡 遺物観察表(4)

報告No.	種類	器種	椀の分類	出土位置			法量			胎土	色調		焼成	調整・技法			ロクロの回転方向		口縁残存(X/16)	底径/口径	器高/口径	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高		外面	内面		外面	内面	底面	水挽	ケズリ				
76	土師器	椀	C2	1B14	−	Ⅷb層	−	−	−	密、φ0.5㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰黄・黒褐	黒褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ→ナナメ・ヨコミガキ	−	−	−	1	−	−	内面・口縁部外面黒色処理
77	土師器	椀	C2	3B7	−	Ⅷb層	−	5.2	−	密、φ0.5㎜小礫、雲母	にぶい黄橙	黒褐	良	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ→ヨコミガキ	糸切り→ヘラケズリ	−	右	−	−	−	内面黒色処理、外面に煤付着
78	土師器	椀	C2	4A18	−	Ⅷb層	−	4.4	−	密、φ0.5㎜小礫、雲母	灰白	黄灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ→放射状ミガキ	回転糸切り→ヘラケズリ	右	−	−	−	−	外面一部黒色化、内面黒色処理
79	土師器	椀	C2	1B14	−	Ⅷb層	−	5.1	−	やや密、φ0.5〜1㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰白	黒褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ→放射状・ヨコミガキ	回転糸切り→ヘラケズリ	−	−	−	−	−	内面黒色処理、底部外面に粘土しわ、糸切りの際に付いた傷
80	土師器	椀	C2	3A8	−	Ⅷb層	−	5.1	−	密、φ0.5㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰黄褐	黒褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ→放射状ミガキ	回転糸切り	右	−	−	−	−	内面黒色処理
81	土師器	長甕	−	3A15	−	Ⅵa層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜3㎜小礫、長石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	−	−	−	二次焼成、頸部内面・体部外面に煤付着
82	土師器	小甕	−	3B15	−	Ⅷb層	14.0	−	−	やや粗、赤色粒、石英、長石、雲母	褐灰	黒褐	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	2	−	−	二次焼成、外面に煤付着、口縁・頸部に吹きこぼれによる炭化物付着
83	土師器	甕	−	3B9	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、雲母、海綿骨針	黒褐	灰黄褐	良	ハケ目	ナデ	−	−	−	−	−	−	二次焼成、外面煤付着
84	土師器	甕	−	3B9	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、雲母、海綿骨針	黒褐	にぶい黄橙	良	ハケ目	ナデ	−	−	−	−	−	−	二次焼成、外面煤付着
85	土師器	甕	−	2A14	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜4㎜小礫、長石、雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや良	ロクロナデ→カキ目	ロクロナデ→カキ目	−	−	−	−	−	−	
86	土師器	鍋	−	4B4	−	Ⅷb層	−	−	−	普、白色粒、長石、雲母	褐灰	にぶい黄橙	良	ロクロナデ→ヘラ状工具調整	ロクロナデ	−	−	−	1	−	−	口縁内側の調整が丁寧ではない
87	土師器	鍋	−	1B14	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜2㎜小礫、雲母、海綿骨針	灰黄褐	灰黄褐	やや良	ロクロナデ	ロクロナデ→カキ目	−	−	−	1	−	−	二次焼成、口縁部外面に煤付着
88	土師器	鍋	−	4A22	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜2㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラナデ	−	−	−	1	−	−	二次焼成、体部外面赤色化
89	土師器	鍋	−	3B3	−	Ⅷa層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜3㎜小礫、雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや良	輪積み→ロクロナデ	輪積み→ロクロナデ	−	−	−	1	−	−	二次焼成、体部内面が灰色化
90	土師器	鍋	−	2A15	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜3㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	灰白	灰白	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	1	−	−	二次焼成、口縁部内面が赤色・灰色化
91	土師器	鍋	−	2A15	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜2㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	浅黄橙	灰黄	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	右	−	1	−	−	二次焼成、口縁部内外面及び断面に煤付着
92	土師器	鍋	−	3B6	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜2㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	1	−	−	二次焼成、口縁部内外面が灰色化
93	土師器	鍋	−	4B13	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜2㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラナデ	−	−	−	−	−	−	二次焼成、体部内面部分的に煤付着
94	土師器	鍋	−	4A13	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜6㎜小礫、石英、長石、雲母、海綿骨針	褐灰	灰白	やや良	ロクロナデ→平行叩き	ロクロナデ→ヘラナデ	−	−	−	−	−	−	二次焼成、体部外面部分的に煤付着
95	土師器	製塩土器	−	3B6	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜2㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや良	輪積み→ナデ(内面より弱い)	輪積み→ナデ、指頭圧痕	−	−	−	−	−	−	二次焼成、内面が灰色化
96	須恵器	甕	−	3B3・4・6	−	Ⅷa・Ⅷb層	28.2	−	−	やや密、φ0.5〜1㎜小礫、白色粒	灰	灰	良	口縁部ロクロナデ、平行叩き	同心円当て具	−	−	−	3	−	−	外面自然釉、細かい黒色斑点
97	須恵器	甕	−	2A11	−	Ⅷb層	−	−	−	粗、φ0.5〜4㎜小礫、石英	灰	灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	1	−	−	口縁部剥離
98	須恵器	甕	−	2C2	−	Ⅷb層	−	−	−	やや密、白色粒、小石	灰	灰	良	叩き→ナデ	同心円当て具→ロクロナデ→カキ目	−	−	−	−	−	−	内外面自然釉、黒色斑点、平成16年度調査出土の甕37と接合
99	須恵器	甕	−	2B6・8・11	−	Ⅷa・Ⅷb層	−	−	−	粗、石英、長石	灰	灰	良	平行叩き→カキ目	当て具→カキ目	−	−	−	−	−	−	内面に煤付着、輪積みもしくは粘土ひも巻き上げ際の接合痕
100	須恵器	甕	−	2A16	−	Ⅷb層	−	−	−	やや粗、φ0.5〜3㎜・5㎜小礫、白色粒	灰	灰	良	複数方向に平行叩き	平行当て具	−	−	−	−	−	−	二次焼成、煤付着、黒色斑点、102と同一個体の可能性有り

沢田遺跡 遺物観察表(5)

報告No.	種類	器種	椀の分類	出土位置			法量			胎土	色調		焼成	調整・技法			ロクロの回転方向		口縁残存(X/16)	底径/口径	器高/口径	備考
				グリッド	遺構	層位	口径	底径	器高		外面	内面		外面	内面	底面	水挽	ケズリ				
101	須恵器	甕	−	2A25、3B8	−	Ⅷb層	−	−	−	やや密、φ0.5～2㎜小礫、白色粒、石英	灰	灰	良	平行叩き	同心円当て具	−	−	−	−	−	−	−	外面自然釉、103と同一個体の可能性有り
102	須恵器	甕	−	3B3	−	Ⅷb層	−	−	−	やや密、φ0.5～2㎜白色粒、石英	灰	灰	良	複数方向に平行叩き	平行当て具	−	−	−	−	−	−	−	外面自然釉、100と同一個体の可能性有り
103	須恵器	甕	−	3B3	−	Ⅷb層	−	−	−	普、φ0.5～2㎜小礫	暗灰	灰	良	平行叩き	同心円当て具	−	−	−	−	−	−	−	101と同一個体の可能性有り
104	須恵器	瓶類	−	2A10	−	Ⅷb層	−	12.0	−	やや密、φ0.5～2㎜小礫、白色粒	灰	灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ→付け高台、ロクロナデ	右	−	−	−	−	−	細かい黒色斑点
105	土師器	椀	B	3B	−	河Ⅷb層	12.7	5.7	4.3	密、φ0.5㎜小礫、雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	12	0.45	0.34	
106	土師器	椀	B	3B	−	河Ⅷb層	12.1	4.9	4.5	やや密、φ0.5～1㎜小礫、雲母、海綿骨針	橙	橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	10	0.40	0.37	体部外面墨書、器形のゆがみ大きい
107	土師器	椀	B	3C	−	河Ⅷb層	−	4.6	−	普、φ0.5～2㎜小礫、長石、雲母、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	−	−	−	二次焼成、内外面に煤付着
108	土師器	椀	B	3C	−	河Ⅷb層	12.5	4.7	4.0	やや密、φ0.5～1㎜小礫	黒褐	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	右	−	10	0.38	0.32	全体に黒味を帯びる 水挽の際のしわ・ちぢれ
109	須恵器	甕	−	3B	−	河Ⅷb層	−	−	−	やや密、φ0.5㎜小礫、白色粒	灰	灰	良	ロクロナデ	ロクロナデ	−	−	−	−	−	−	−	14と同一個体の可能性有り
110	須恵器	瓶類	−	3B	−	河Ⅷb層	−	12.1	−	密、φ0.5㎜小礫、白色粒	灰	灰	良	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	ケズリ→付け高台、ロクロナデ	右	−	−	−	−	−	二次焼成、内外面・底部断面に煤付着
111	須恵器	壺類	−	4D	−	河Ⅷb層	−	−	−	普、φ0.5～2㎜白色粒、	灰	灰	良	格子状叩き→ロクロナデ、付け突帯	ロクロナデ	−	右	−	−	−	−	−	二次焼成、内外面に煤付着、細かい黒色斑点、24と同一個体の可能性有り
112	土師器	甕類	−	3B	−	XI層	−	−	−	やや粗、黒色粒、石英、長石、雲母	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	ロクロナデ	ロクロナデ→カキ目	−	−	−	−	−	−	−	
113	土師器	製塩土器	−	4B	SX013	2層	−	−	−	やや密、φ0.5～2㎜小礫、長石、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい橙	やや不良	ナデ	ナデ	−	−	−	−	−	−	−	二次焼成、赤色化
114	土師器	製塩土器	−	4B	SX013	2層	−	−	−	やや粗、φ0.5～2㎜小礫、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	輪積み→ナデ	輪積み	−	−	−	−	−	−	−	作りが粗雑
115	土師器	製塩土器	−	4B	SX013	2層	−	−	−	やや密、φ1㎜以下小礫、海綿骨針	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	輪積み→ナデ	輪積み	−	−	−	−	−	−	−	二次焼成、内面荒れる
116	土師器	製塩土器	−	4B	SX013	2層	−	−	−	やや密、φ0.5～2㎜小礫、雲母、海綿骨針	にぶい橙	にぶい橙	普通	輪積み→ナデ	輪積み→ナデ	−	−	−	−	−	−	−	二次焼成
117	土師器	製塩土器	−	4B	SX013	2層	−	−	−	やや密、φ0.5～2㎜小礫、雲母、海綿骨針	橙	灰白	普通	輪積み→ナデ	輪積み→ナデ	−	−	−	−	−	−	−	二次焼成
118	土師器	製塩土器	−	4B	SX013	2層	−	−	−	やや密、φ0.5～2㎜小礫、海綿骨針	灰白	にぶい橙	普通	輪積み→ナデ	輪積み→ナデ	−	−	−	−	−	−	−	二次焼成
119	土師器	製塩土器	−	4B	SX013	2層	−	−	−	やや密、φ0.5～2㎜小礫、海綿骨針	橙	灰白	普通	輪積み→ナデ	輪積み→ナデ	−	−	−	−	−	−	−	二次焼成
120	土師器	製塩土器	−	4B	SX013	2層	−	−	−	やや密、φ1㎜以下小礫、海綿骨針	橙	橙	普通	輪積み→ナデ	輪積み→ナデ	−	−	−	−	−	−	−	二次焼成

図　　版

凡　例

１．遺物図版において使用したスクリーントーンは以下の通りである。

…煤　　 …炭化物

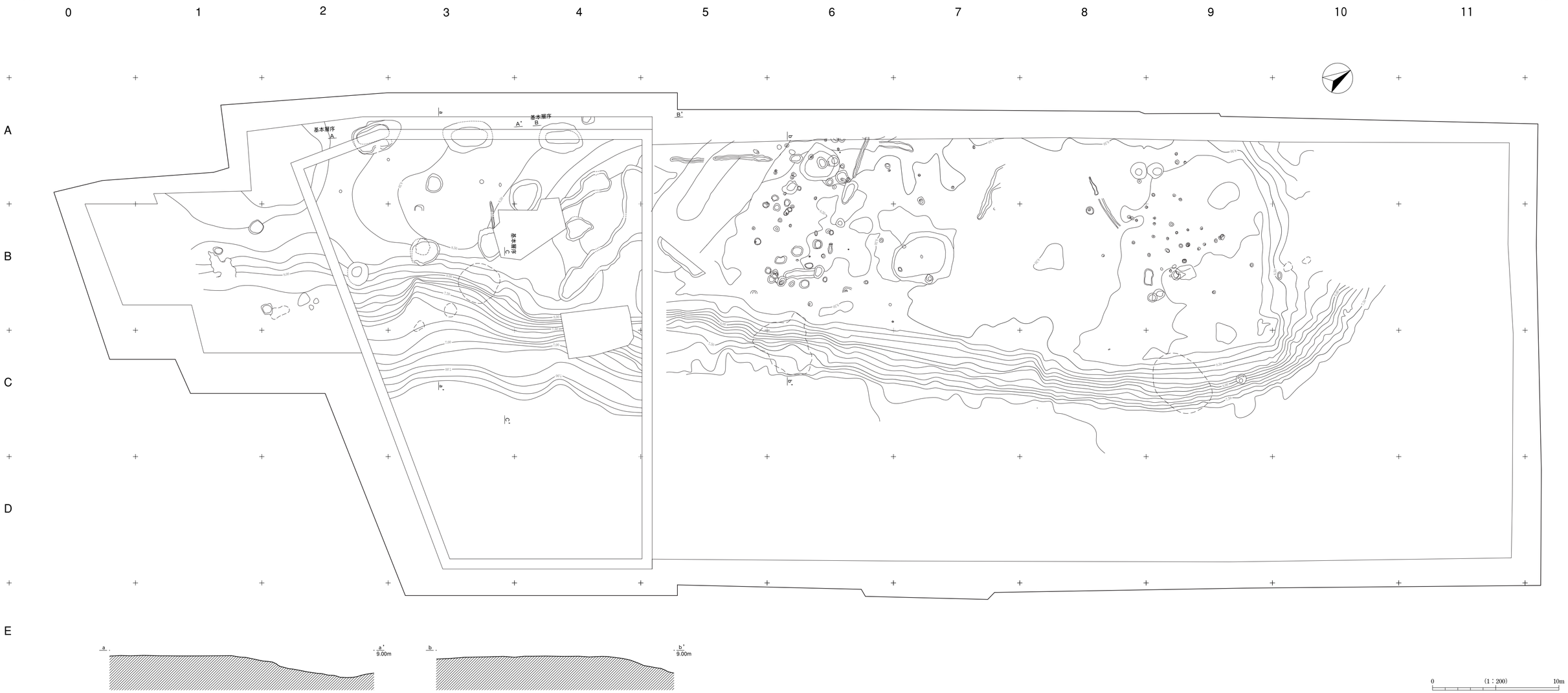
…黒色処理

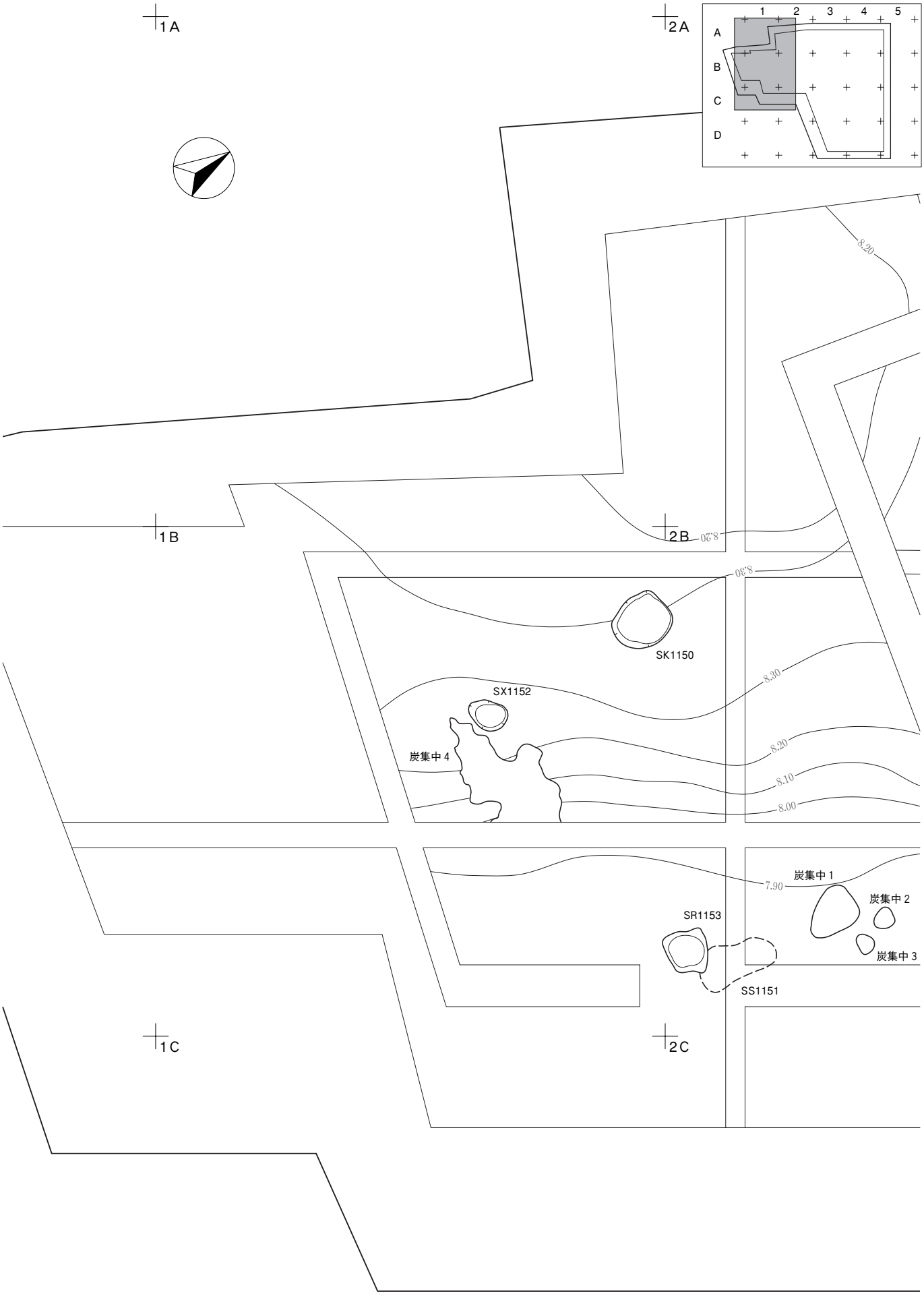
２．土器の断面は、須恵器を黒塗りとして、これ以外を白抜きとした。

３．遺物写真図版の縮尺は、図面図版と同じである。

沢田遺跡　全体図

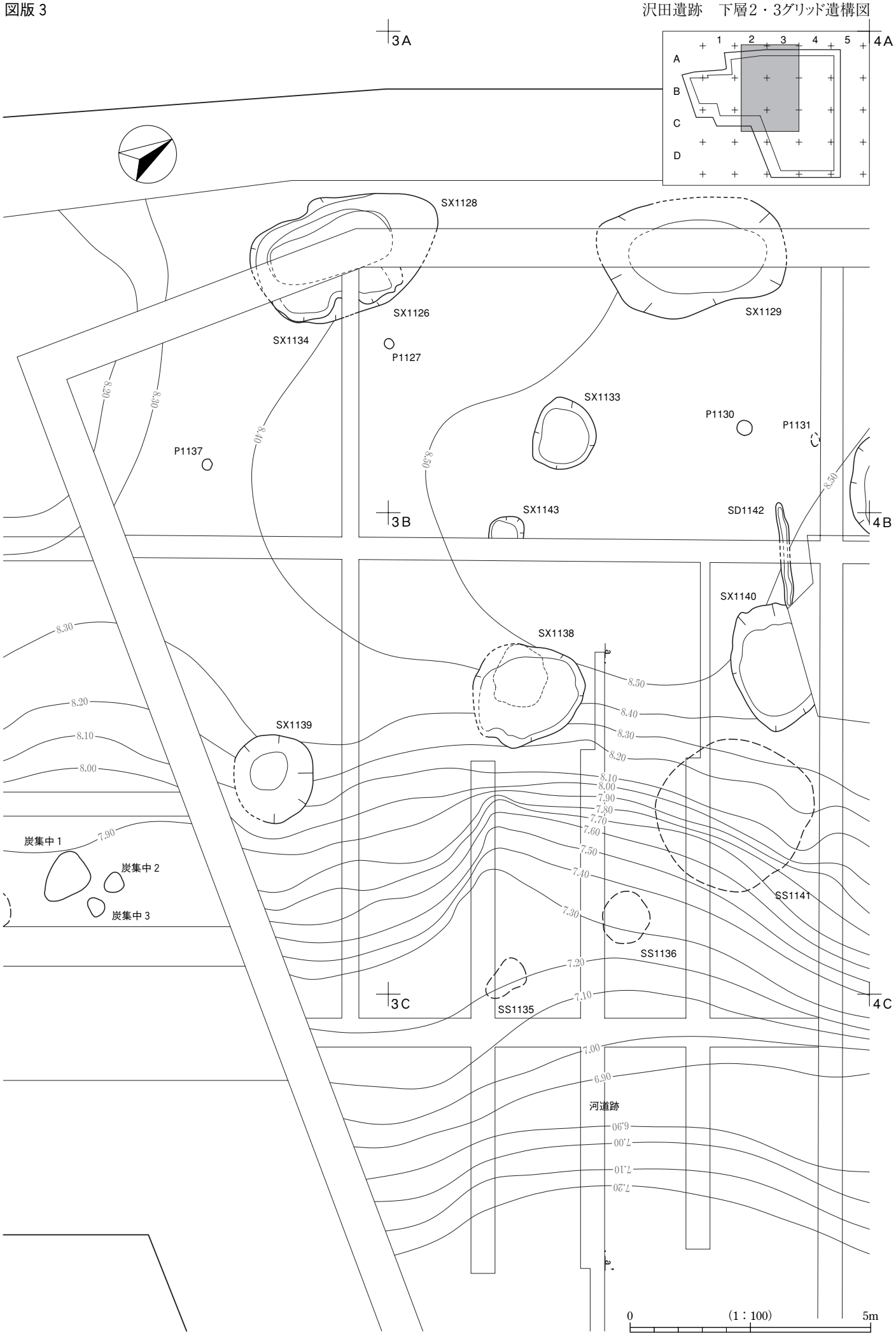
図版 1

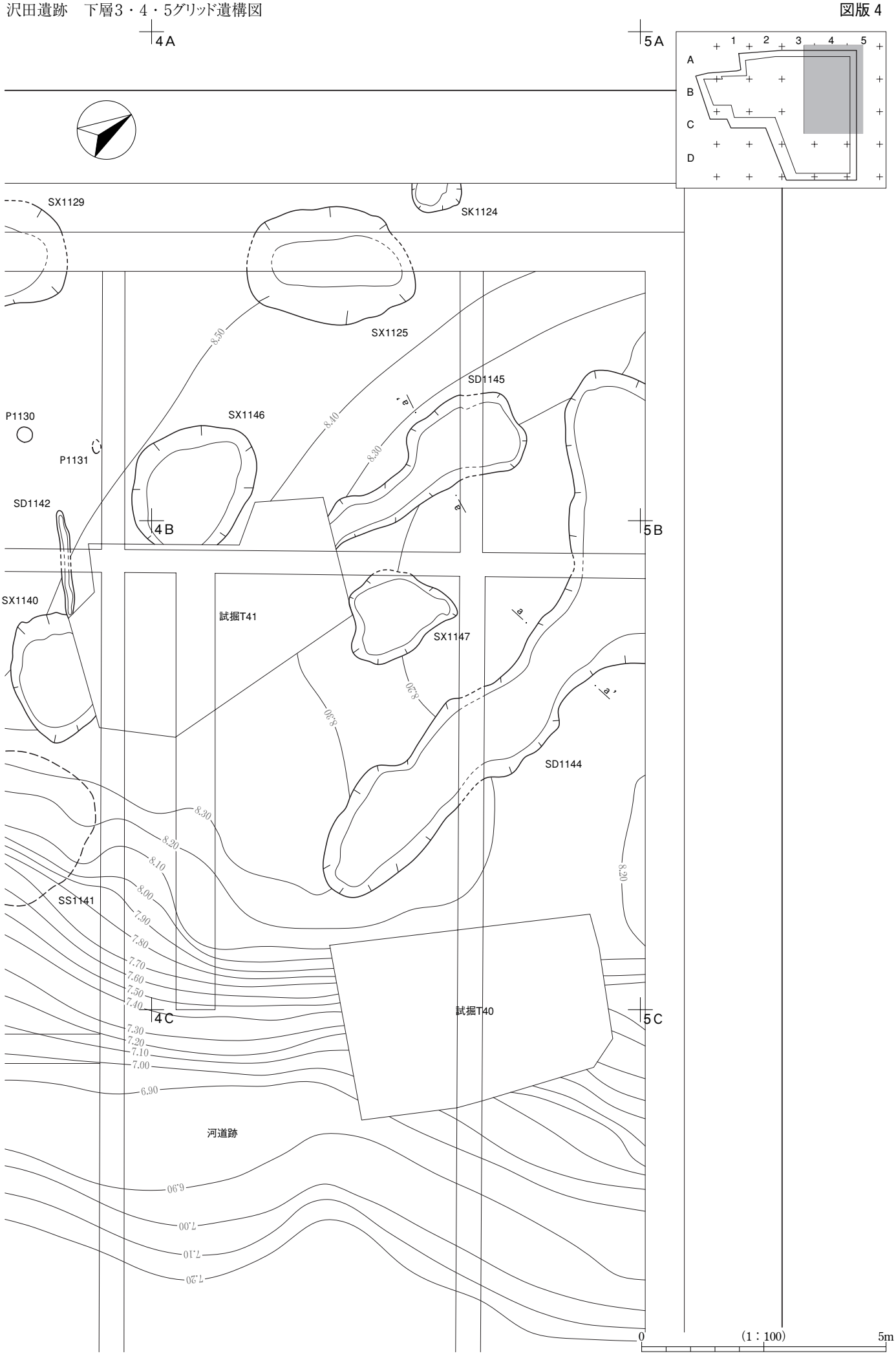

0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
A
B
C
D
E
基本層序
A
A'
基本層序
B
B'
a
a'
b
b'
9.00m
9.00m
0
(1：200)
10m


1A
2A
1B
2B
1C
2C
1
2
3
4
5
A
B
C
D
8.20
8.30
8.30
8.20
8.10
8.00
7.90
SK1150
SX1152
炭集中 4
炭集中 1
炭集中 2
炭集中 3
SR1153
SS1151
0
(1：100)
5m

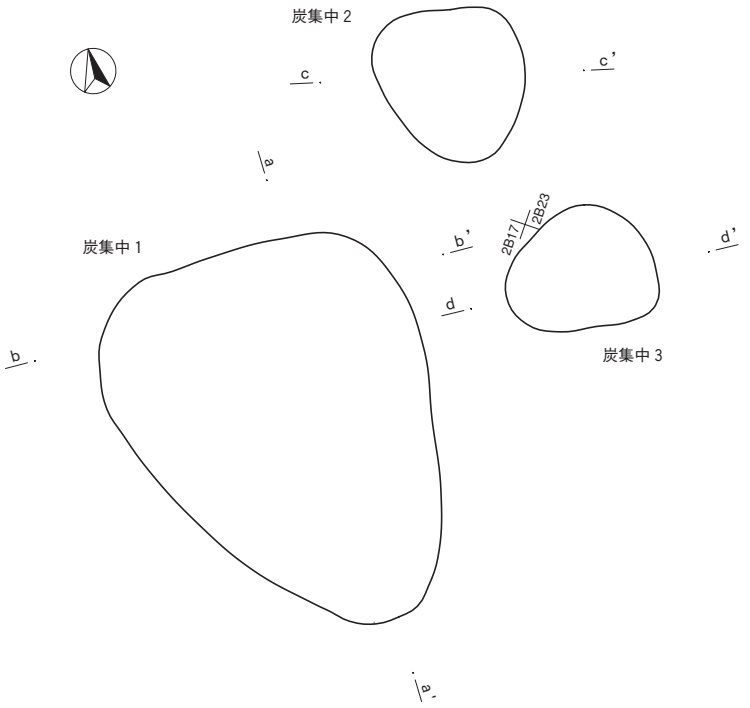
図版 3

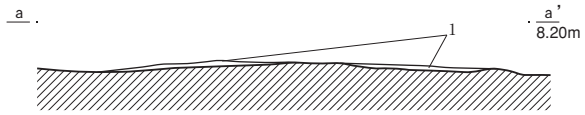
沢田遺跡　下層2・3グリッド遺構図

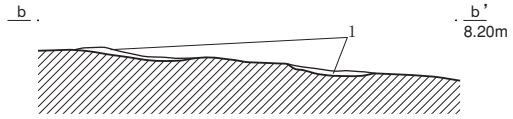



4A
5A
SX1129
SK1124
SX1125
SD1145
P1130
SX1146
P1131
SD1142
4B
5B
SX1140
試掘T41
SX1147
SD1144
SS1141
試掘T40
4C
5C
河道跡
8.30
8.40
8.20
8.10
8.00
7.90
7.80
7.70
7.60
7.50
7.40
7.30
7.20
7.10
7.00
6.90
0
(1：100)
5m

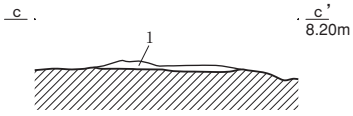
沢田遺跡　下層遺構個別図(1)炭集中･SR･SS①



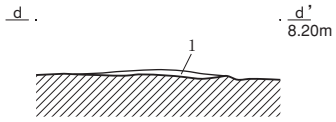




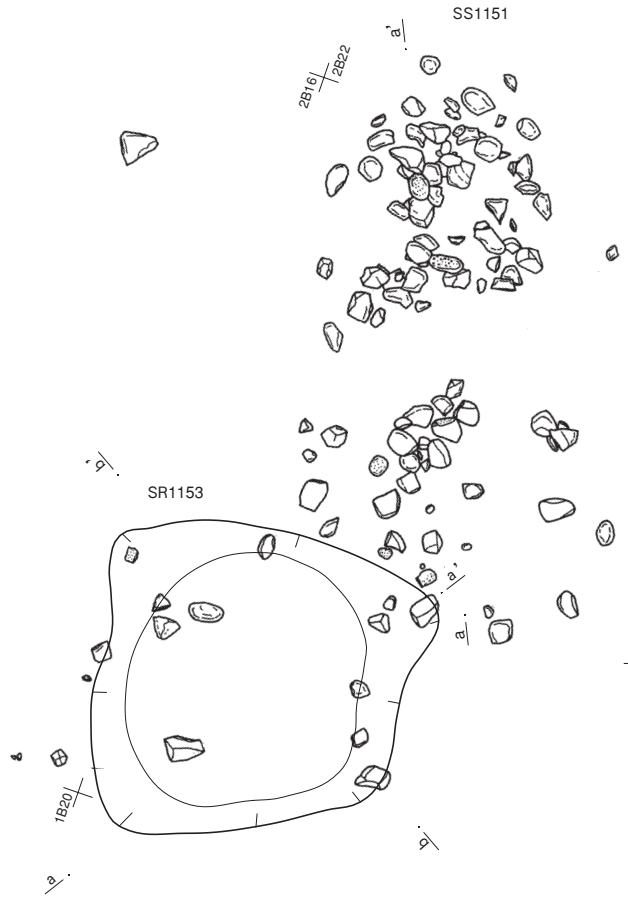
炭集中 1
1. 灰色(N5/)シルト　粘性・締りとも弱　炭化物粒多量混入。

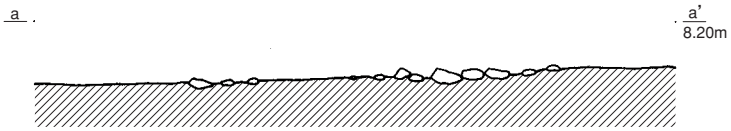


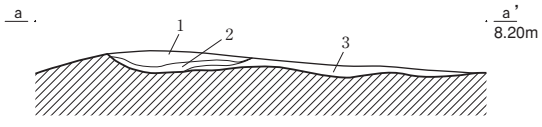
炭集中 2
1. 灰色(N5/)シルト　粘性・締りとも弱　炭化物粒多量混入。

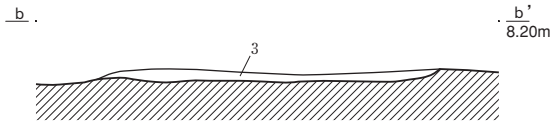


炭集中 3
1. 灰色(N5/)シルト　粘性・締りとも弱　炭化物粒多量混入。



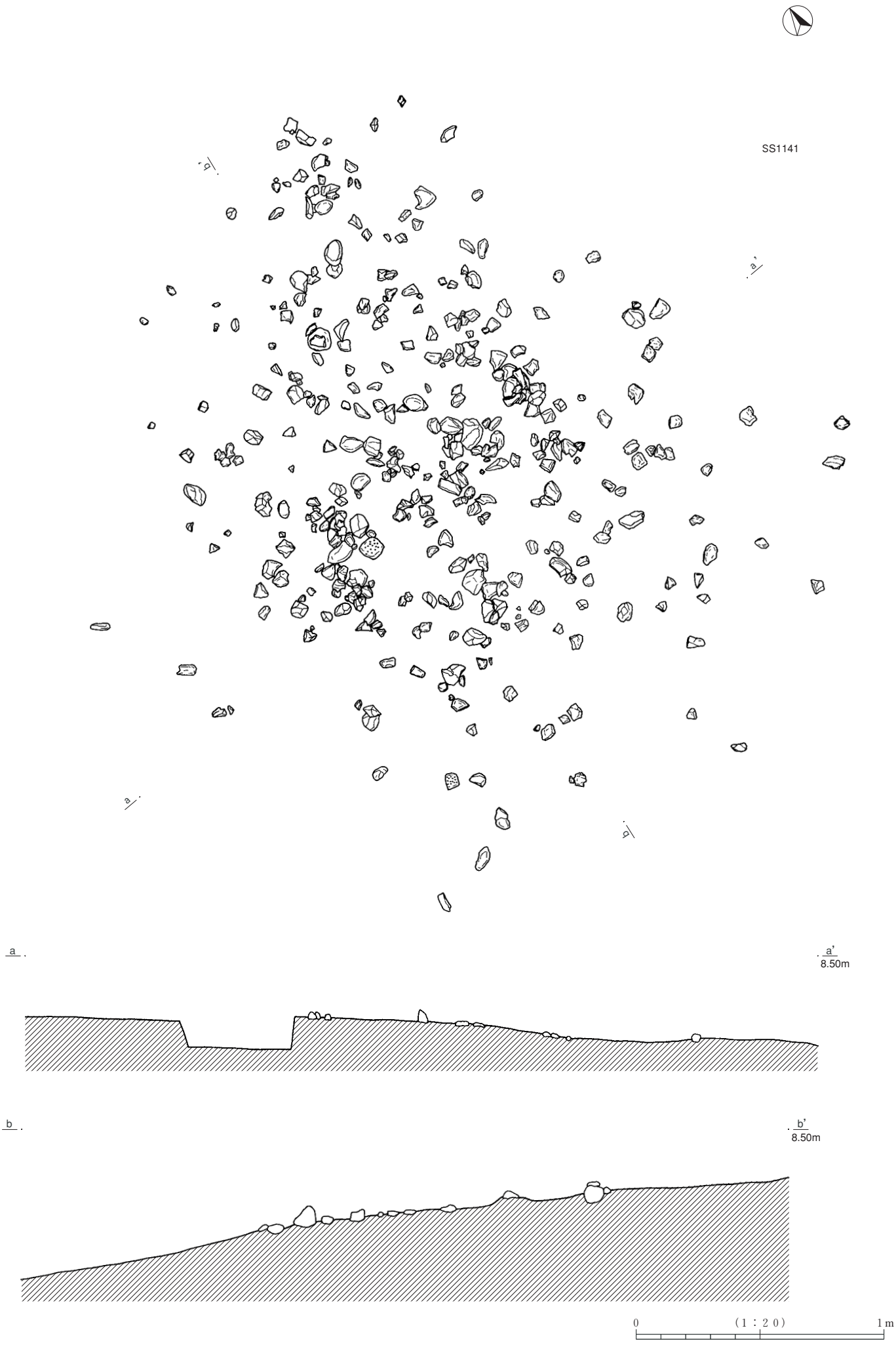




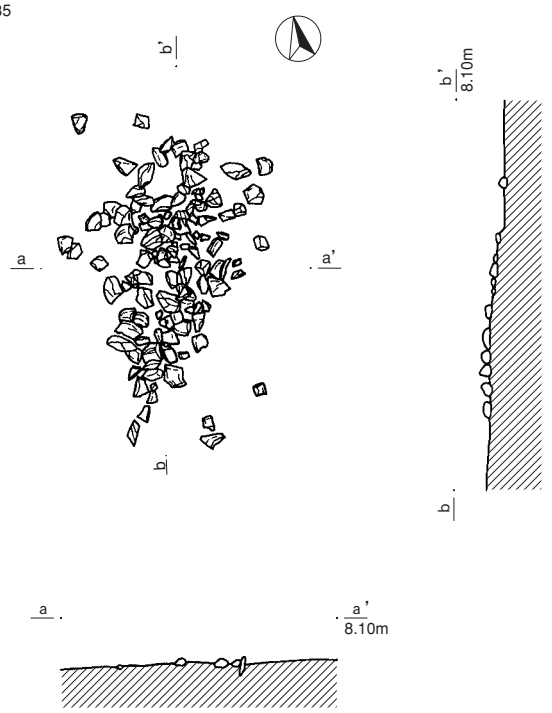


SR1153
1. 褐灰色(5YR5/1)シルト　粘性・締りともやや弱　焼土粒・炭化物粒多量混入。
2. 暗褐色(10YR3/3)シルト　粘性やや弱　締り弱　焼土粒・炭化物粒多量混入。
3. 黄灰色(2.5Y5/1)シルト　粘性・締りともやや弱。　炭化物粒少量混入。

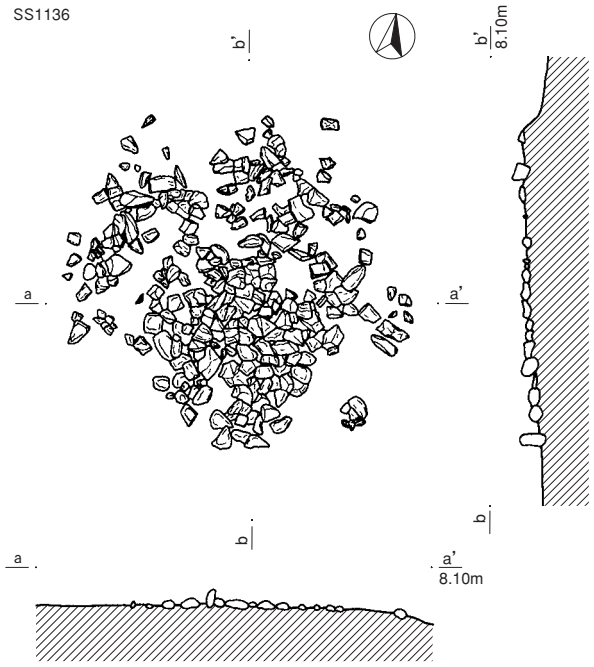
0　(1：20)　1m


SS1141
a
a'
8.50m
b
b'
8.50m
0
(1:20)
1m

SS1135

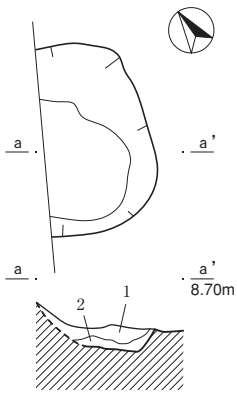


SS1136



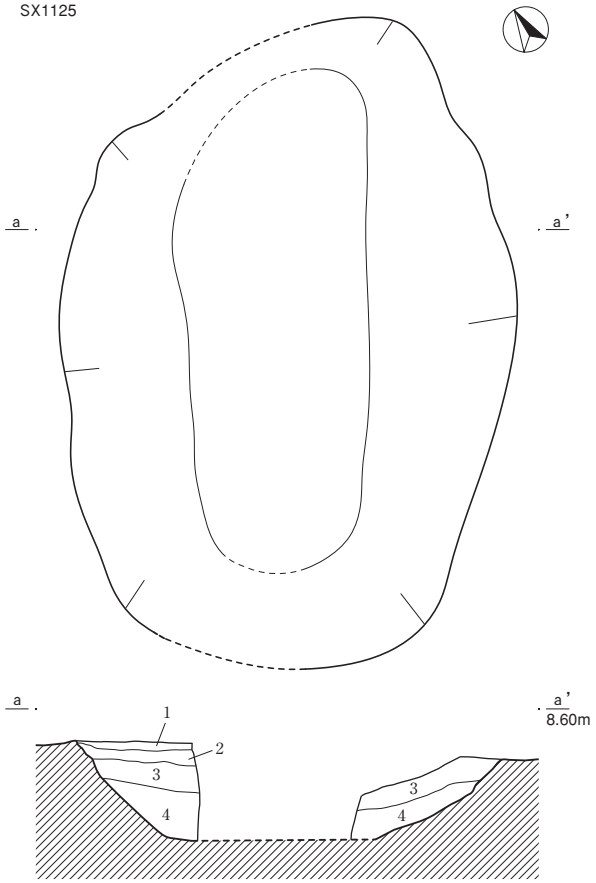
0　(1：20)　1m

SK1124



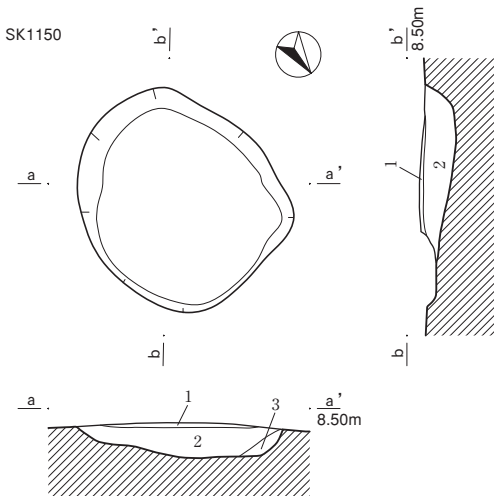
SK1124
1. 黒褐色(7.5YR3/1)シルト　粘性やや強　締りやや弱
　炭化物粒・焼土粒中量　砂少量混入。
2. 灰色(N5/)シルト　粘性やや弱　締りやや強　炭化物粒・砂少量混入。

SX1125



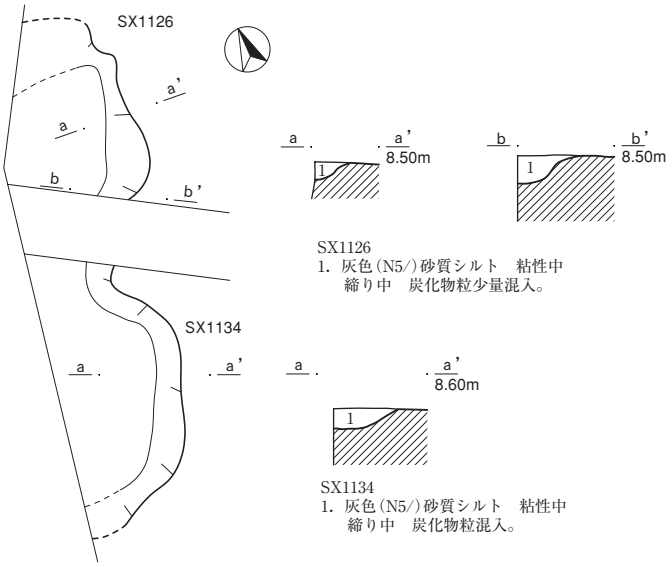
SX1125
1. 暗青灰色(5B4/1)砂質シルト　粘性弱　締りやや強　炭化物粒少量混入。
2. 灰色(N4/)砂質シルト　粘性弱　締りやや弱　炭化物粒微量　砂少量混入。
3. 灰色(N4/)砂質シルト+灰白色(10YR8/2)砂　粘性･締りとも弱　炭化物微量混入。
4. 灰色(N5/)砂質シルト　粘性やや弱　締りやや強　炭化物粒微量　砂少量混入。

SK1150



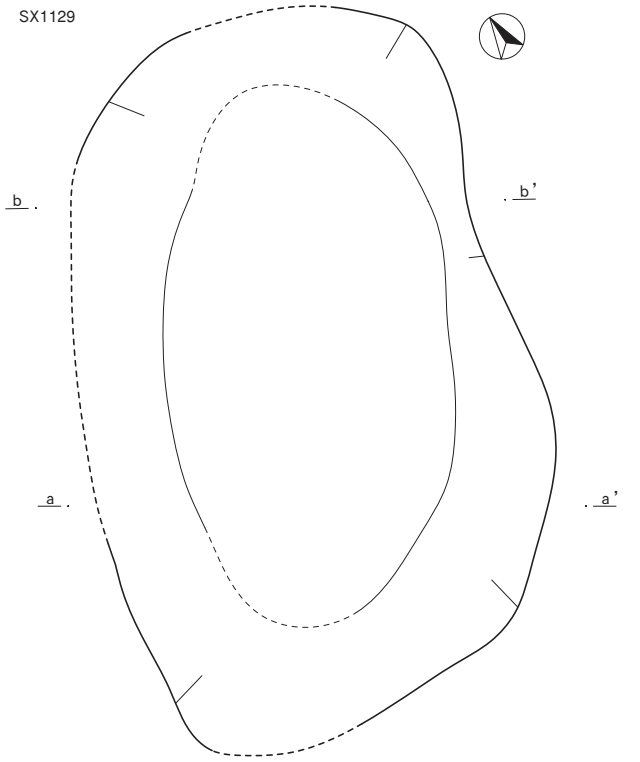
SK1150
1. 灰色(N6/)砂質シルト　粘性やや弱　締りやや強　炭化物粒少量混入。
2. 青灰色(5PB6/1)シルト　粘性･締りともやや強　炭化物粒1層より多く混入。
3. オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト　粘性やや弱　締りやや強　炭化物粒少量混入。

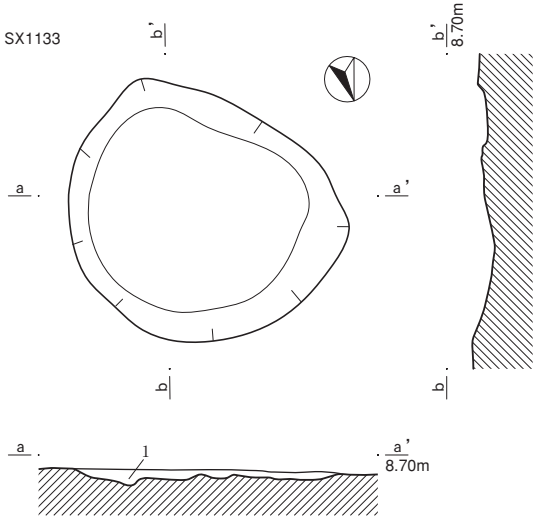
0　(1：40)　2m



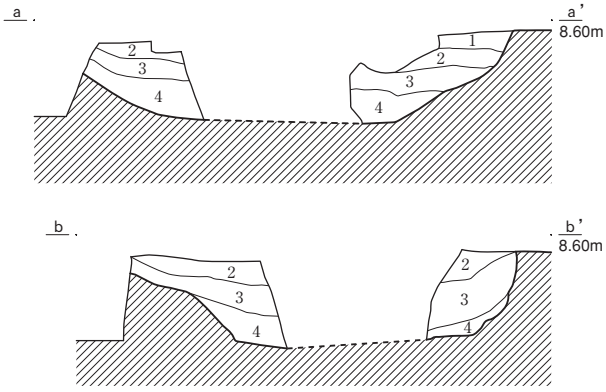
SX1126
1. 灰色(N5/)砂質シルト　粘性中
　締り中　炭化物粒少量混入。

SX1134
1. 灰色(N5/)砂質シルト　粘性中
　締り中　炭化物粒混入。

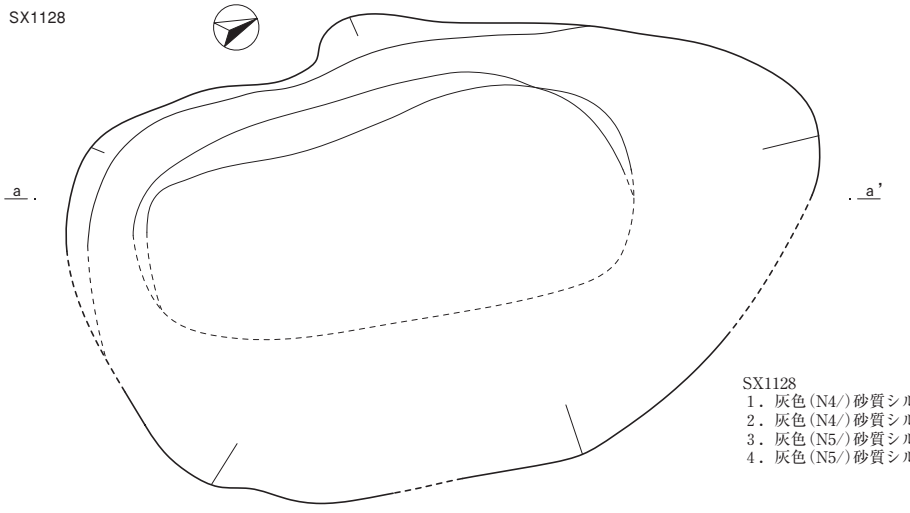


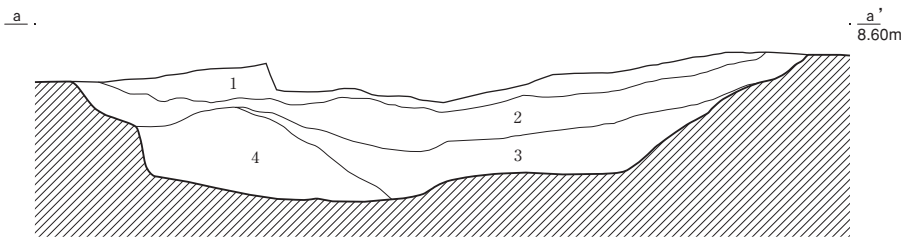


SX1133
1. 灰色(N4/)砂質シルト　粘性中　締り中
　炭化物粒(φ5～30㎜)・焼土粒少量混入。



SX1129
1. 暗青灰色(5B4/1)砂質シルト　粘性弱　締り
　やや強　炭化物粒少量混入。
2. 灰色(N4/)砂質シルト　粘性弱　締りやや弱
　砂少量混入。
3. 灰色(N4/)砂質シルト+灰白色(10YR8/2)砂
　粘性･締りとも弱　炭化物粒微量混入。
4. 灰色(N5/)砂質シルト　粘性やや弱　締りや
　や強　砂少量混入。

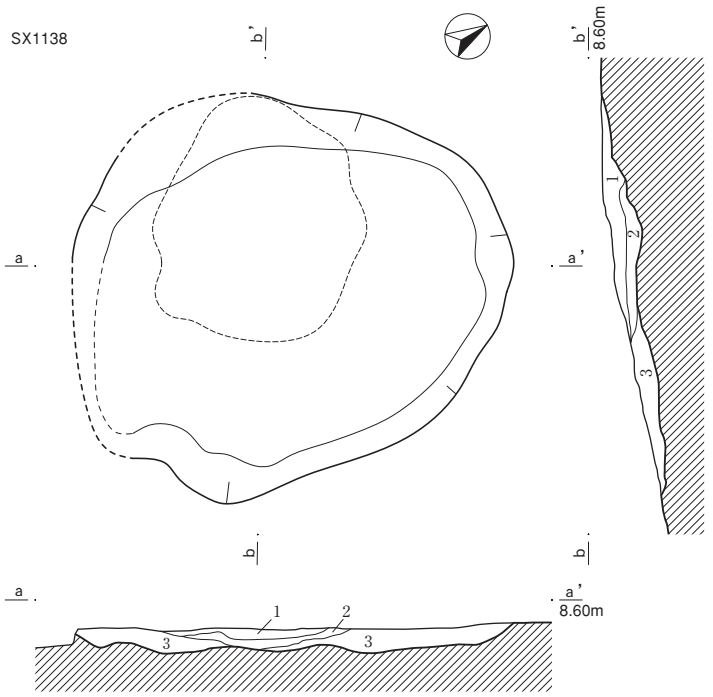




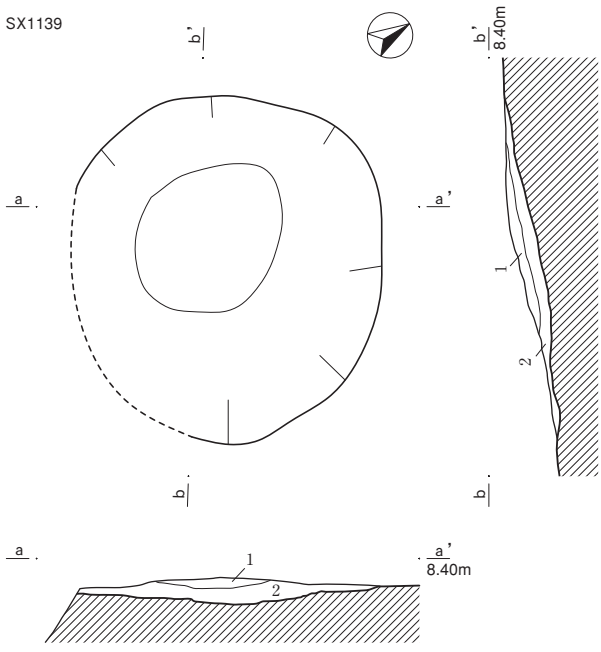
SX1128
1．灰色(N4/)砂質シルト　粘性弱　締りやや弱　砂少量混入。
2．灰色(N4/)砂質シルト+灰白色(10YR8/2)砂　粘性締りとも弱　炭化物粒微量混入。
3．灰色(N5/)砂質シルト　粘性やや弱　締りやや強　砂少量混入。
4．灰色(N5/)砂質シルト　粘性やや弱　締りやや強　砂中量混入。

0　(1：40)　2m

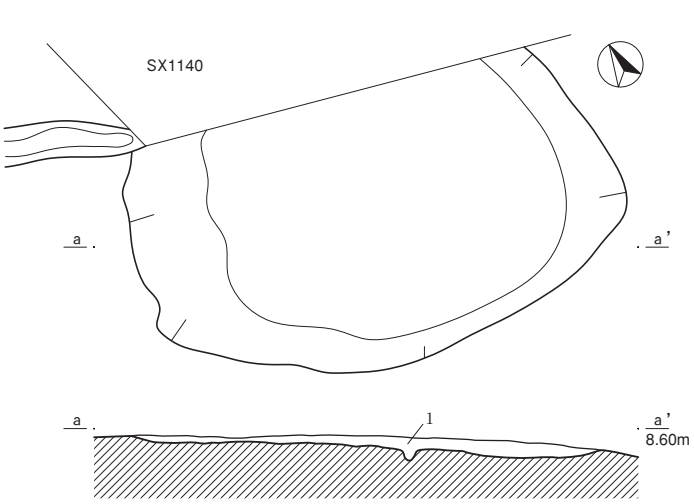
沢田遺跡　下層遺構個別図(5)SX③



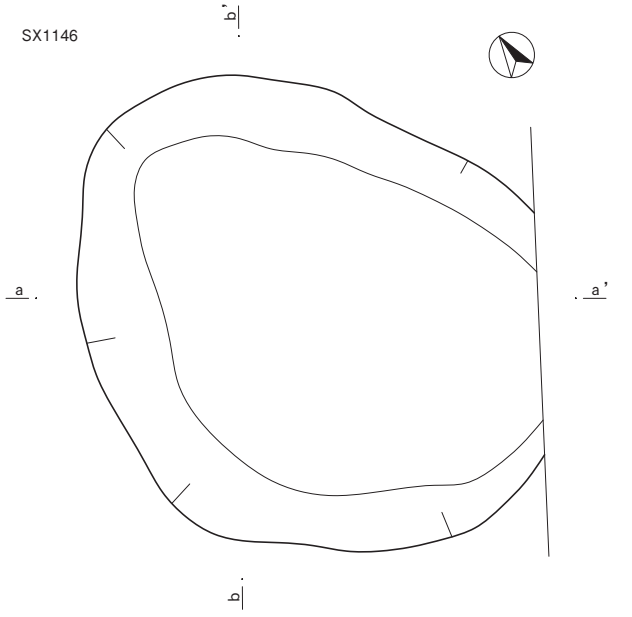
SX1138
1. 褐灰色(10YR5/1)砂質シルト 粘性強　締り弱　炭化物粒(φ1～10mm)中量　焼土粒(φ2mm)･細骨片少量混入。
2. 灰色(2.5Y5/1)砂質シルト　粘性中　締り中　炭化物粒(φ1～5mm)･焼土粒(φ2mm)少量･細骨片微量混入。
3. 灰色(7.5Y5/1)砂質シルト　粘性弱　締り中　炭化物粒(φ1～10mm)少量混入。



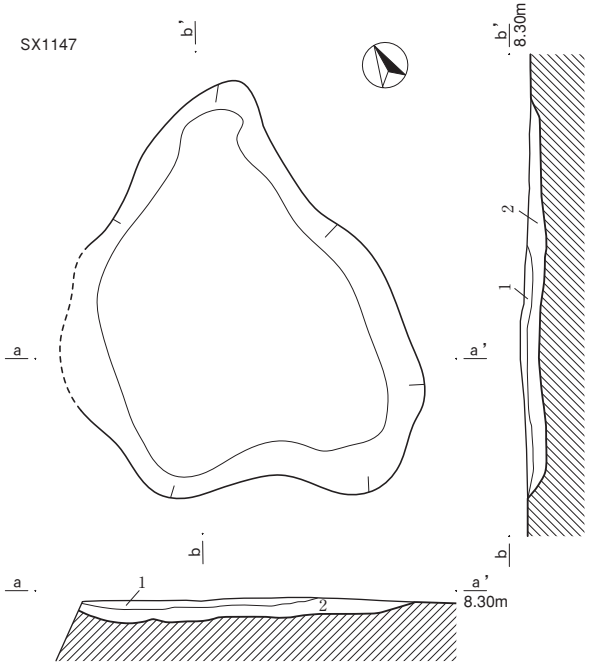
SX1139
1. 灰色(7.5Y4/1)砂質シルト　粘性中　締り中　炭化物粒(φ1～20mm)多量混入。
2. 灰色(7.5Y5/1)砂質シルト(１層より砂の割合多い)　粘性弱　締り中　炭化物粒(φ1～10mm)少量混入。



SX1140
1. 褐灰色(10YR4/1)砂質シルト　粘性中　締り中　炭化物粒(φ1～20mm)多量混入
焼土粒(φ2mm)・細骨片微量混入。

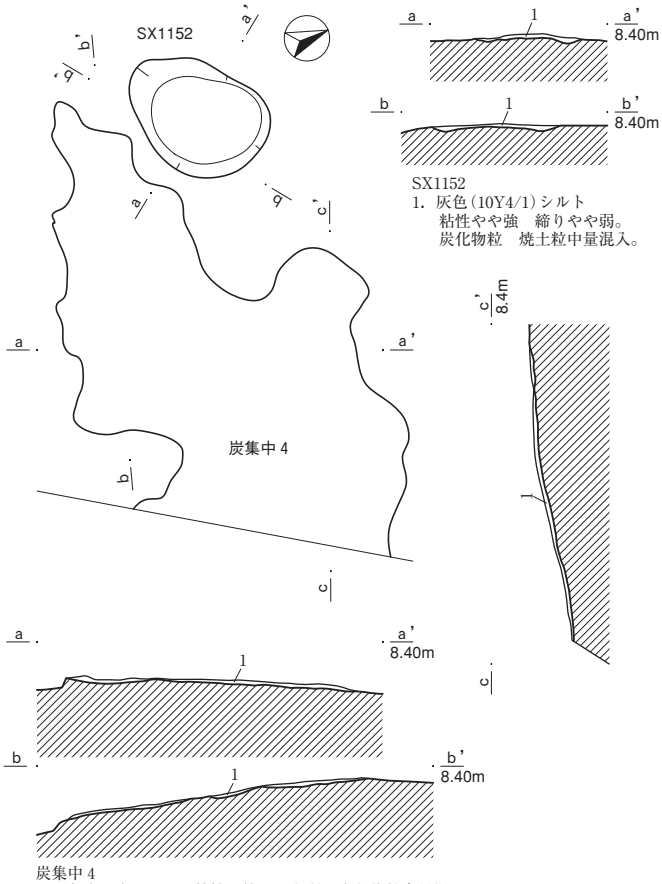


SX1146
1．褐灰色(10YR5/1)細砂+褐灰色(7.5YR5/1)シルト　粘性やや弱　締りやや強い　炭化物粒少量混入。
2．１層の土に灰白色砂が多量に混入　炭化物粒微量混入。



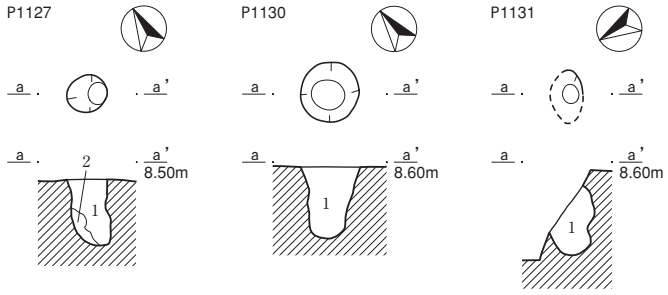
SX1147
1．褐灰色(5YR5/1)シルト　粘性やや強　締り弱　炭化物粒混入。
2．灰色(N4/)砂質シルト　粘性やや弱　締り強　炭化物粒微量混入。

0　(1：40)　2m



SX1152
1. 灰色(10Y4/1)シルト
粘性やや強　締りやや弱。
炭化物粒　焼土粒中量混入。

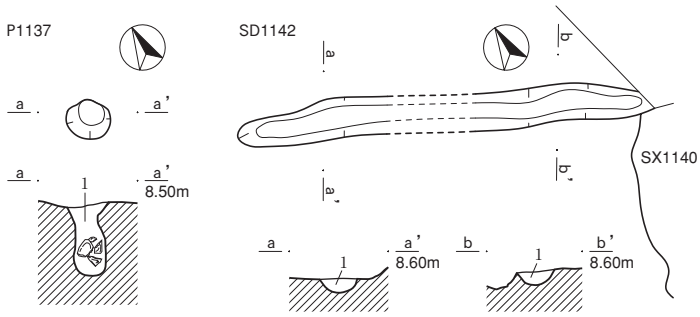
炭集中 4
1. 灰色(N5/)シルト　粘性・締りとも弱　炭化物粒多量混入。



P1127
1. 灰色(N5/)砂質シルト
粘性弱　締り中　炭化物粒(φ1～3㎜)混入。
2. Ⅸ層の土に1層の覆土が30%混じる。

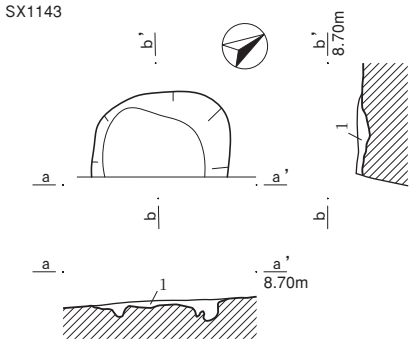
P1130
1. 灰色(7.5Y5/1)砂質シルト
粘性弱　締り中　炭化物粒(φ1～5㎜)混入。

P1131
1. 灰色(7.5Y5/1)砂質シルト
(砂の割合多い)　粘性弱　締り弱　炭化物粒(φ1～5㎜)少量混入。

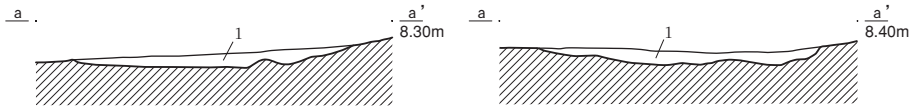


P1137
1. 灰色(10Y5/1)砂質シルト　粘性中　締り中　炭化物粒(φ1～10㎜)多量　細骨片少量混入。

SD1142
1. 灰色(N5/)砂質シルト　粘性弱　締り中
炭化物粒(φ1～10mm)少量混入。



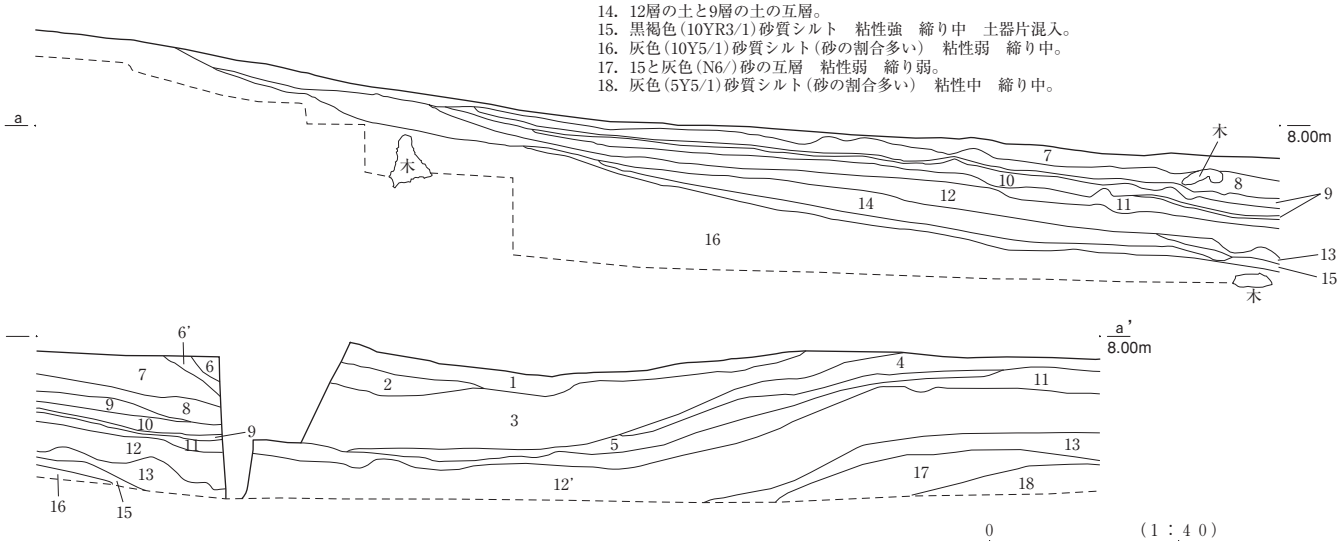
SX1143
1. 灰色(10YR4/1)砂質シルト　粘性中
締り中　炭化物粒(φ1～10mm)少量混入。



SD1145
1. 青灰色(5B5/1)細砂～シルト　粘性弱
締り強　炭化物粒微量混入。

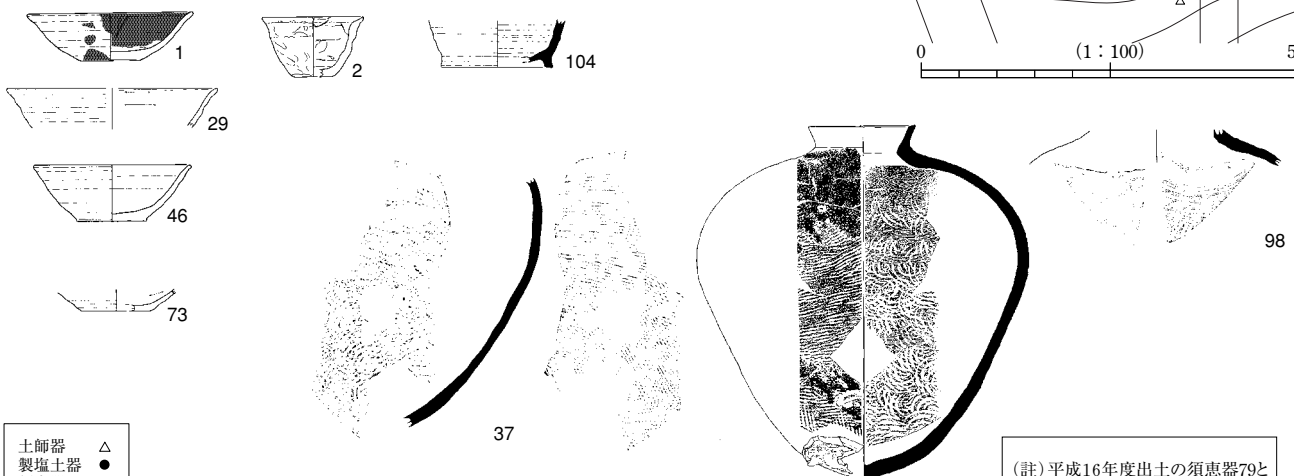
SD1144
1. 褐灰色(10YR5/1)シルト　粘性やや弱
締り強　細砂中量　炭化物粒少量混入。

河道跡
1. 灰色(10Y5/1)砂質シルト(砂の割合多い)　粘性弱　締り弱　細かい植物遺体目立つ。
2. 1層と灰白色(2.5Y)細砂の互層　粘性弱　締り弱。
3. 1層と灰白色(2.5Y)細砂の互層　粘性なし　締り弱　枝などの植物遺体目立つ　礫多量混入。
4. 灰色(N6/)砂質シルトと灰白色(2.5Y8/2)細砂の互層。
5. 灰色(N6/)砂質シルト(部分的に11が混入)　粘性中　締り中。
6. 淡黄色(2.5Y8/3)砂と黄色(2.5Y6/1)砂質シルトの互層　粘性弱　締り弱。
6'. 上の層と同じであるが砂の割合が少ない。
7. 淡黄色(2.5Y8/3)砂と黄色(2.5Y6/1)砂質シルトの互層　粘性なし　締り弱。
8. 灰色(7.5Y6/1)砂質シルト(砂の割合多い)と灰黄褐(10YR4/2)腐植土の互層　粘性弱　締り弱。
9. 灰白色(7.5Y7/1)細砂　粘性なし　締り弱。
10. 灰色(N6/)砂質シルト　粘性中　締り中。
11. 褐灰色(10YR5/1)砂質シルト　粘性中　締り中　土器片混入。
12. 灰色(7.5Y4/1)砂質シルト(砂の割合多い)　粘性中　締り中。
12'. 灰色(N6/)砂・黄灰(2.5Y6/1)砂質シルトの互層　粘性弱　締り弱　植物遺体目立つ。
13. 灰色(N4/)砂質シルト(砂の割合多い)　粘性弱　締り弱　植物遺体目立つ。
14. 12層の土と9層の土の互層。
15. 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト　粘性強　締り中　土器片混入。
16. 灰色(10Y5/1)砂質シルト(砂の割合多い)　粘性弱　締り中。
17. 15と灰色(N6/)砂の互層　粘性弱　締り弱。
18. 灰色(5Y5/1)砂質シルト(砂の割合多い)　粘性中　締り中。



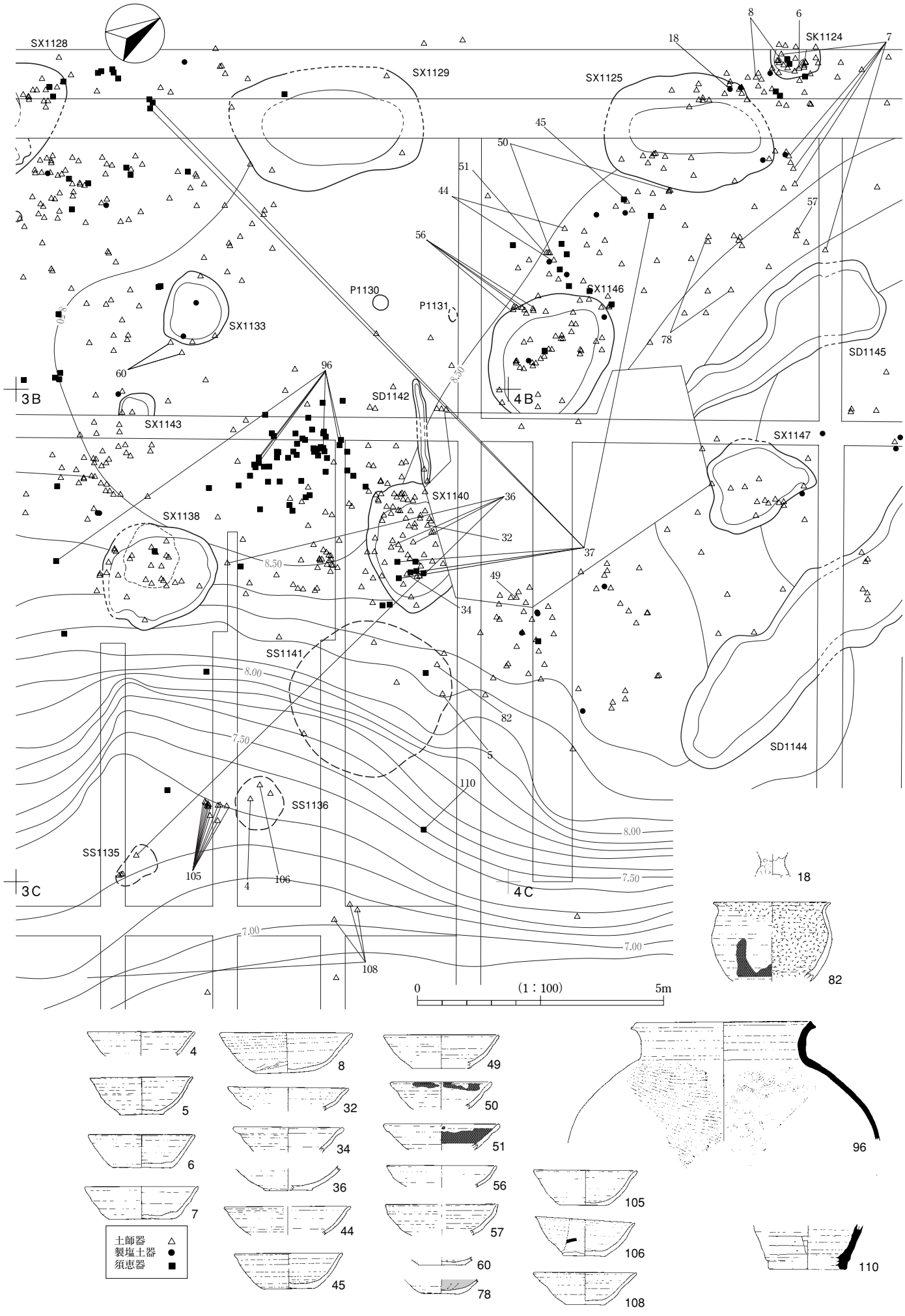
図版11

沢田遺跡　下層1・2・3グリッド遺物分布図

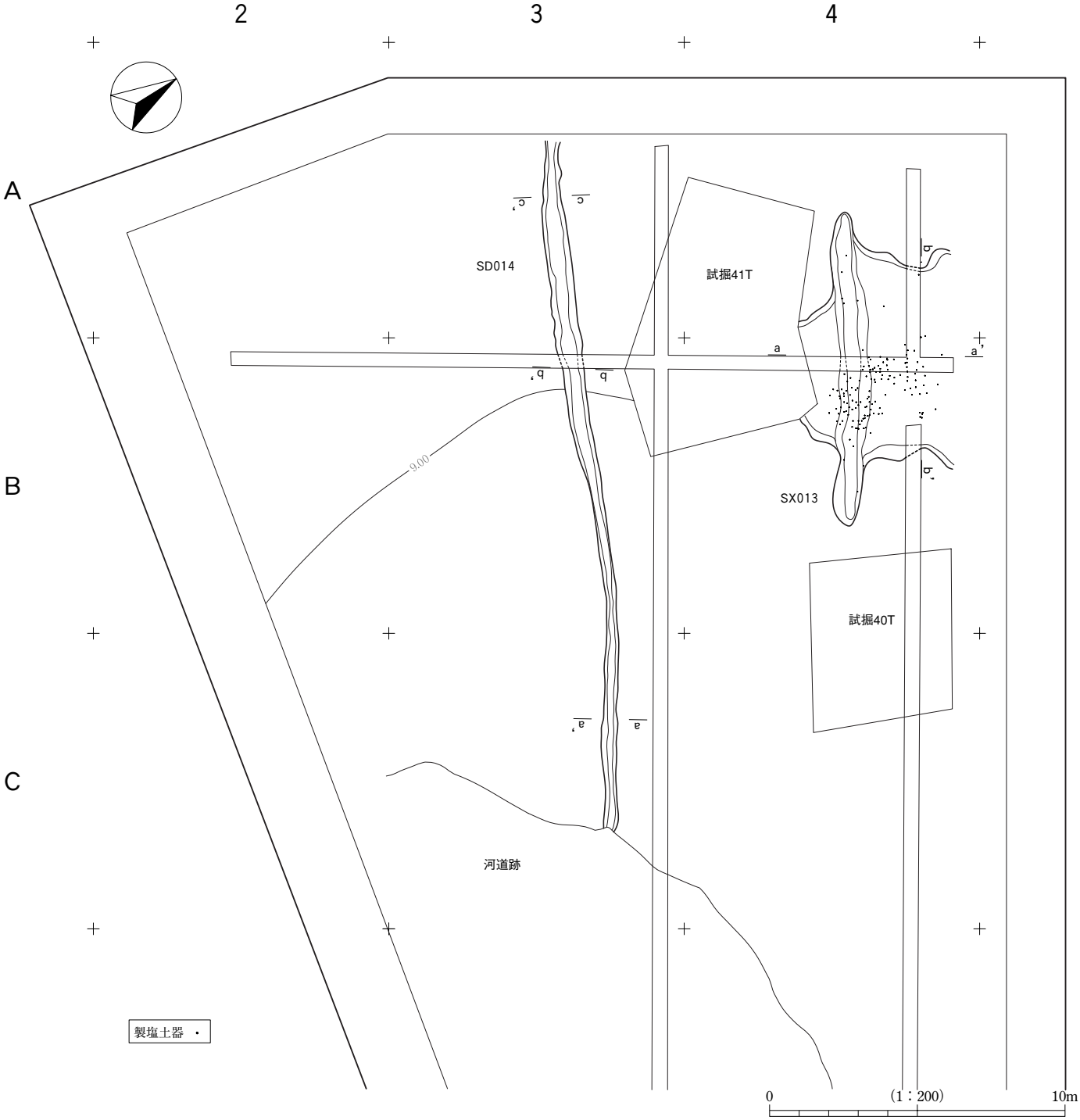


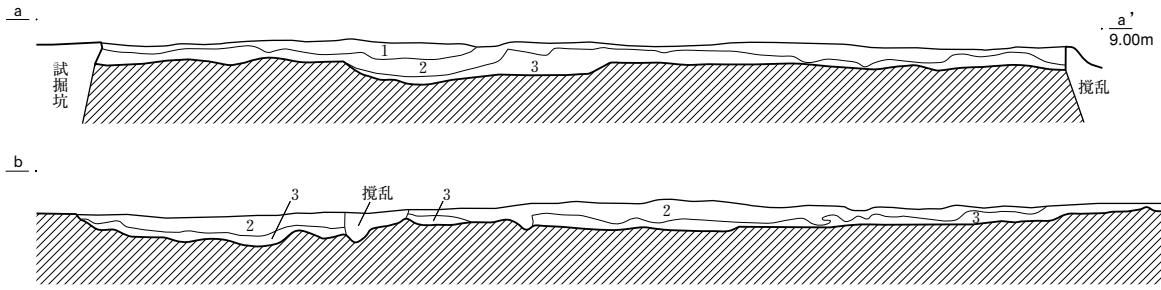
土師器 △
製塩土器 ●
須恵器 ■

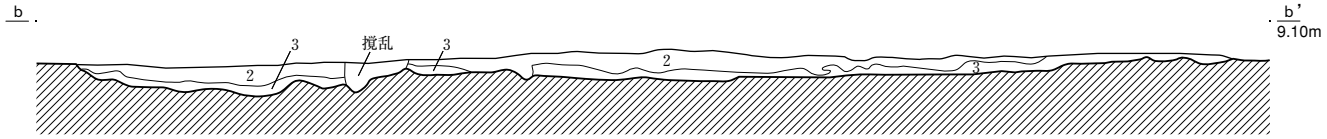
(註) 平成16年度出土の須恵器79と37,98と接合


SX1128
SX1129
SX1125
SK1124
SX1133
P1130
P1131
SX1146
SD1145
SD1142
SX1143
SX1147
SX1140
SX1138
SS1141
SS1136
SS1135
SD1144
3B
4B
3C
4C
8.50
8.00
7.50
7.00
0
(1：100)
5m
土師器
製塩土器
須恵器

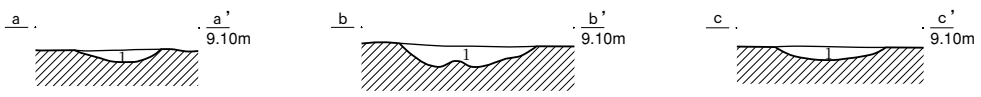
沢田遺跡　最上層遺構図





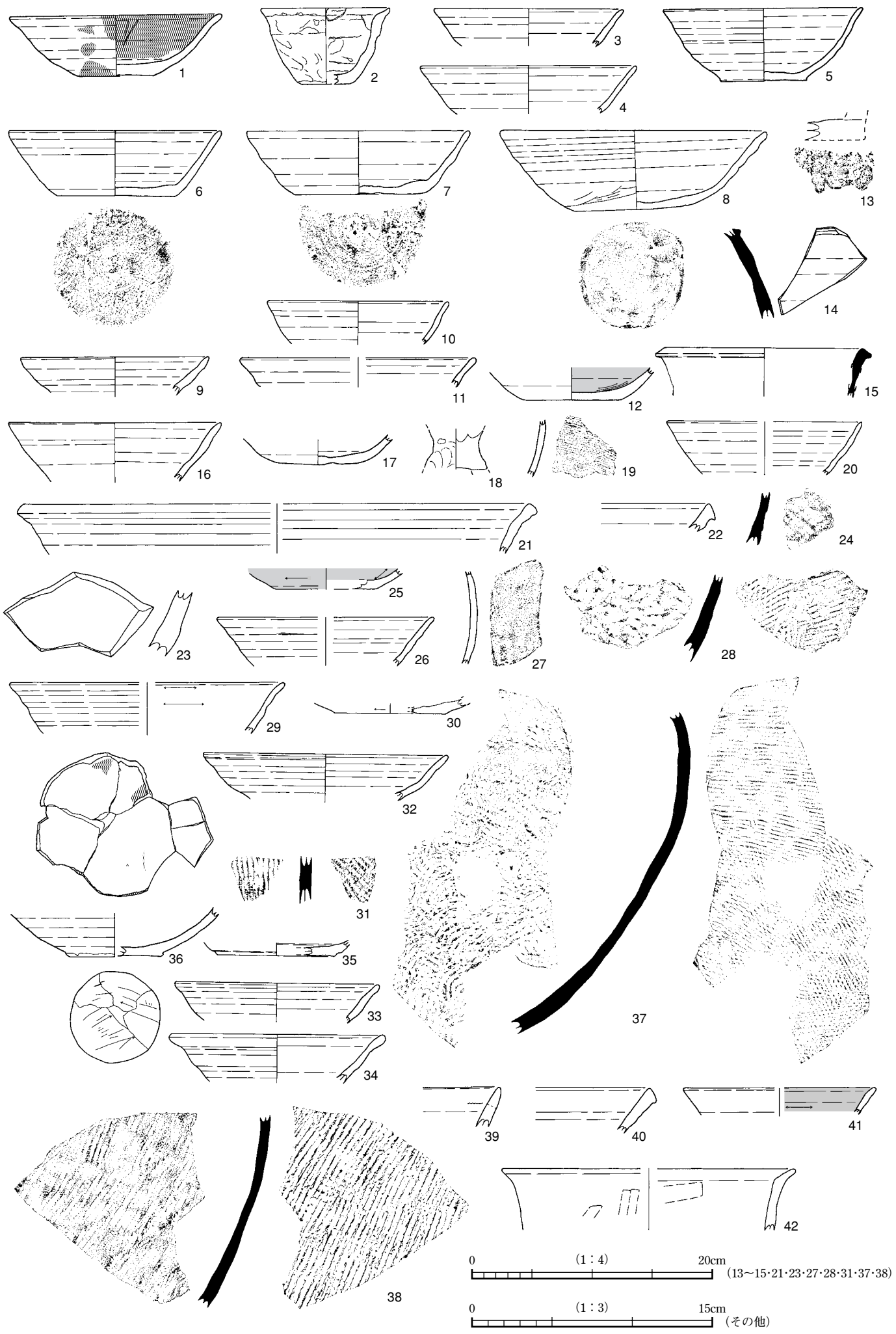


SX013
1．灰色（7.5Y4/1）砂質シルト　粘性弱　締り弱　植物遺体微量混入。
2．黒色（2.5Y2/1）砂質シルト　粘性中　締り弱　植物遺体が多量混入。
3．灰色（7.5Y5/1）砂質シルト　粘性弱　締り弱　部分的に２層の土が混入。

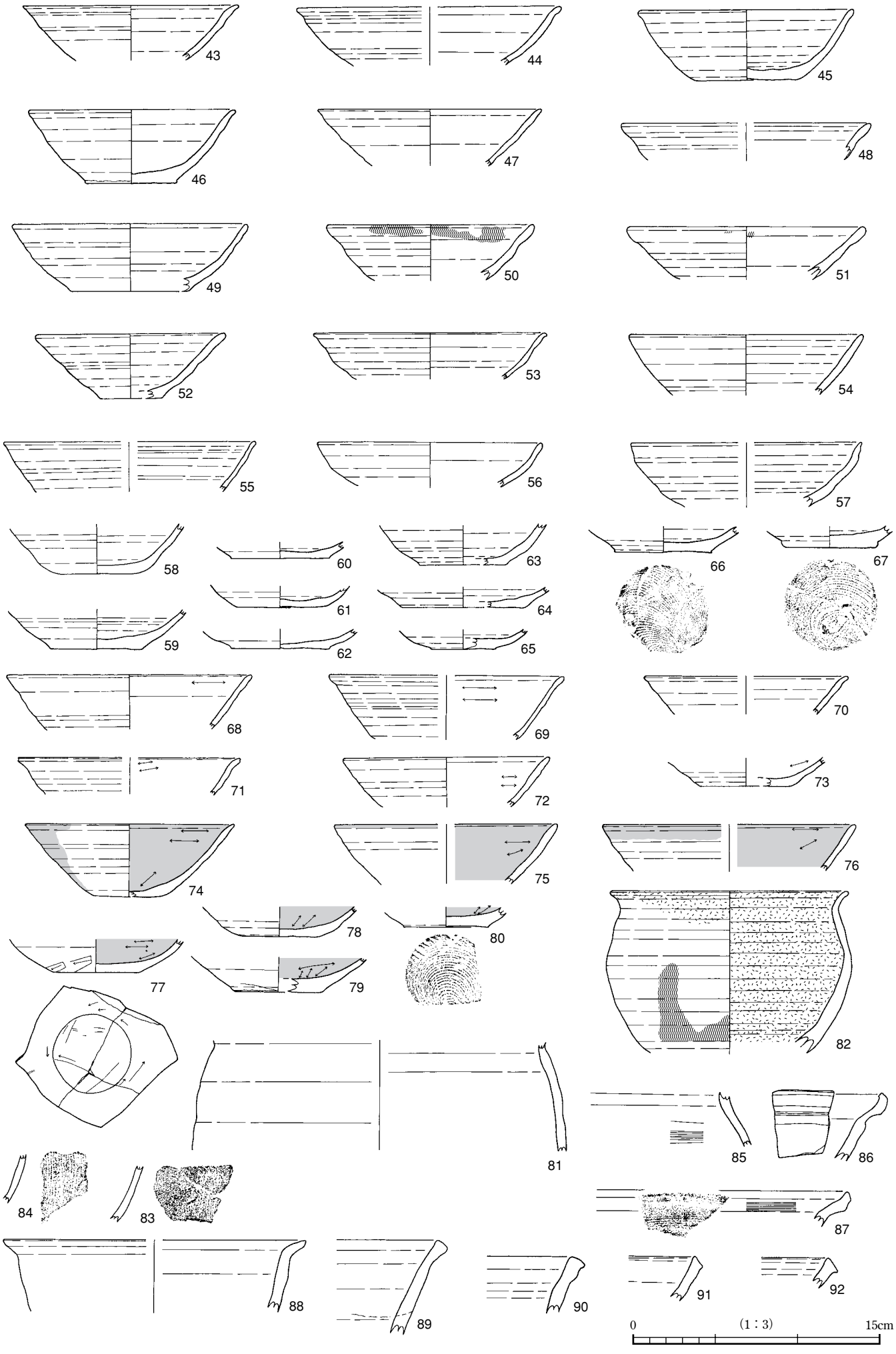


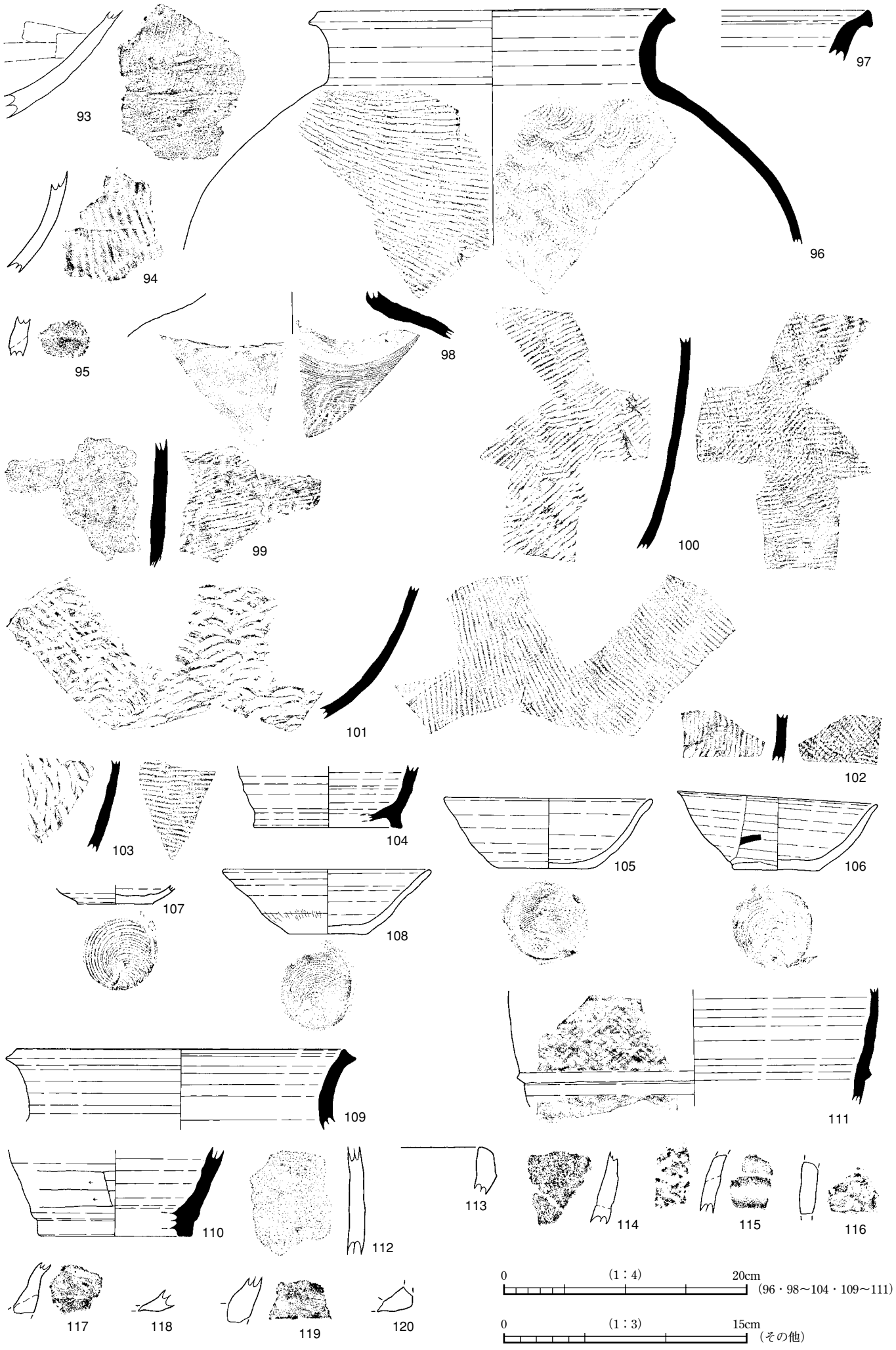
SD014
1．黒褐（2.5Y3/2）シルト　粘性やや強　締りやや弱　灰色シルトブロック中量混入。

0　(1：40)　2m

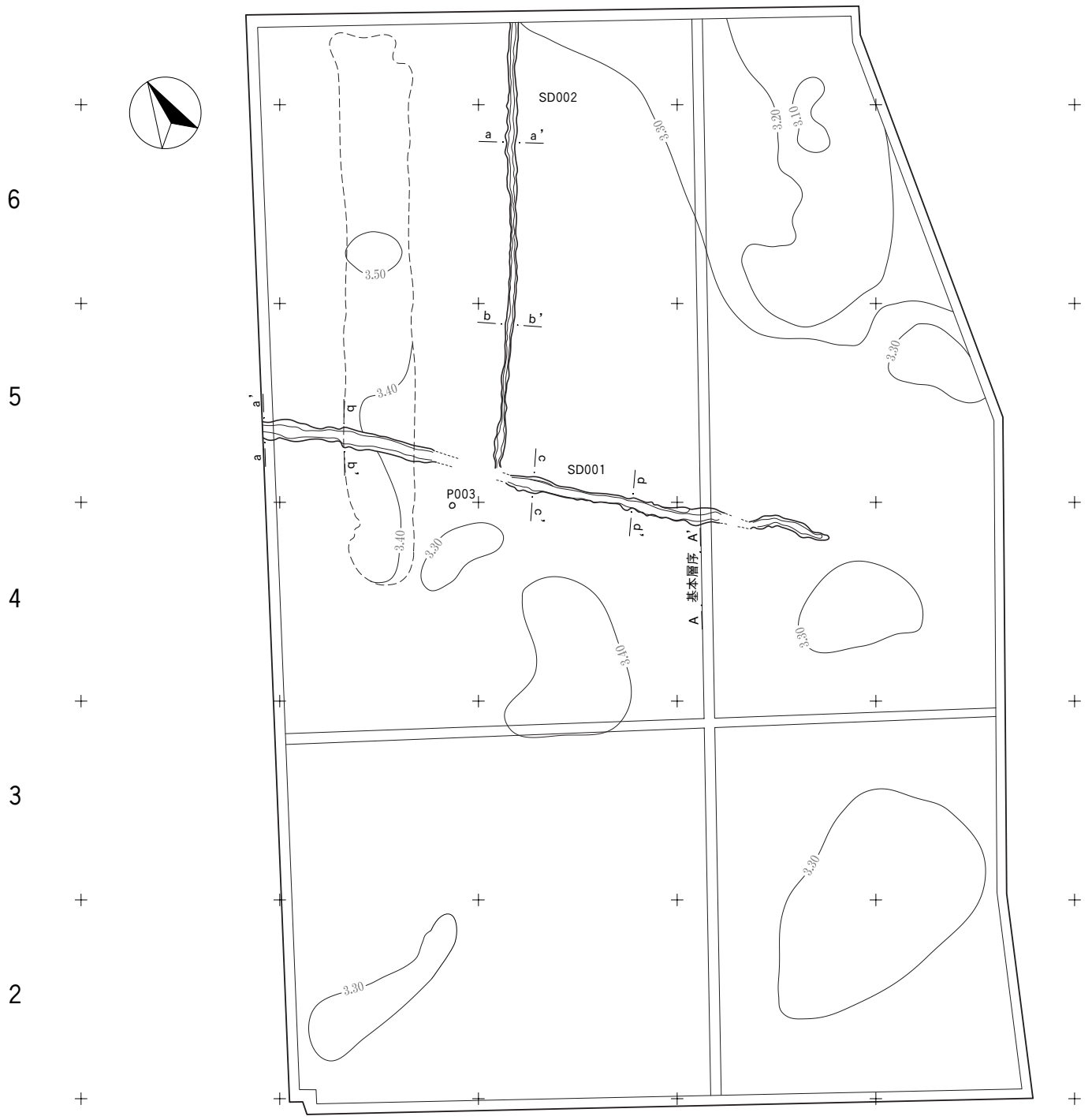

1
2
3
4
5
6
7
8
13
10
14
9
11
12
15
16
17
18
19
20
21
22
24
25
23
26
27
28
29
30
32
31
36
35
33
34
37
39
40
41
38
42
0
(1：4)
20cm
(13～15･21･23･27･28･31･37･38)
0
(1：3)
15cm
(その他)

沢田遺跡　出土遺物実測図(2)遺構外出土①

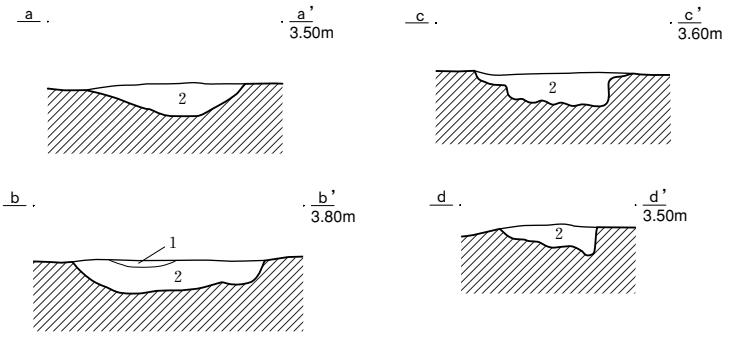



93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
0 (1：4) 20cm (96・98～104・109～111)
0 (1：3) 15cm (その他)

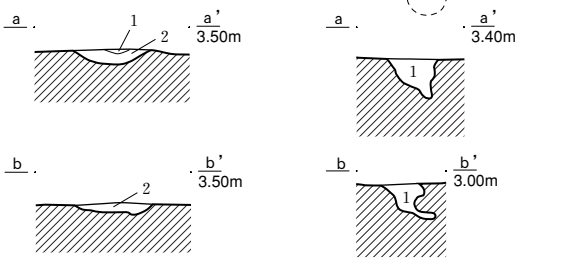
桜林遺跡　全体図・遺構個別図



0　(1：300)　15m



SD001
1．灰色（5Y4/1）砂質シルト　粘性中　締り中　炭化物粒多量混入。
2．褐灰色（10YR5/1）砂質シルト　粘性中　締り強　炭化物粒極微量混入。



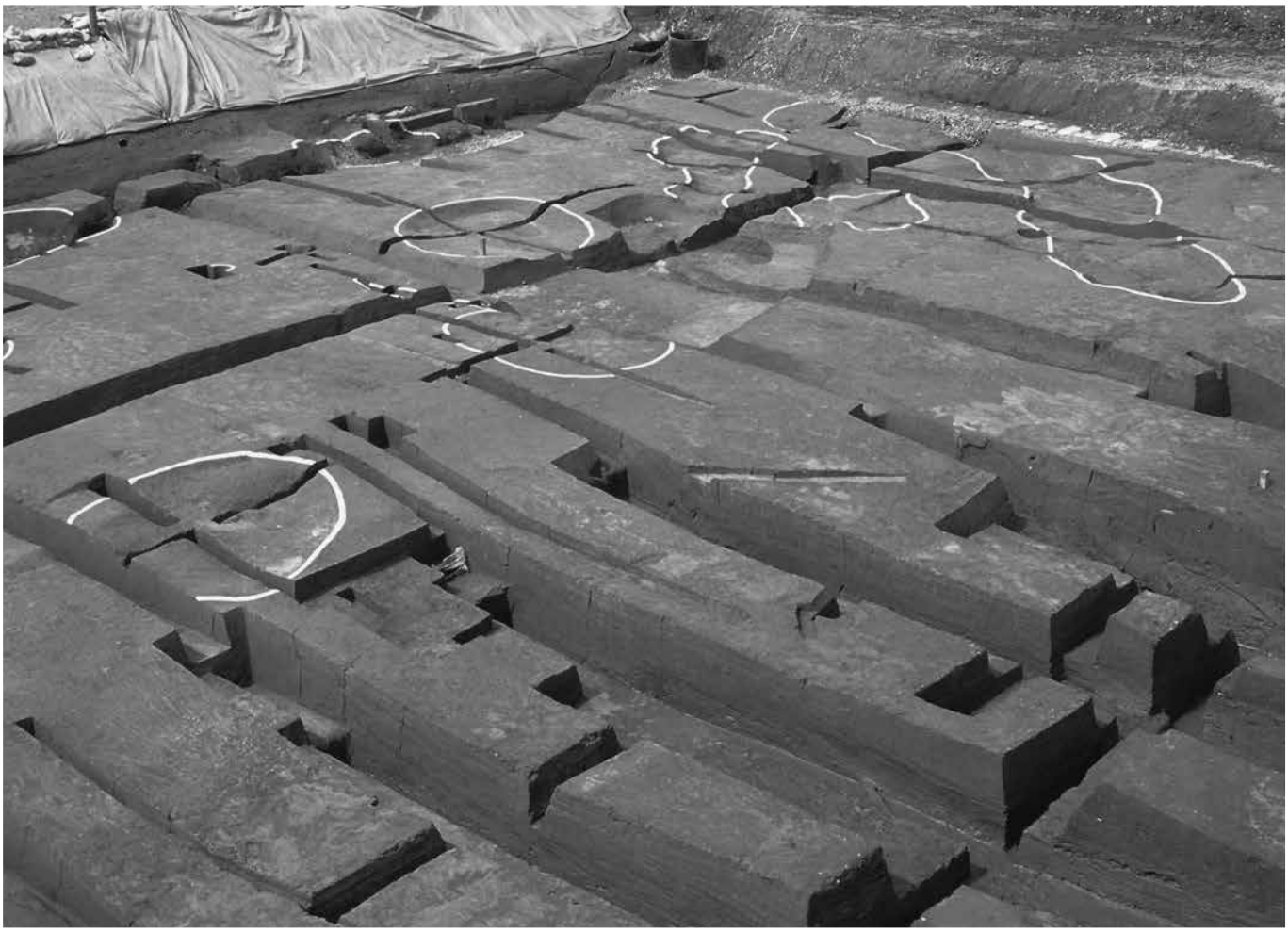
SD002
1．褐灰色（10YR5/1）砂質シルト　粘性中　締り中　炭化物粒極微量混入。
2．灰白色（5Y7/1）砂質シルト　粘性中　締り強　炭化物粒極微量混入。

P003
1．暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質シルト　粘性中　締り弱　炭化物粒多量混入。

0　(1：40)　2m

沢田遺跡　調査区全景（上が東）

沢田遺跡　調査区全景（北西から櫛形山地を望む）



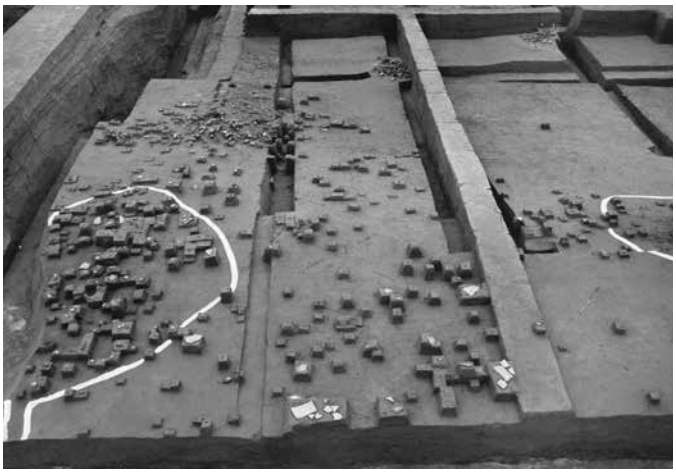
下層　完掘状況（南から）

基本層序Ａ（東から）

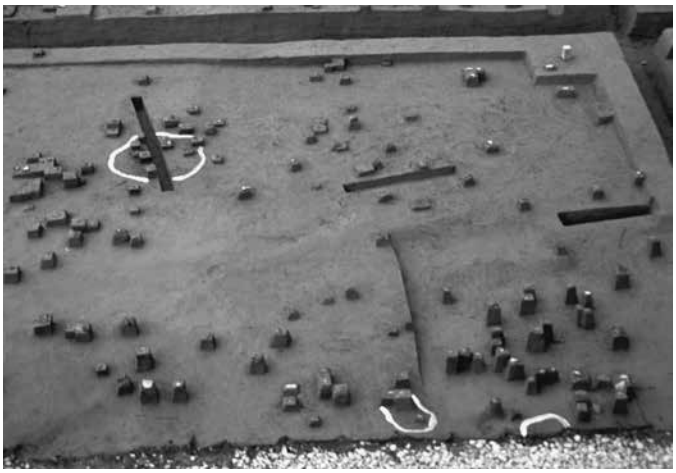
基本層序Ｂ（東から）

基本層序Ｃ（南から）

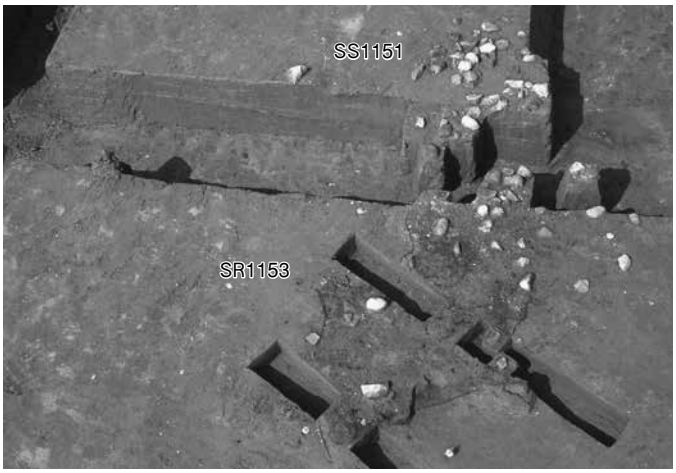
基本層序Ｃ（南西から）



3 Bグリッド遺物出土状況（西から）

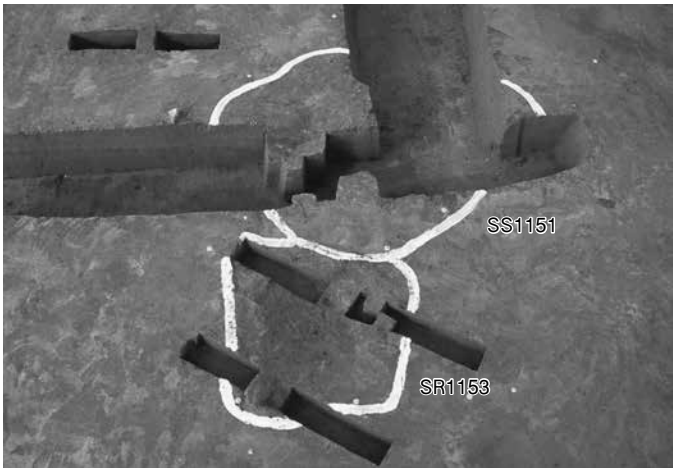


3 Aグリッド遺物出土状況（西から）

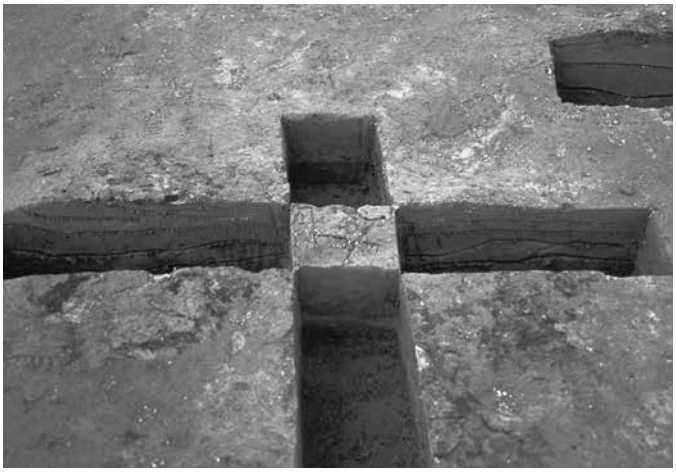


SR1153(前)・SS1151(後)遺物出土状況（南から）

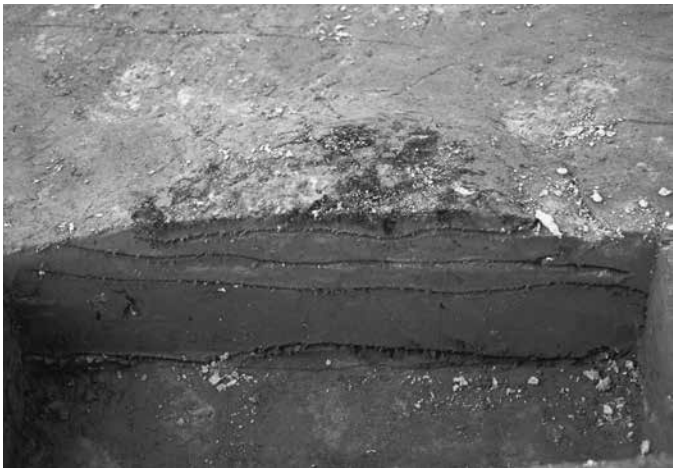
SR1153セクション（東から）



SR1153(前)・SS1151(後)完掘状況（南から）



炭集中1断面（南から）



炭集中3断面（南から）

炭集中1～3完掘状況（南から）

SS1135　遺物出土状況（南から）

SS1135　断面（北東から）

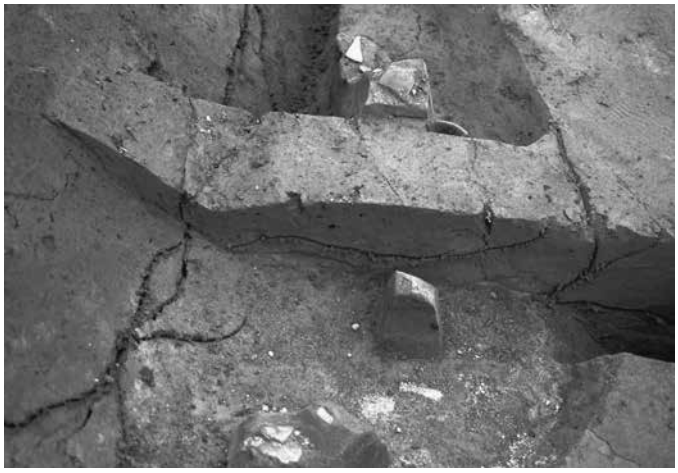
SS1136　検出状況（北から）

SS1136　遺物出土状況（西から）

SS1136　断面（北東から）

SS1141　遺物出土状況（南西から）

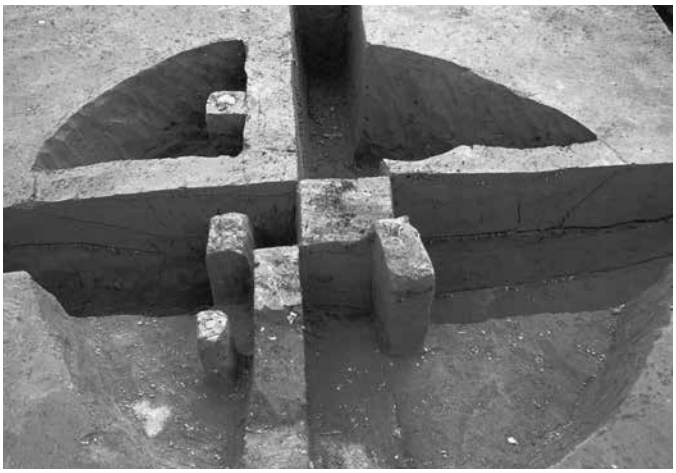
SK1124　断面（東から）



SK1124　断面（南から）

SK1124　遺物出土状況（南から）

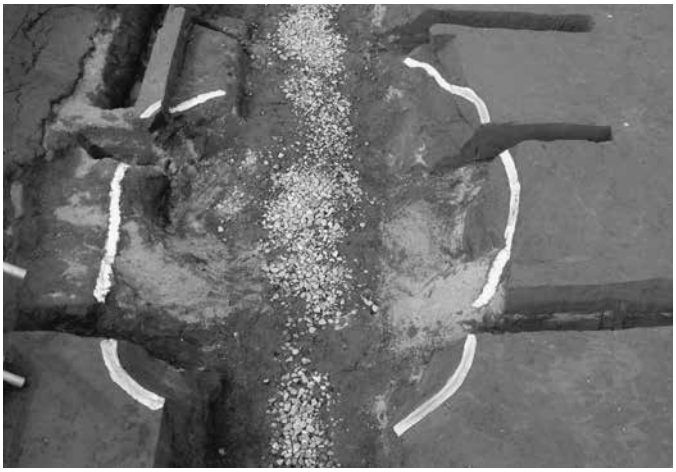
SK1124　完掘状況（東から）



SK1150　断面（北から）

SK1150　完掘状況（南から）

SX1125　遺物出土状況（南から）



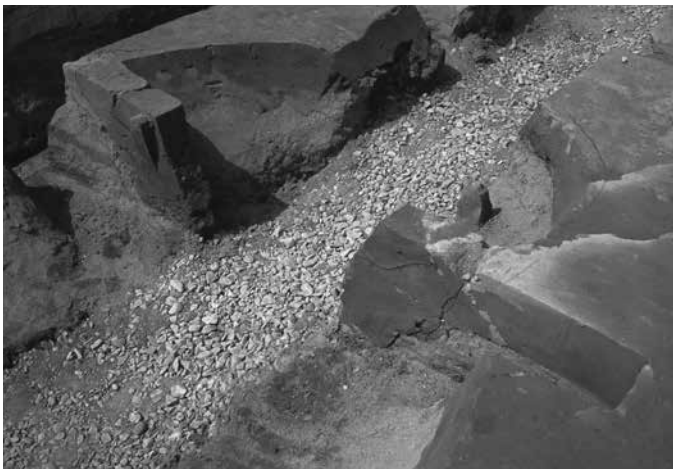
SX1125　完掘状況（南から）

SX1126　断面（南から）

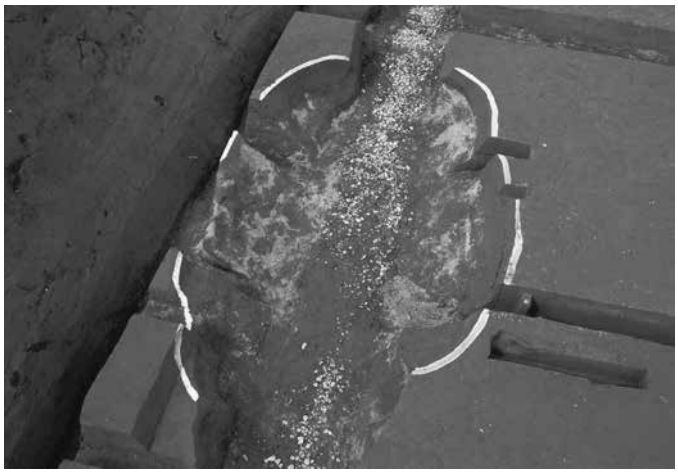
SX1126　完掘状況（西から）

SX1128　断面（東から）

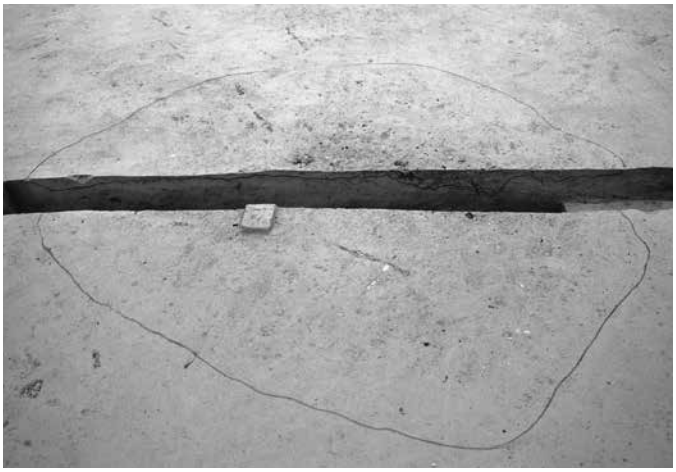
SX1128　完掘状況（南から）



SX1129　遺物出土状況（南から）



SX1129　完掘状況（南から）

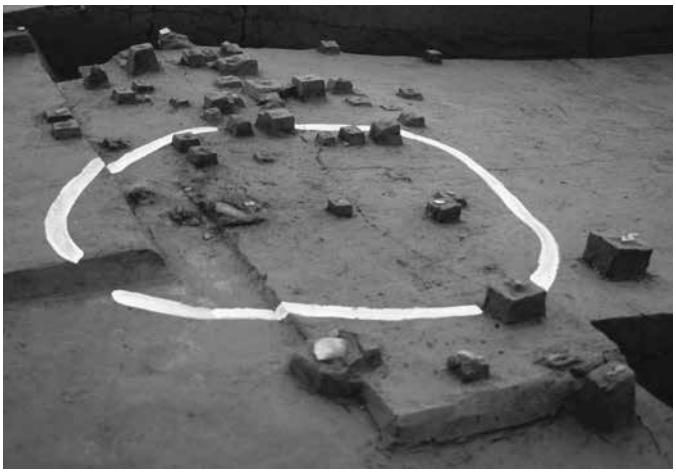


SX1133　断面（南から）

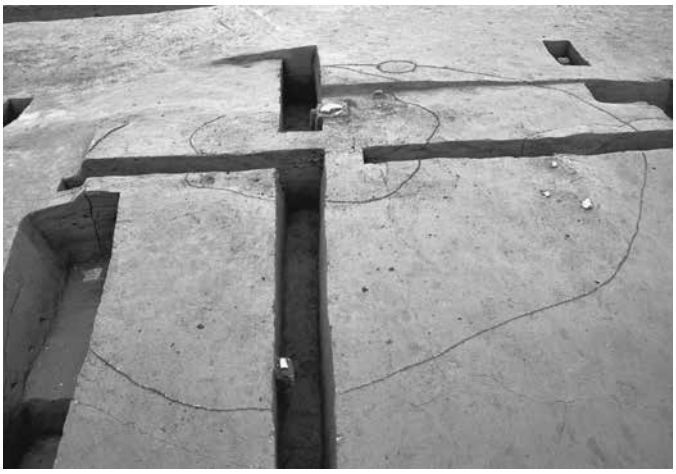
SX1133　完掘状況（南から）

SX1134　断面（南から）

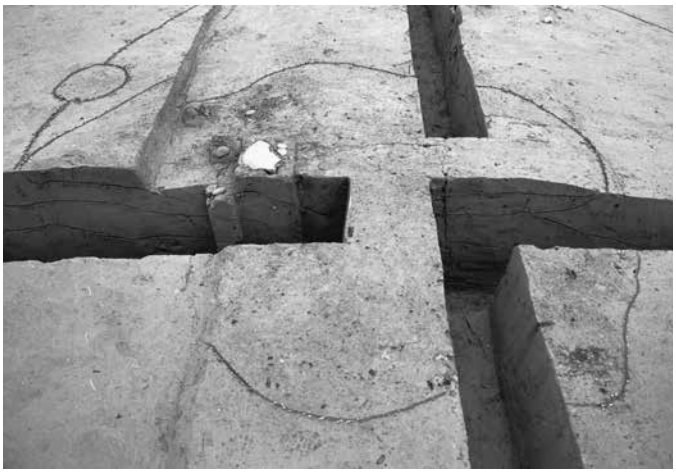
SX1134　完掘状況（西から）



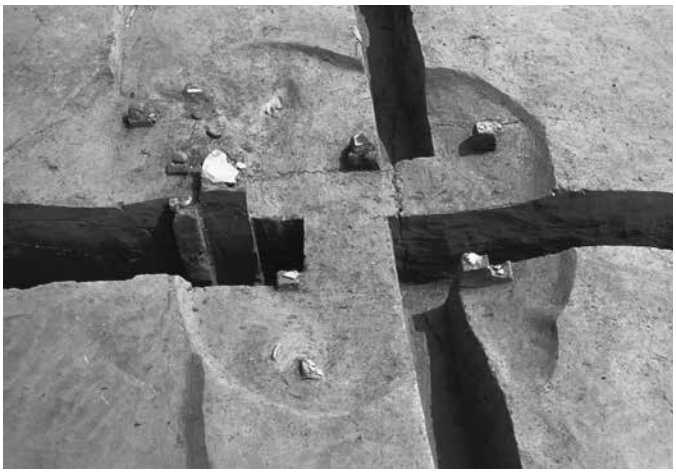
SX1138　遺物出土状況（南から）



SX1138　断面（東から）



SX1138　断面（南から）



SX1138　遺物出土状況（南から）

SX1138　1層・2層完掘状況（南から）

SX1138　完掘状況（南から）

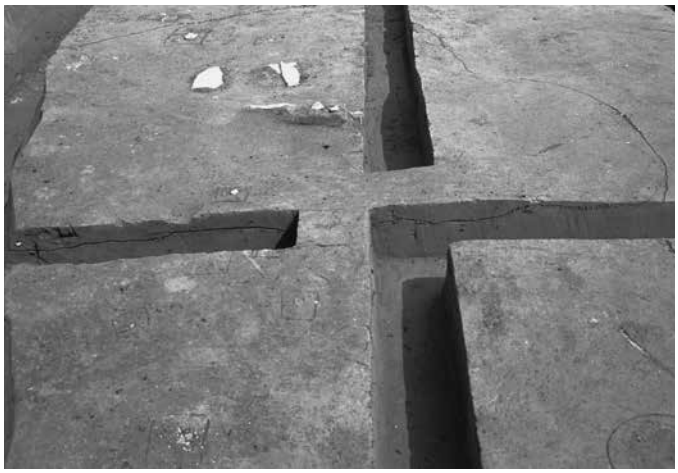
SX1139　断面（南西から）

SX1139　遺物出土状況（南から）

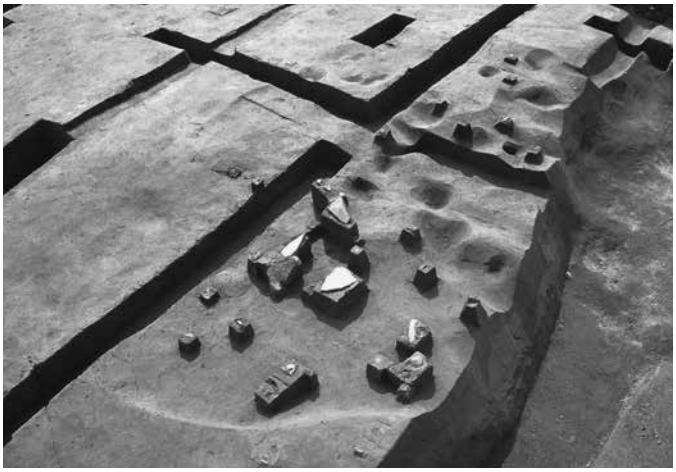
SX1139　完掘状況（南から）

SX1140　遺物出土状況（北西から）

SX1140　断面（南から）

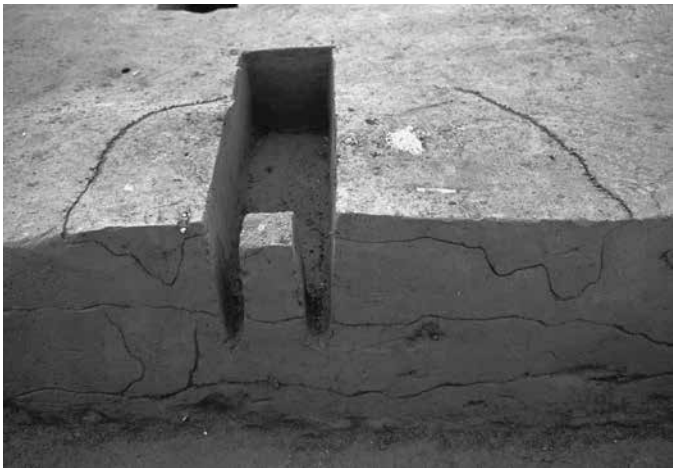


SX1140　断面（西から）

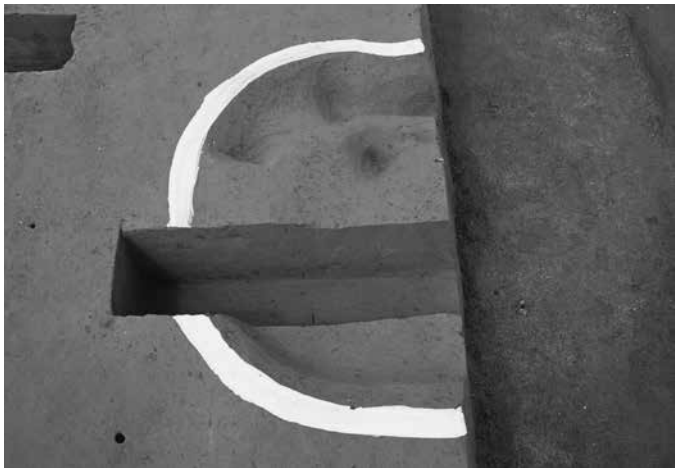


SX1140　遺物出土状況（北東から）

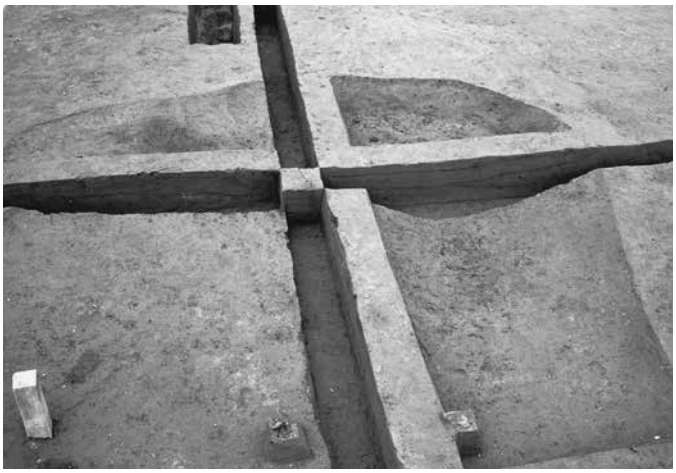
SX1140　完掘状況（北東から）



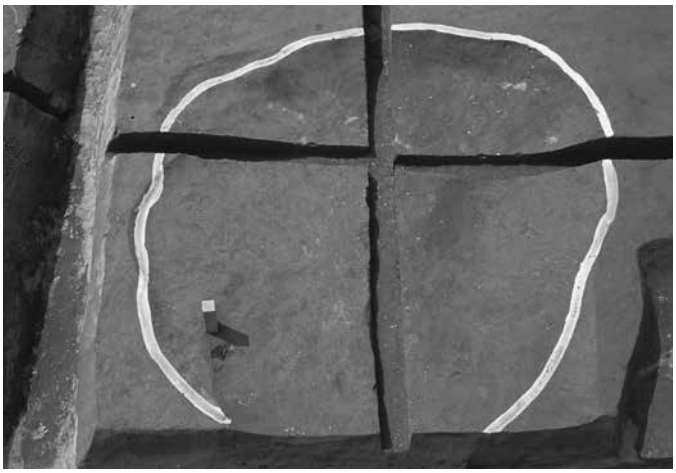
SX1143　断面（東から）



SX1143　完掘状況（南から）

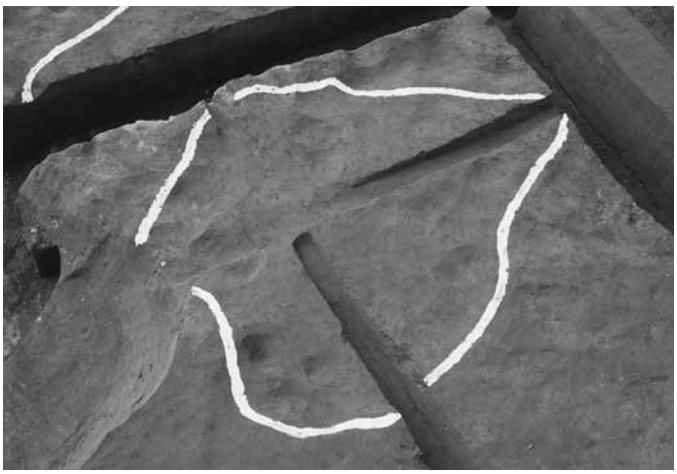


SX1146　断面（東から）

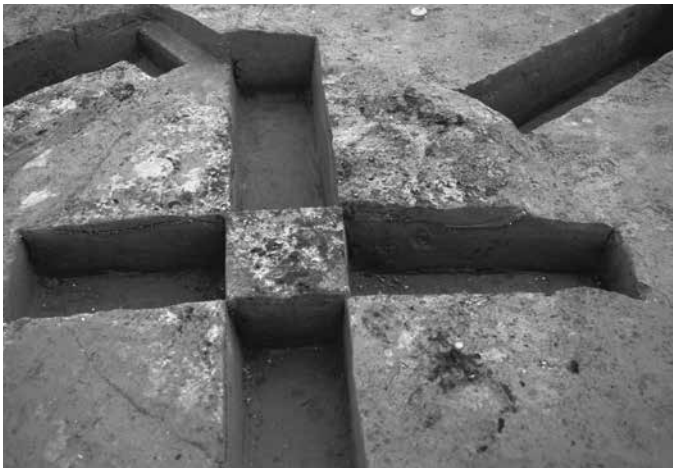


SX1146　完掘状況（東から）

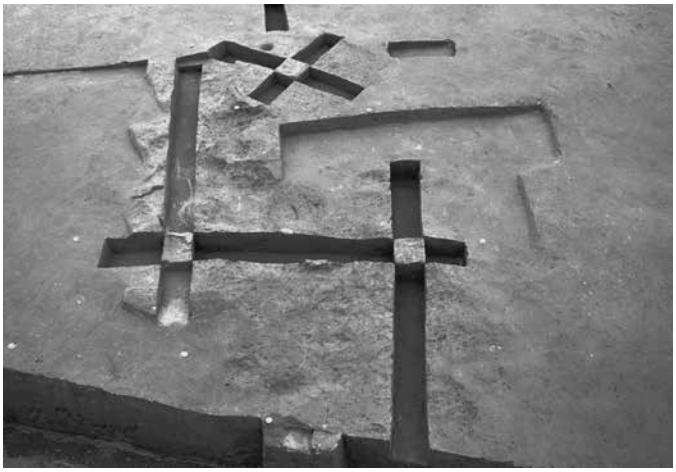
SX1147　断面（南から）



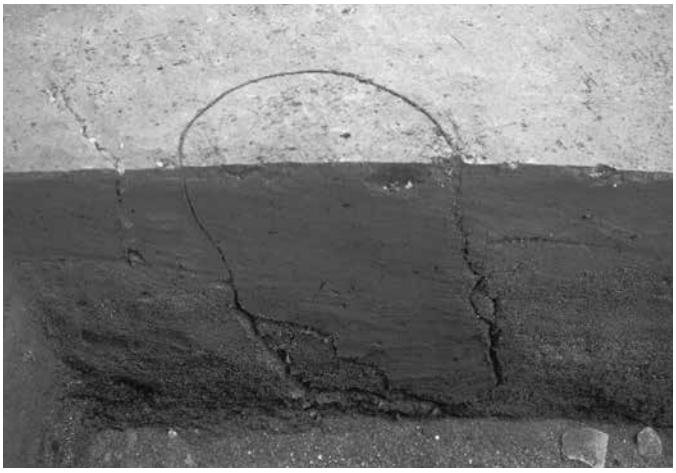
SX1147　完掘状況（東から）



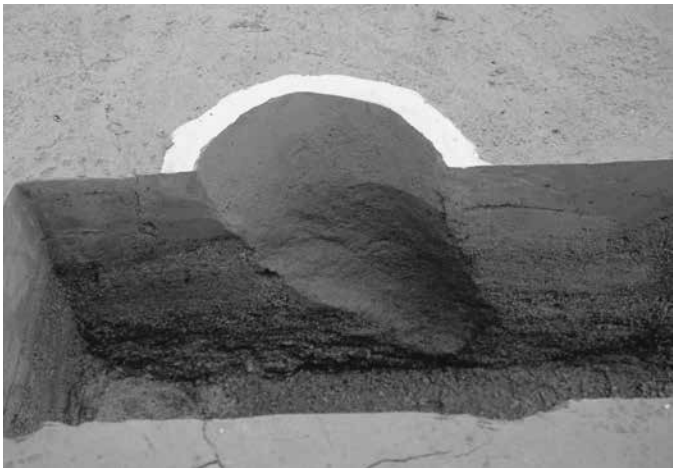
SX1152　断面（北から）



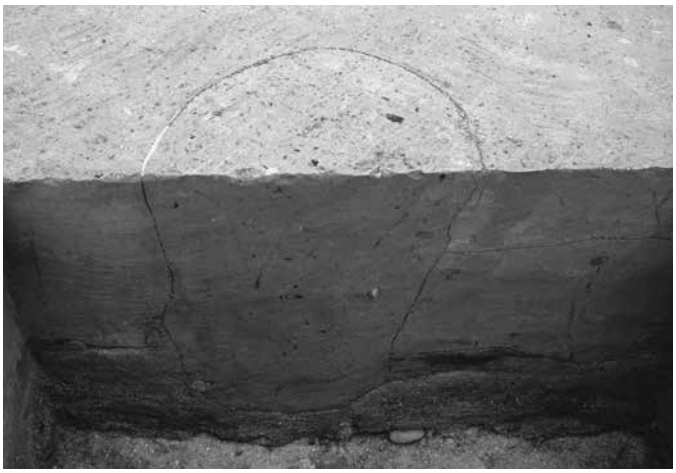
SX1152　完掘状況（東から）



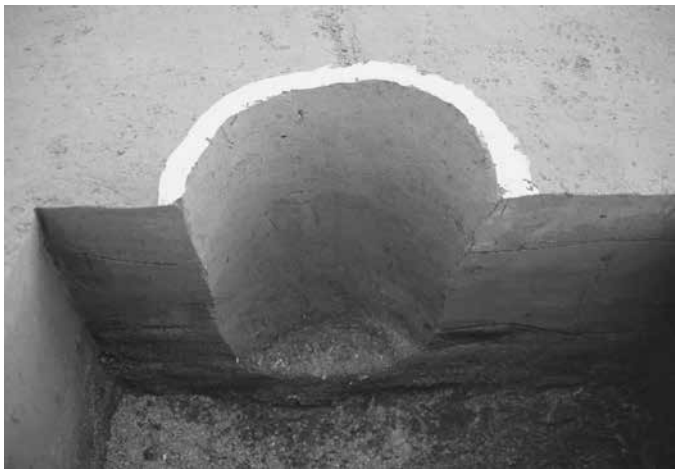
P1127　断面（南から）



P1127　完掘状況（南から）



P1130　断面（南から）

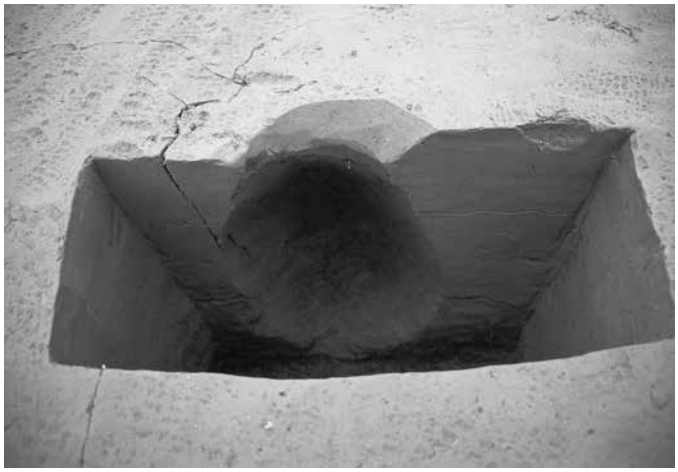


P1130　完掘状況（南から）

P1131　完掘状況（西から）

P1137　礫出土状況 1（南から）

P1137　礫出土状況 2（南から）



P1137　完掘状況（南から）

SD1142　断面（西から）

SD1142　完掘状況（北から）

SD1144　断面（南から）

SD1144　完掘状況（北から）

SD1145　断面（北から）

SD1145　完掘状況（南から）

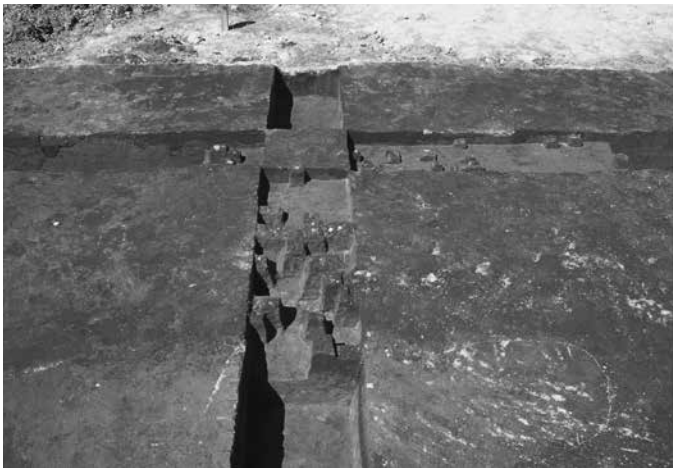
河道跡　断面（南東から）

河道跡　断面（南東から）

河道跡　遺物出土状況（南から）

河道跡　遺物出土状況（西から）

最上層　完掘状況（西から）

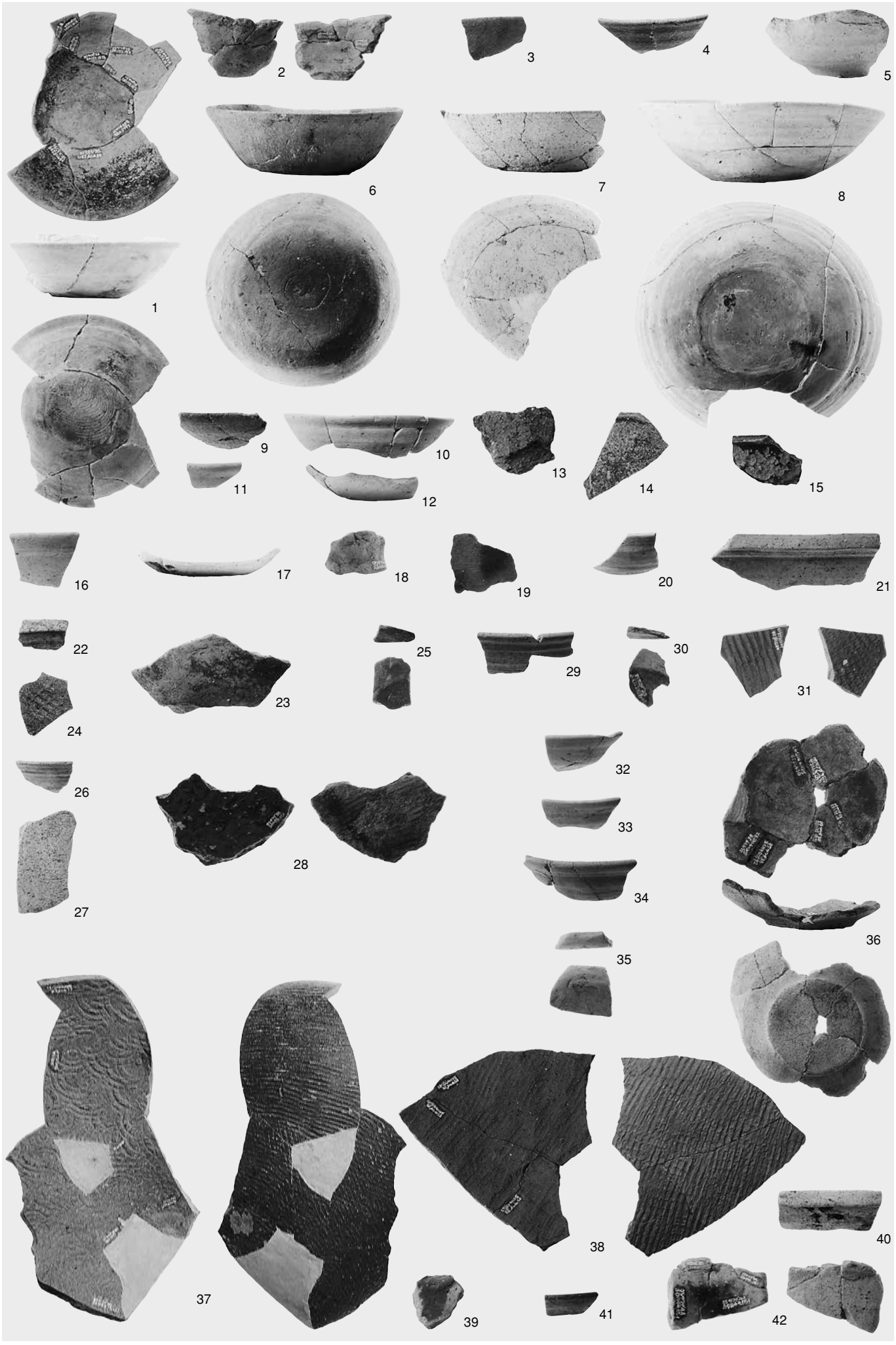


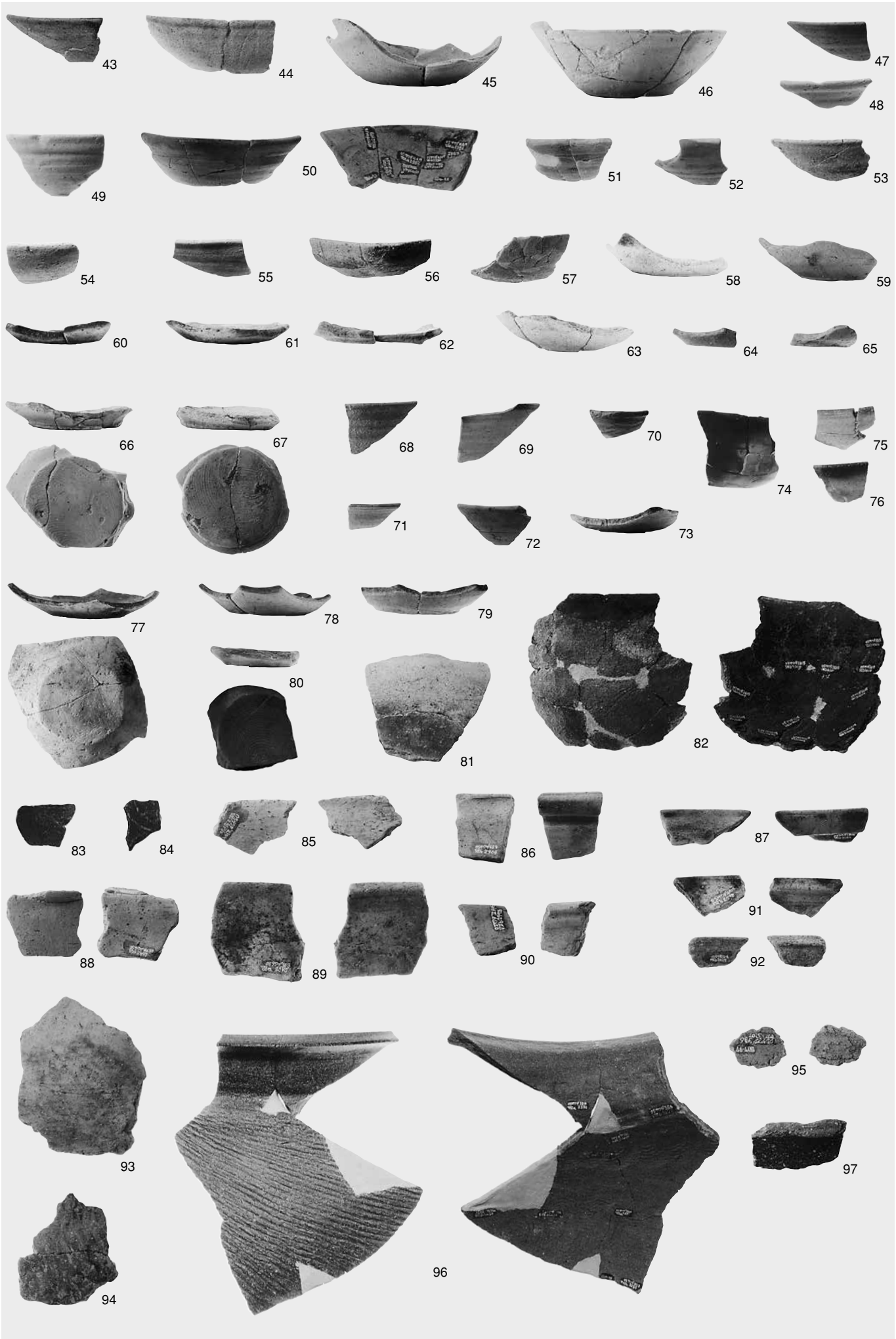
SX013　断面（南から）

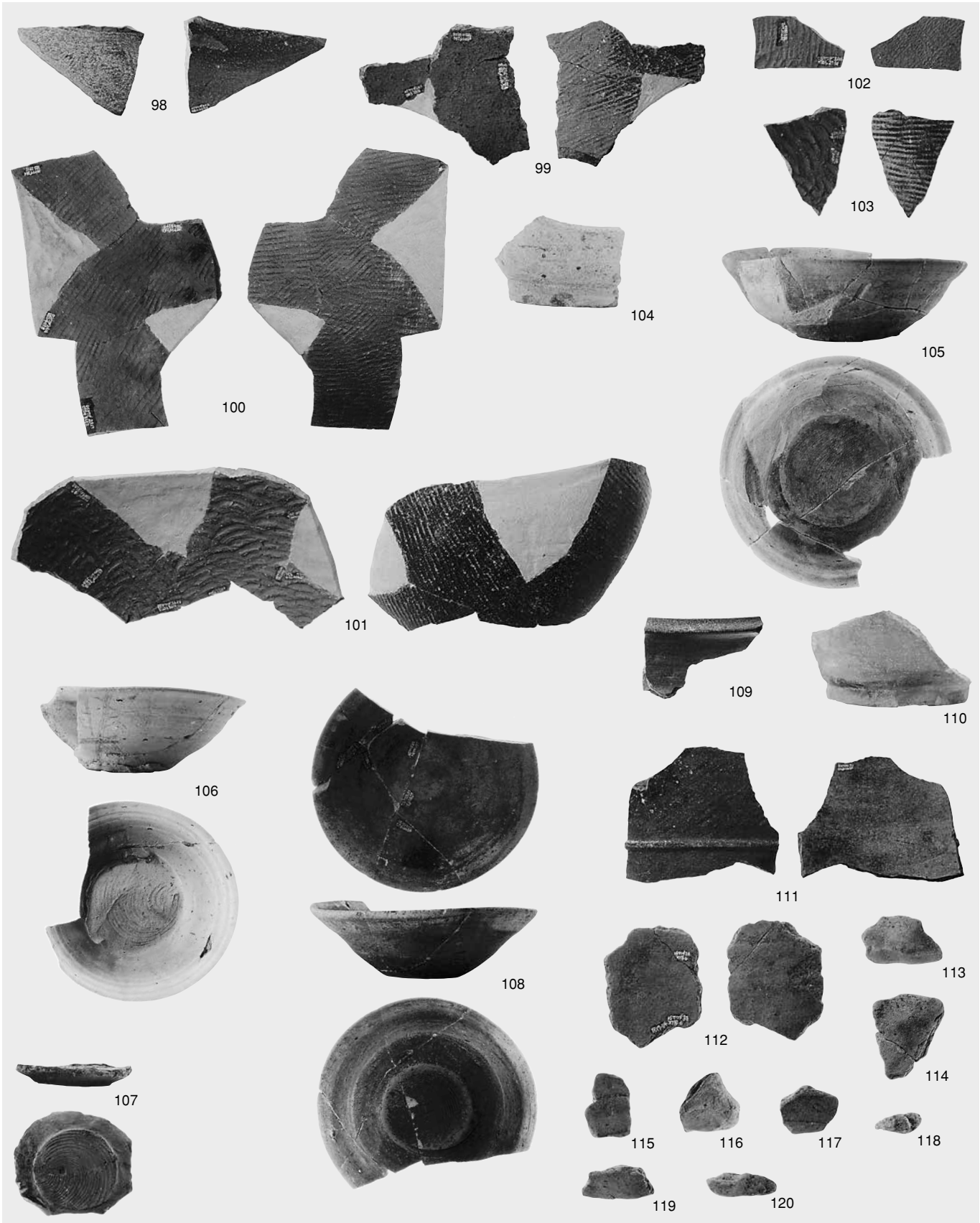
SX013　遺物出土状況（西から）

SX013　完掘状況（西から）

SD014　断面（東から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42


43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
74
75
76
71
72
73
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97

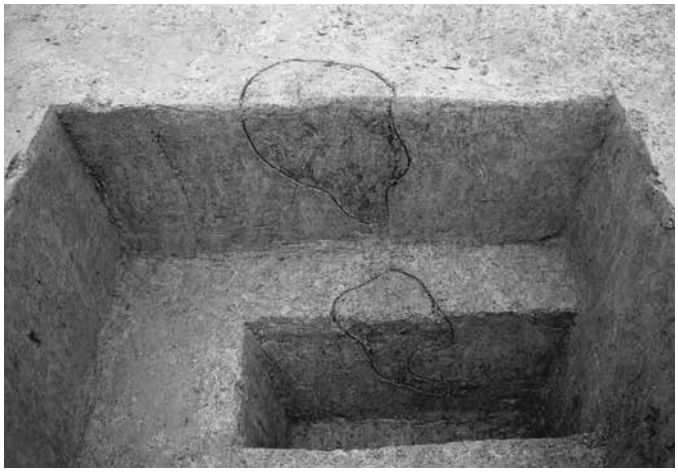

98
99
102
103
104
105
100
101
106
108
109
110
111
112
113
114
107
115
116
117
118
119
120

調査区全景（北から）

基本層序（南東から）

SD001　断面（東から）

SD001　完掘状況（東から）



P003　断面（東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	さわだいせきⅡ・さくらばやしいせき
書名	沢田遺跡Ⅱ・桜林遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	XIV
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第161集
編著者名	小村正之、石垣義則、梅澤貴司（株式会社 野上建設興業）、鈴木俊成（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団）、辻本崇夫、金井慎司、石岡智武、矢作健二、高橋敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社 野上建設興業
所在地	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団　〒956−0845　新潟県新潟市金津93番地１　電話 0250（25）3981 株式会社 野上建設興業　〒950−1136　新潟県新潟市曽川甲527番地3　電話 025（280）6620
発行年月日	西暦2006（平成18）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 関連番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
沢田遺跡Ⅱ	新潟県胎内市大字赤川字沢田1843−1ほか	15−227	157	38°4′42″	139°22′42″	20050401 ～20050831	3740㎡ （最上層830㎡） （上層830㎡） （下層2080㎡）	日本海沿岸東北自動車道建設
桜林遺跡	新潟県岩船郡荒川町大字金屋字桜林1372ほか	15−582	77	38°8′2″	139°25′12″	20050901 ～20050930	2000㎡	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沢田遺跡Ⅱ	生産跡（下層）	平安時代（10世紀前葉）	炉跡（1基） 集石（4基） 土坑（2基） 性格不明遺構（13基） ピット（4基） 溝状遺構（3条）	製塩土器 土師器 須恵器	川辺に立地する製塩関連遺跡
	生産跡（上層）	平安時代	なし	土師器	
	生産跡（最上層）	平安時代	性格不明遺構（1基） 溝状遺構（1条）	製塩土器	
桜林遺跡	散布地	不明	溝状遺構（2条） ピット（1基）	なし	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第161集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XIV
沢田遺跡Ⅱ・桜林遺跡

平成18年3月30日印刷
平成18年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950−8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956−0845　新潟市金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　北越印刷株式会社
〒940-0034　新潟県長岡市福住１丁目６番27号
電話　0258（33）0306
FAX　0258（36）9712

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第161集『沢田遺跡Ⅱ 桜林遺跡』　正誤表追加

頁	位置	誤	正
図版21	左列下から１枚目	断面	遺物出土状況
図版23	左列上から２枚目	遺物出土状況	セクション
図版29	右列下から１枚目	（東から）	（西から）
抄録	沢田遺跡　北緯	３８度０４分４２秒	３８度０４分１３秒